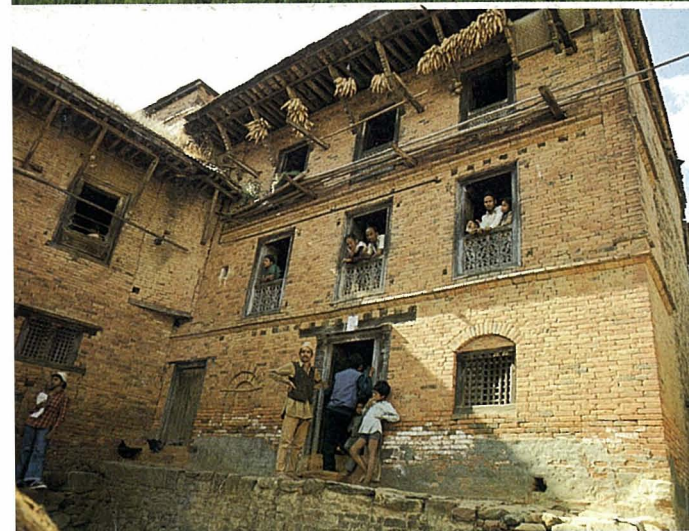


## すまいるん

季刊  
1989  
冬号

(通巻第9号) 一九八九年二月一日発行◎

カトマンズの谷に住むネワール族の住居は、大きく張り出した軒とそれを支える材料が特徴。その集落パターンの遠望と棟瓦造りの住居。――風紋より



## 特集Ⅱ 居住の原点と未来

## 目次

- 〈風紋〉聖なる高みヒマフヤの籠の小宇宙 藤井 明……2  
 〈焦点〉森を出で、森(都市)に棲む 香原志勢……4  
 居住の原点と未来――長屋、同潤会コーポラティブハウジング  
 中筋修・松山巖 司会…片山和俊……6  
 〈私のすまいるん〉  
 わがすまいるん同潤会江戸川アパート 橋本文隆……18  
 〈すまいるのテクノロジー〉  
 そこまで来たか? 未来住宅:TRON 電脳住宅 坂村 健……24  
 シンポジウム「都市住宅の明日を探る」  
 パネラー:尾島俊雄・田中好輔・得田与和 司会:太田利彦……27  
 89シンポジウム「住文化にみる近代化の足跡」へ向けて  
 〈論文〉椅子坐式生活様式の導入過程に関する考察 内田青蔵……44  
 研究助成15年 海野 勉……56  
 ひろば・お知らせ・編集後記・他……58



# 風紋





## 聖なる高みヒマラヤの麓の小宇宙

—ネワール族の集落

文と写真 藤井 明



「カトマンズの谷は太古、巨大な湖であった。ヒンドウーの伝説によると、そこにヴィシュヌ神が現われ、円盤でもって山を切り開き、湖水を流し去ったという。この伝承は地誌的に正しく、谷底の厚い肥沃な堆積層は、かつてここが湖底であったことを物語っている。

この谷には、家の数と同じだけの寺院があり、人の数と同じだけの神様がいる」といわれてきた。インドからチベットに至る交易路の要衝として栄えたこの谷では、ヒンドウー文化とチベット文化との絶え間ない混淆が行なわれてきたが、その担い手として活躍したのがネワール族である。

ネワール族は谷底の肥沃な平地を占有し、周辺の山間地の諸部族とは全く異なる文化を華開かせていた。ネワール族は約九割が農業に従事するという典型的な農耕社会であるが、その集落は極めて都市的である。彼らの集落は、小高い丘や、緩斜面で農業に不適な場所に立地する。外見的には中層の住居が密集し、閉鎖的な構えをもつが、その内部、とりわけ街路は空間的に豊かで、通り全体が集落に共有の居間的なスペースになっている。石畳の街路の随所には沐浴場（ヒティ）や休憩所（パティ）があり、またヒンドウーや土着の神々の祠（マンディール）や、小広場、作業場などが有機的に配されている。

住居は煉瓦造りの三〜四階建てで、床と小屋組は木造である。屋根は瓦葺きであるが、特徴的なのは大きく張り出した軒とそれを支える斜材である。この斜材や開口部のまぐさ・窓枠などには細かな紋様の彫刻が施されるが、とりわけ窓は職人の伎倆を象徴するものとして、重視される。

住居の内部は一般的に一階が作業場か店舗で、二階に居間、寝室が設けられる。三階は厨房と崇拜の場となるが、この最上階に厨房が来るのがネワール族の特色である。厨房の窓越しに赤い唐辛子や白い玉葱、黄色い唐黍などが吊され、通りに生活の彩りを添えている。

ヒンドウーの理想的な都市像を画像化したものにマナサラがあるが、ネワール族の集落では、自然と生活と宗教とが渾然と融和し、谷全体がひとつの小宇宙を形成している。

（ふじい・あきら／東京大学生産技術研究所助教）



FRAN P. HOSKEN: THE KATHMANDU VALLEY TOWNS, NEW YORK 1974 より



$$5 \mid 4 \quad \begin{array}{|c|} \hline 1 \\ \hline 3 \mid 2 \\ \hline \end{array}$$

- 1 / 集落全体の居間的スペースでもある街路。軒を支える斜材が特有の表情を生んでいる。
- 2 / 寺院や王宮になると、その斜材にも細かな装飾を施している。
- 3 / 寺院入口で野菜や果物を売る商人。
- 4 / 神々の祠マンディールと休憩所パティ。
- 5 / 街の随所にこうした沐浴所ヒティがある。

# 森を出で、森(都市)に棲む

生活活動の屋内化をたどる人間が、最後にゆきつくところは……

## 香原 志勢

朝からの雪降り、一応、完全武装をしたつもりでいたが、あまりの寒さに体はがたがたと震え、いつしか靴の中までびしょびしょに濡れてしまった。雪は降り続く。それでも、私を含め、観客たちは寒さに恍惚としながら、席に坐り、試合の成りゆきを見守った。

一昨年のトヨタ・カップのサッカー試合は、F・C・ポルトとアルヘンティノとの間でなされた。珍しく十二月半ばにかなりの雪が降り、試合は難行した。雪上を転がるボールは思わぬところで止まってしまう。雪原と化した国立競技場では、サッカーの常識はまったく通用しない。雪を初体験する選手もいたという。感動的なプレイも多々あったが、両チームの実力が存分に発揮されなかったのは残念であった。サッカーは悪天候でもなされるが、やはり好条件下のほうが望ましい。

スポーツは現代人が意義を認め、発展させた催しごとであるが、多くの種目は野外でなされるため、天候に左右され、時にはプレイが中止される。かつて大相撲は神社境内で晴天十日興行であったが、一九〇九年の国技館竣工とともに定期的になった。野球は天気まかせであるが、東京ドームの完成は、晴雨の影響を受けない野球新時代の魁となった。

人間は科学技術を発展させ、安逸に暮らせるようになったが、それにしても、雨の日の外出の対策がわずかに傘と蓑(レインコートは同類)というのでは情けない。これらは手や体の動きを拘束し、感触もよくなければ、完全な雨除けでもない。これに対し、衣服は裸身を心地よく保護するばかりか、本来の姿以上に人間的活動を促進させる。これほど人智が進み、自然環境を変えるくらいならば、雨・ニモ・風・ニモ・負ケナイ・雨具が考案されてもよいはずである。

かつて森は天然の家であった

野生動物たちにとり、雨天は難儀である。多くのものは木蔭、岩蔭、穴に入つて、雨宿りする。かくれ場のないサヴァンナでは、濡れそぼちつ竹み、ひたすら雨の上がるのを待つ。時おり体をふるつと震わせ、水滴をはねとばす姿はかなしい。

サル類は居ながらにして雨宿りのできる森に棲む。森林という環境は、雨、雪、風、強い日照を阻み、気温変動も小幅という点で、安定した気候を用意する。また随所にかくれ家がある。すなわち森林は天然の家屋であるが、決して完璧な家ではない。雨足のはげしい東南アジアの密林に棲むオランウータンは茂みに蹲り、葉のいっばいついた枝を折って頭上に翳し、木の間よりしたり落ちる水滴を防ぐ。その姿は、なぜか、雨漏りするあばら屋の中で傘をさして坐る浪人を思わせる。森を捨てた人間は住居を必要とした

人間はサルの仲間から抜け出し、森という故郷を背にした駿才である。森の中の生活からかち得た直立二足歩行に自信をつけたためか、あるいは未知への憧憬があったのか、人間の祖先はサヴァンナへ出ていった。そこは一望千里の地であつて、身をかくすことが難事であり、また天候の影響をもちに受けた。強い直射日光に耐えるため肌の色は黒ずみ(紫外線の皮下組織への侵入を防ぐ)、体毛は裸に近いまで消失した(それは発汗に有利)が、それは寒気に対しては無防備である。サヴァンナには風雨を阻む雨宿りの場がない。風と雨滴は露出した肌から惜しみなく体熱を奪う。直立した体に風当たりが強い。気温の日較差は大きい。晴れば日照はきびしく、皮膚は角化しやすい。乾いた空気は呼吸器の粘膜をいたぶる。広野は走行獣に有利であるが、森林に育つたサルの子孫である人間には、逃げ場すら見当たらない

い。サヴァンナと森林とでは、棲息条件も景観も、あまりに異なる。

このようなサヴァンナで暮らすさい、人間にとつてもっとも必要なのが家である。これまでの人類学の成果の示すところでは、猿人類化石の出土したオルドヴァイ谷から、積みあげられた石壁が発見されているが、これに倚りかかれ、風除けとなる。この石壁は、今日までに発見された最古の構築物である。

また、原人は雨露をしのぐだけの、即製の小舎を建てたと推測されている。これは長い枝を組み、その上を葉のついた小枝で覆ったものである。火の発見に伴い、原人や旧人は洞窟を住居とした。洞窟は雨や風や雪からばかりでなく、猛獣をも含む外敵からも、身を守る。またすぐれたかくれ家でもある。

それから後の住居は、地球上の各地にみられる諸住居からいろいろ想定される。建築資材はそれぞれの自然環境から得られる。木、草、石、泥、そして氷までもが材料となる。後期旧石器時代のシベリアでは、マンモスの骨や牙が文字どおりの屋台骨となり、骨組には動物の皮がかけられ、住居となる。文化の進歩は生活活動の屋内化を進めた

世界各地の諸民族の住居を比較し、その進展の道を考察すると、人間の諸生活活動がしだいに屋外から屋内へ移行していく傾向がみられる。まず、悪天候からの退避、睡眠、休息、育児は、どこでも屋内でなされる。炊事や食事は、大方は戸内でなされるが、一部では戸外でなされる。遊牧民は財産らしい財産は、佩用のもの以外、ほとんど持たないが、定着民になると、財産の量がしだいに増え、その大半は家の中に置かれる。ある民族は野外で用便を済ます。昔の日本の農家では、肥しを得るため、便所は戸外に設けられたが、今日では住居の必須単位となっている。体を清潔にするため、海や川での沐浴があったが、やがて野天風呂、そして浴室が用いられる。

人類史を辿るまでもなく、生業である採集、狩猟、漁撈、農耕、伐木、牧畜は野外でなされる。手工業は家の内外でなされたが、製品を傷めないために、屋内に作業場が設けられ、ついに大きな建物の工場が建てられた。青空の下、辻や広場でなされた商取引は、漸次、よし張りの中でなされ、さらに一定の場所に常設の商店が建てられるようになった。役所、会社、学校などの仕事は、建築物の中でなされる。昨今、一部作物は温室やビニールハウスで育てられ、家畜や家禽も、畜舎、

禽舎で大規模に飼養されるようになった。

遠道に行く場合、しばしば人間は歩いて行かず、馬の背を借り、また浮舟を操るようになった。発動機が導入されると、オートバイやモーターボートが製作されたが、それは騎乗や軽漕ぎ同様、身を風雨に晒さざるをえなかった。そこで、人間が入れる箱をとりつけ、馬車、乗用車、列車、屋形船（ひいては船舶）が製作された。これらはたえず乗り心地や居住性について改良され、まさしく移動する座席、小舎、家、豪邸へと発展した。

集会の場は広場から講堂へ、芝居は芝の上から芝居小舎へ移った。塹壕は砦、そして城へと展開した。公共的な聖堂も建てられ、死者の墓はしばしば家屋に擬して建立された。人間のさまざまな活動の場は、本来の機能とは質量ともに異なる施設へと変わっていった。

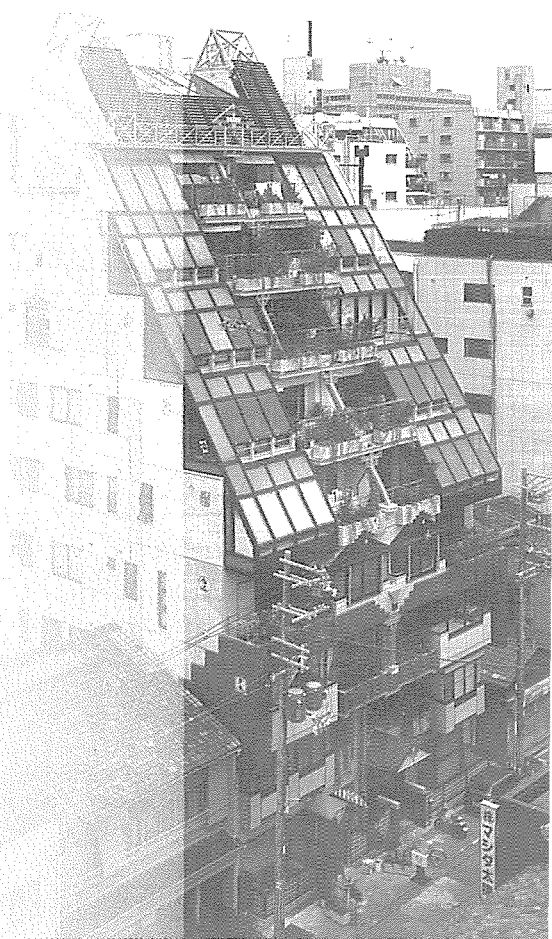
都市は森である

人間は、見透しの効かない森林から見はるかす広野へ出て、狩猟をし、平坦地に農地を切り開いた。しかし、結局はふたたび狭苦しい都市に住むようになった。森は生き物の世界であるが、都市を造形する素材は無生物であり、その間に生き活きと人間が動きまわる。森林も都市も、ともに立体構造である。前者が種々の樹木から成るように、後者は小さきまきまの建物から成る。広く自由な空間を求めながら、人間がせせこましい都市に居を占めたのは、構造と機能の点で、森林と都市の間に共通点があることに気づいたからであろう。

このように考えると、これからの人間の住居や建造物に対する思いは、ある程度予想できる。住まいとは、人間の体と活動を包含する容器である。野球場をドームの中に収めたように、将来、農場さえ何らかの構築物の中に包みこんでしまうにちがいない。おそらくは、都市全体が一つの巨大な蓋の下に収納される日も近いことであろう。今日発達している地下街はその先陣であり、雛形といえよう。

ただ、そのさい危惧すべきは人間の脆弱化である。安定した気温下でしか活動しないとしたならば、人間は、変温動物であるヘビや昆虫と同じことになってしまう。絶えず変動する気候の下でも活発に活動するのが恒温動物である。そう考えると、たまには寒さに恍惚としながらも、雪中のサッカーを雄々しく観戦できる余裕が欲しい、と敢えて言いたい。

（こうはら・ゆきなり／立教大学一般教育部教授・人類学）



# 居住の原点と未来

## 長屋・同潤会・コーポラティブハウジング 「都市居住の原風景」から未来を語る

大阪の下町に生まれ育ち、都心に住み続けたいという思いから都住創を設立、長屋を縦に高層に積んだ形式として、自らコーポラティブハウジングを押し進めてこられた中筋修さん。都住創はたくさんの可能性のなかのたった一つを提案しているに過ぎず、早く、皆で知恵を出しあつて、新しい日本型の都市住宅のタイプを發明しなければいけないとおっしゃいます。

松山巖さんは東京下町の職人町に生まれ、急変貌してゆく街への絶ちがたい思いから過去を振り返る。そして江戸川乱歩の小説の舞台となった一九二〇年代の東京を描いた『乱歩と東京』は第三八回日本推理作家協会賞評論部門賞を受賞しています。

このお二人に、自らの「居住の原風景」をもとに、未来の居住のイメージを、そして今、何をしなければいけないかを、話し合っていました。

都住創12号内淡路町 (写真/松村芳治)

片山(司会) 本号の特集テーマ「居住の原点と未来」は、非常に幅が広く奥行きが深い、むずかしいテーマです。少しテーマを絞って、都市居住ということにしたいと思います。

中筋さんは、今の時代にコーポラティブ・ハウジングで都市居住のことを試み、考えておられるし、松山さんは一九二〇年代あたり、概そ六〇〜七〇年前のことに非常に興味があって、そこから都市と居住という問題について考えておられる。著書の『乱歩と東京』の中に、今と昔とが二重写しになるようによく似ている、一種の祖型と考えられるという話がありました。

中筋さんの試みを試型と呼ぶとすれば、このおふたりに対談をしていただければ、居住という問題について、祖型と試型を考えることになり、今日のテーマにふさわしいと思ってお呼びした次第です。それから、中筋さんは大阪でご活躍ですし、松山さんは東京の愛宕山にお住まいですから、東京と大阪という対比からのお話もあるのではないかと思います。

それでは初めに、コーポラティブを始められた動機について、中筋さんにお話を伺いたいと思います。

### 〈居住の原風景——大阪の長屋〉

中筋 コーポラティブの話というのは、善良な人たちが集まって組合をつくり、それでもって安くマンションをつくって、めでたしめでたし、という非常にグサイ話なわけです。だから僕は、あまりコーポラティブということで話をしたくないし、もう少し別の観点からの話にしたほうがいいかと思えます。

先ほどご紹介にありましたように、僕は昭和一四年に大阪で生まれておりまして、ずっと一貫して大阪に住んでいます。アメリカに一二年いた時期はありますが、それ以外は、ずっと大阪にいるわけです。

大正の末から僕の生まれた年あたりまで、僕が生まれ育ったまわりの環境は、すごい建設期だったわけです。ちょうど一九二〇年代の後半から三〇年代にかけて、当時の大阪は、日本でもいちばん人口が多くて、昭和一五年に

司会

片山 和俊

(かたやま・かずとし)

建築家 東京芸大講師



中筋 修

(なかすじ・おさむ)

建築家 ヘキサ共同主宰



松山 巖

(まつやま・いわお)

評論家 東京理科大非常勤講師

たしか三二五万人ぐらいだったと思います。今の大阪が二六〇万人ぐらいですから、今よりはるかに大きかった。人口の伸びをみると、だいたい年間一〇万人ずつふえている。二〇年間に二〇〇万ぐらい人口がふえたわけです。そんなにごい人口を迎えて、それになんとか都市住宅を提供していったという輝かしい実績があるわけです。

それはどういふことかという、大正の末期に、大阪市内の市街地の面積の何十%かに相当するような土地区画整理をやっている。碁盤目に切りまして、道路の幅は必ず四メートルあって、それぞれの建物を一尺五寸(四五センチ)の壁面後退にするというふうな厳しいルールのなかで、都市住宅があつという間に何十万户も建設されたわけです。いわゆる長屋ですね。長屋というイメージはあまり良くはないんだけど、大阪の昭和初期の長屋はすごくレベルの高いもので、前庭、後庭があつて、小さな門扉があり、なかなかきれいなものなんです。たった一五年か二〇年の間に建設されたものですから、みんなすごく似通っています。その微妙な差異がまた面白いというようなことがあり、いまだに保存状態がいい部分がございます。そんなことを調べてまわった時期もあるのですが、とかく僕の原点は、そういう大阪の都市住宅の原型みたいなものにあつたわけです。

### 〈都住創をはじめた動機〉

大人になりました、結婚生活を始める。公団の2DK、四〇平米一二坪、田の字型プランというところにいきなり押し込まれたわけです。育った家は一〇坪ぐらいのでっかい家だったので、のびのびと育ったわけですが、自前で生活を始めるとなると、2DK、田の字型、一二坪となるわけですね。自分で土地を買ってなんとかということは不可能ですし、僕は市内から一歩も出るというふうな考えはまるでありませんで、市内とにかくへばりついていたかった。そうしようと思うと、公団住宅に入るか民間のマンションを買って入るかというふうな、そんな選択しかないわけです。いろいろ見ると、ろくなものがない。僕は建築の設計が仕事ですから、もう少しましなものができるんじゃないだろうか、ろくなものがなければ自分でやるしかないのではないか、というのが都住創の始まりです。

都心部に高層で住む。僕らは低層二階建ての長屋という形式をもっているわけです。そういうものを高層に置き換えるということが最初から僕の頭の中になかった。隣り近所知り合い同士で生活するとか、ちよつと米が足りないから隣りにいって借りてくるとか、そういう感じのものが高層だつてできるのじゃないか。公団住宅とか、民間マンションには、なかなかそういう横のつき合いなんて、ないんですね。縦に積んでも、ああいう長屋みたいなものはきつとできるに違いない、と。

土地の値段はどんどん上がってきていますから、土地の値段を消化しようとする、とにかく高層に積めばいい。いま一億円の土地だつて、容積率という觀念さえはずして五〇〇階建てぐらいの建物がつくれれば、土地代なんていうのはほとんどゼロになってしまう。商業地域のなかで容積をいっぱい使っていけば、土地の値段はどんどん下がっていくだろう。で、高層にしてしまう。それも全部知り合えばかり集めて住めば、なんとかデザイン的にも面白いものになるのではないか。当時の民間のマンションですと、いいところ一八坪とか二〇坪とか、そんなものですよ。僕らの生活というのは、

せめて一〇〇平米三〇坪ぐらいないと、まともな、憲法にいうところの文化的な生活すら営めないのじゃないかというような、いろいろなことを考えて、それじゃ自分たちでやるかということで、友だちをかき集めてスタートしたというのが実情なんです。それが昭和五〇年のことです。

もちろん多額のお金がかからむ、数億円の話になるわけですから、そんな単純な話だけでは済みません。弁護士の問題とか、いろいろな問題があつて、それはずいぶん僕らなりに研究もしましたけれども、考えはとにかくそういうことです。友だちをかき集め、都心部の便利なところへ、できあがつていく社会資本のところへ僕らがすり寄っていく。そこへプラグインすればそれでいいじゃないか、できるだけ高密度な都市住宅をつくれればいいじゃないかということです。

### 〈都住創——アメリカのアパートと大阪の長屋のミックス〉

僕たちは積層型の住宅の歴史をもっていないんです。いわゆる積層型の住宅というのは、他人の屋根の上にだれかが住むことであつて、僕の家の屋根にはだれかが住んでいる。もちろん、松山さんの著書によく出てくる同潤会とか、戦前に多少の試みはあるんだけど、一般的には、そういう歴史がいつさい欠落しているわけです。西側の先進諸国のなかで、そういう積層型のアパートメントの歴史をもっていないのは、たぶん日本だけじゃないか。めずらしい国だと思うんですね。

そのモデルになるのは何かというと、やっぱりアメリカ。アメリカだつて、アパートメントの歴史はそんなに古くはない。もちろんテナメント（長屋）という流れは、一九世紀の始めぐらいからずいぶん建設されていますが、いわゆるちゃんとしたアパートメントの歴史というのは、今世紀になってからなんです。だいたい一九一〇年代から三〇年代、今のアメリカの住宅のストックというのはその年代にできた。だから、そういうものを少し調べ、それから、それを真似したつてしようがないわけで、日本的にどう置き換えるかといったときに、モデルになるのは、たぶん大阪の昭和初期につくられた

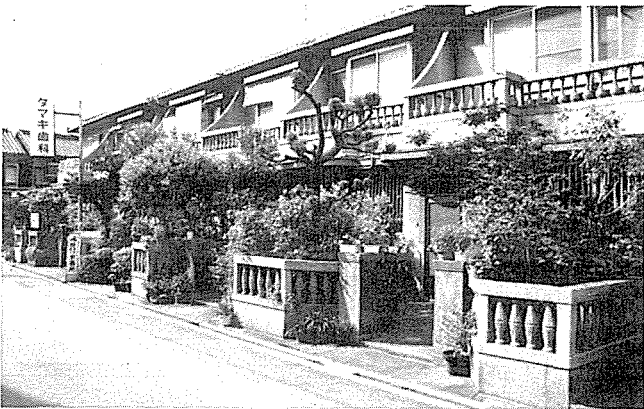
長屋であるというような、そんな変なミックス、考えられないミックスで暮つて、都住創を始めたわけです。

以来一三年になります。えんえん同じことをまだ飽きもせずやっています。今一五号目が工事中、一六号と一七号が設計中です。その次に東京で初めて一つやるのです。一八号まで予定が立っています。入居した人の数は知れているんですが、二〇〇世帯ぐらいです。その人たち同士のコミュニティみたいなものも、変なコミュニティがどんどん育ちつつあります。だから、僕が最初にイメージしていたものと同じと近い線で、一三年後になんとかできつつあるというのが現状でございます。

片山 こんどは松山さんに、一九二〇年代を振り返つて、都市居住についてどう考えるか、というお話を伺いたいと思います。

### 〈居住の原風景——芝界限〉

松山 今、中筋さんが原風景の話をしたので、僕もそのあたりからお話し



門構えがあり、前庭がある昭和初期の大阪の長屋(上、下とも)

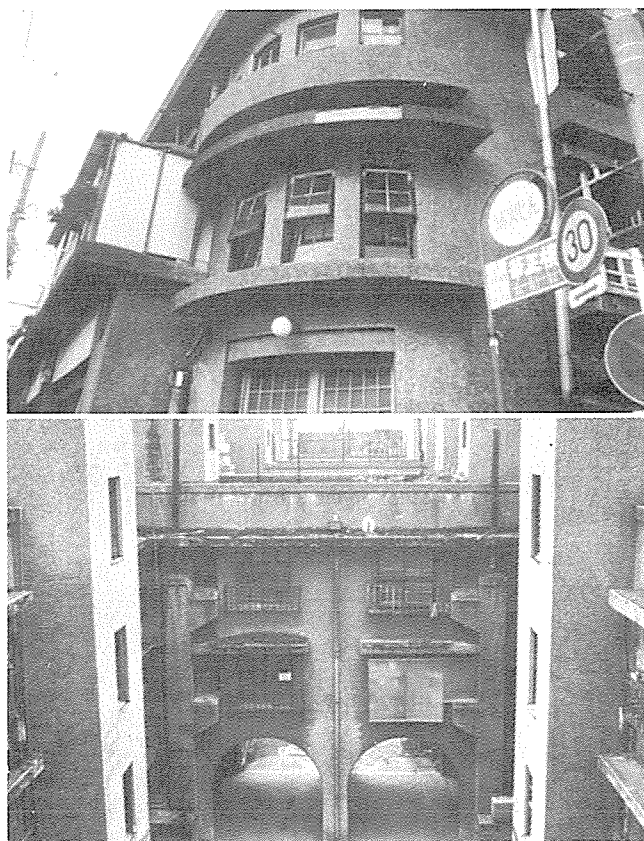


べりしたいと思います。僕が生まれ育ったところは、今はかえって分かりにくいんですが、芝の愛宕山です。曲垣平九郎まがきへいくわうでよく知られているんですが、今では霞が関ビルと東京タワーの真ん中あたりと言ったほうが分かりやすいと思います。古い長屋のようなものも残っていたり、あのへんは洋家具屋や自動車部品屋が多かったり、つまり職人の街だったわけですね。僕の生家は、じいさん、おやじがやっていた仕事は石工。小学校の友だちを見ますと、家具屋の娘、ペンキ屋の息子、八百屋、パチンコ屋、酒屋、床屋、そういう街と非常に密着して暮らしている人たちのなかで、僕は生まれ育ったわけですね。おやじが石工をやっていることもあって、それに近いような仕事、高度成長になって建築という仕事は儲かりそうだし、それこそ原田康子の『挽歌』じゃないけれど、建築家というのはカッコいいんじゃないかというイメージがあつて、大学に入ったわけですね。卒業後も、大阪万博があつたり、東京オリンピックのあとで高度成長がそのまま続いていたものだから、就職もしないで、フラフラしていたわけですが、ふつと気がついたときに、自分の住んでいた街を振り返るといふ時期があつたわけですね。

### 〈都市化と原風景のズレの確認〉

僕の生まれた小学校は、ちょうど東京オリンピックの年に壊されて、廃校になっている。つまり、僕自身は都心に生まれたという意識はなかったんですが、いつの間にか最も過疎のところになってしまつて、小学校がなくなつた代わりに、霞が関ビルのような超高層が出てくる。そういう周囲の環境と、自分の原風景、心象風景のようなものがそのころからズレて見え始めたわけですね。それが見え始めたから、振り返るようになったのだらうと思うんです。

僕は、都市に住むということについて、今も同じところに住んでいるので、いろいろな苦労をしなかったせいもあるのかもしれませんが、中筋さんのようには見なくて、つまり、あらためて都市のなかに住むというのじゃなくて、自分のなかの心象風景と環境とのズレみたいなものがひどく気になり、住ま



上／同潤会山下町アパート 下／同潤会平沼町アパート

いとそういう人たちの心理とのズレのようなものを確かめてみたいという、そういうことから建築を見ると、その時代その時代の人たちの心理の変容みたいなものが考えられるのじゃないかということ、最初に思いついたのが一九二〇年代のアパート群だったわけですね。

### 〈同潤会の試みと地域社会とのズレ〉

一九二〇年代、三〇年代というのは、大阪もそうでしょうけれども東京も、いろいろなメディアが勃興しますし、交通機関も地下鉄が入るまでに完備されたなかで、大都市が変容した時期だと思つたわけですね。そのなかで、初めて公けの形でコンクリートのアパートとして同潤会ができた。それを計画サイドの可能性として見たい部分があるんですけど、僕はそれだけではどうも見ることができなかった。つまり、そういうものが出てきたときに、プラスの面もあるだろうし、マイナスの面もあるのじゃないか。そういうものが必ずしも地域の人たちがうまく重なり合いながらといいますか、必ずしもすぐ

風景に溶け合っていたとは思えなかったわけです。

同潤会の建物ができたときに、まわりの人たちはどういうふうな考えにたのぞろうかな。つまり、それは、牽強付会ですが、僕が霞が関ビルを——突然超高層ができるわけですね、それについてエエツと思うと、そのまわりに、いつの間にか、1から50ぐらいの名前のついた同じような貸ビルがボンボンと建ってくる。それに囲われて僕は今いるわけですが、何か違和感がある。だから、同潤会という建物自体には、大変に今のアパートとは違った可能性があるんだけど、そうではない部分もあるのじゃないか。それを調べてみますと、同潤会の建物が建てられた下町というのは、その当時のスラムなわけですね。明治三〇年代ごろからスラムが東京のなかでいくつも出てきますけれど、そのスラムのところは同潤会のアパートが点々と建つようになる。スラムを改善するというのは、非常に名目的にはいいんだけど、名目は名目なんだ、そういうふうなうまいっていなかったのじゃないか、というようになことを調べて書いた記憶があります。何を考えたかというのは、僕も子どものときに住んでいたような長屋——今でも長屋みたいなところに住んでいるわけですが——そういう暮らしというのがあって、それがアパートの暮らしとどうズレていくか、というのがすごく気になるわけですね。たとえば、同潤会が設計したものに三河島アパートというのがあつた。ここで不借同盟というのが起きていて、何カ月もの間、借り手がつかなかった。たまたま当時の新聞を見ていたら、そういう記事が出てきた。これは変な事件だなと思つたわけですね。新しく、今までにないようなモダンな建物で、そういうところには、まわりのスラムの人たちだったらすぐ入りたいたいのじゃないかと思うと、それが入らない。それは何なのだろうか、というふうな考えるわけですね。

少しずつ調べてみると、結果的に器だけをつくっている。そういうスラムの人たちは、器だけではなく、仕事のなかで暮らした暮らしを強いられるわけですから、仕事のなかで人というのは変わっていくのだからと思うのですが、職を与えることをしないで、器だけを与えてしまった。そのことが

まわりのスラムの人たちになんか不満を残した。さらに、スラムの人たちに對して、まったくモデル住宅展示場のようなものをつくって、いかにもお仕着せのように与えてしまい、結果としては高い家賃に苦しみ、住民は外へ出るようになった。それが啓蒙されるといいますか、そういうことに對して敏感に住民たちは反発したのだからと思うんですね。

### ＜同潤会と共同性の意義＞

同潤会というのは、僕は今でも可能性は十分あると思うし、立派な面白い建物がいくつもあります。それは非常に共同性を意識している。だけど一方で、共同性を意識して、閉じられた空間であればあるほど、かえってまわりの人たちからは反発を受けてしまう。そういう新しい住まいと今までの住まいとの暮らしのズレのようなことが、その時代でも起きたのだからなと思います。

明治以降の近代のなかで、そういうことが果たしてその時代だけだったのかというのが疑問になりました。いくつか区分けをして、一九〇〇年（明治三三年）、こういう時代は果たしてどうだったのか、あるいは戦後はどうだったのか、それじゃ現在はどうなのか、というようなことを相も変わらず見ながら、原稿を書いているような仕事をしています。

片山 今のおふたりのお話を簡単にまとめてみますと、おふたりとも原風景ということをおっしゃったわけで、中筋さんは、原風景にアメリカを加えて、コーポラティブ・ハウジングというものを発想してきた。松山さんは、同じ原風景に、新しい計画とそこに暮らす人たちのズレみたいなものを確認していく作業を行なってこられた。

松山さんが今言われた同潤会の三河島アパートの例ですが、その中で共同性の問題が出されました。そこで、中筋さんにコーポラティブの経験を含んで、共同性ということについてお話をさせて頂きたいのですが。

### ＜共同性について＞

中筋 昔の長屋は、もともと共同体的なおいが強いんですよ。それはどうしてかというのと、貧しいから何かを共有するという形で、共同というのがあったと思うんです。

それと、今の同潤会の話に戻りまして、あれは理想的な形での共同性ということとをわりと追いかけたんですよ。それはそのころの世界的な風潮だったと思います。ちょうどアメリカでも一九二七～八年から三〇年ぐらいにかけて、そういうタイプのアパートがいくつか建設されているんです。それはいまだに残っていますが、国連ビルのごく近くに、チューダーシティというのがあります、これは六千戸ぐらいかな、一五階から三〇階建てぐらいのコンプレックス。下にクラブ室があったり、中庭にミニゴルフ場があったりと、共同体的なことをかなり意識して建てられた。もう一つ、ロンドンシティというのがあります、これも一九二八年ぐらいだったと思いますが、二千戸ぐらいの巨大なアパートメントなわけです。そこもやはり共同の施設をほとんどつくっていつている。同潤会との一つの違いは、アメリカのそういうタイプのものは、機能したんですね。

同潤会のほうは機能しなかった。そこにそれ以前のある種の都市の厚みみたいなものがあるんじゃないか。先ほど松山さんがおっしゃったんだけど、形だけを持ち込んできても、人はそれに対してある種の拒絶反応しか起こさない。そのへんの事情は今だに変わっていないのじゃないかなという気がします。やっぱり都市の建築というのは、それを使う人、ソフトのシステムと建築とがセットになっていないと、ほとんど機能しないわけですよ。オフィスだとかホテルだとかというの、だいたい馴じんだんじやないかと思いますが、こと住宅に関しては、僕は今だに日本では、都市のなかでの高密度な日本型の現代的な住まいというもののソフトを、まだ開発していないような気がする。僕はあわて者ですから、ならば自分でやってみようというの、コーポラティブにパツとつながってしまうわけです。松山さんは僕みたいなあわて者じゃありませんから、じっくりと観察をなされるようですよ(笑)。

### 〈共同性の消失と現代の都市居住〉

松山 いや、僕はそのときに、やってみようとは思わなわけですね。そのところで僕は、もうダメなんじゃないかと思っちゃったんですね。つまり、子どもときから住んでいたまわりの友だちも、いま残っているのは二、三人ですが、隣近所の人もほとんど知らない人になっている。まったくエイリアンになるわけですね。そういう人たちが暮らしている——おそらく大阪と東京の違いはかなり大きいと思うんですが——そういうなかで、僕は建築にもなんとなく断絶感がありますね。こういうところで何か、個と組織といいますが、ネットワークと言いますが、そういうものがうまく重なれば、そういう街ができていたと思うんです。ところが、中筋さんがおっしゃるように、そのところがまだ日本では曖昧で、そのときにどっちをとるかというときに、僕は個人のなかで何かを考えていくことをとりたいと思ったんですね。だから、つながっていくこと、あるいは再生しようということをはほとんど考えてなかった。

僕は本当に路地のなかで、おやじが縁台将棋をやっているようなところで暮らしていたし……。

中筋 僕もそうです。

松山 職人の家ですから、毎日のようにだれか来てはメシを食べていたり、一〇時というソバを食べていたり、夜なんかいつまでもガチャガチャ……。それから、これこそ貧しい時代ですから、うちには終戦直後、小さな家なのに3家族ぐらい住んでいたわけです。それで、こっちは七輪で何か炊いている……。

中筋 まったく一緒ですよ。

松山 それがいいかどうかは別として、そういうのが原風景としてあったときに、それをもう僕のなかでは失ってしまったものとしてしか見ることができない。それを再生することが果たしてできるかと言ったとき、もうほとんど外側にいる人は異人としか見えない。そういう人たちと何か共有すること



ができるとするならば、むしろ自分自身を形づくっていかないと、どうしようもないのじゃないかという考えがありましたね。

それともう一つは、建築の設計をつまり住宅なんかを少しはやったわけですよ。そうするとどういことが起きるかという、奥さまたちが婦人雑誌と住宅のノウハウを書いた本をドツと持ってくる。夢がシステムキッチンだの何だのというのにワツといくわけです。それを僕らはアッセンブルするだけ、それほど期待していないと言いながら、それを組み合わせるだけで終わってしまう。たかだかそれだけのものでも、何千万あるいは何億円近いお金を使うわけですから、そういうことについて、果たして僕はこんなことをやっていたいいのか、という疑問があったわけですね。

だから、それで断念したなかで、いかにそういうものがダメになっていくか、これから僕はもつとダメになると思うんですが、そのダメになっていくのをせめて見届けようじゃないか(笑)、そういう意識がありましたね。

中筋 松山さんて、見かけによらず、わりと悲観的なんですよね(笑)。お会いして話をしていると、もつと楽観的な人物のように思える……。

松山 そうじゃなくて、ある意味でそれは夢のようなものかもしれないけれど、理想の世界があったというふうに、なんとなく思っているわけですよ。

それが奪われたと、怒っているからどこかで悲観せざるをえない。そういう意味では、逆に僕は明るいと思っています。悲観的なやつが非常に明るく思っていて、逆に、脳天気……。

### 〈都市住宅の原点(祖型)——場所性と混在性〉

中筋 じゃあ僕のほうが暗いんだ(笑)。

僕はわりとしつこいところがありましてね、なかなかあきらめきれない。僕は大阪の町中に生まれて育ってまずでしょう。だからそこから動きたくないし、私のうちは町工場をやっていましたから、裏で何十人かの従業員の人が仕事をしているわけですし、親の働いている姿を見ながら育っている。最近の郊外のタウンハウスとか一戸建ての町があるでしょう。僕はああいうと

ころへ行くとき持悪いですよ。昼間行きますと、女性と子どもしかいないですよ。あれは何だろうと思う。本当に。ある種の猥褻さを僕は感じるわけです。

僕の頭が堅いのかも知らないけれども、どこかで人が働いていて、そこに住んでいて、パチンコ屋とか、ヌードスタジオとか、怪しげなものもどこかにあって、一杯飲むところもあって、そういうゴチャゴチャとしたものが重なっているのが「都市」じゃないか、というイメージがずっとありますね。そういうところでない僕は生活をしたくないと思っているわけです。

都住創を始めたのも、そういう生活をとにかく続けようとしたわけで、結果的に見ますと、町中の人間ばかり集まってきたんです。僕は「都市二世」とか「三世」という言い方をしますが、一代目の人は僕らのところへはあんまり来ない。つまり、一〇年ほど前に九州から来て大阪で仕事をしていた家庭をもつというタイプの人じゃなくて、僕みたいに、大阪の町中で生まれて育った連中がけっこうまだ残っているんです。東京より大阪のほうがも



都住創13号スパイヤー(右)と10号釣鐘町(左)の南面

う少し残っていると思う。

そういう連中は、住宅の形は変わっても、むしろ場所にこだわっている。

住宅が二階建てであろうと一〇〇階建てであろうと、その変化にはわりとスツと馴じめるような気がする。意外と場所に関してはこだわっているという気がずいぶんしています。僕らのやっている都住創は、一つの新しいタイプの町家だと思っっているんです。あれは住宅専用じゃなく、全部事務所を入れている。だいたい二五%から三〇%ぐらいはオフィスです。オフィスと住宅を僕はとにかく共存させたかった。いまさら町工場と共存もできませんし、大阪の都心部で町工場の時代でもありませんから、唯一生産的なものというのはオフィスなわけです。グラフィックデザインの事務所とか、僕らみたいな建築の事務所とか、そういう連中を下のほうに入れて、上が住宅。僕の育った兼用住宅、裏が工場で前が住宅、それを無理やり縦に積んだというようなことにまだこだわってやっているのが、都住創なんです。しつこいんですよ(笑)。

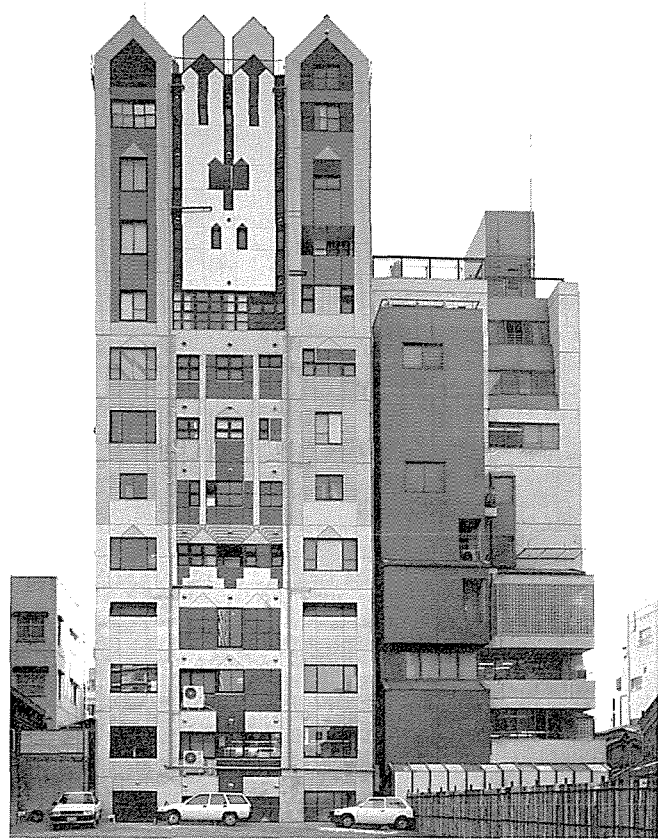
松山 僕なんか、原風景としては、デザインする奴らより何かものをつくっている連中って、いいなと思うわけです。それはなぜかというと、町のなかでそういう人たちがそれなりにネットワークでつくれたわけですね。たとえは窓が壊れた。そうすると直そうじゃないかと人が来る。水道が漏ったら隣りのおじさんが直しにくる。そういうのを子どもとき見ているわけですね。おやじが石をたたいたり、大工が来たり、畳屋が来たり、あるいは商人にしても、八百屋、魚屋がどういふふうに売り買いをするかというの、ああやって人とうまく話をするし、それで値切ったり、逆にふっかけたりするんだなど。そういうので人ととの会話の世界とものをつくるという世界——今でもそれがありうべき世界だというふうには思っっているんですね。だから、東京なんかで文章を書いているというのは本当に虚業ものですけど、せめて居職だと思っっています。オフィスというものがどうしても自分のなかで馴じめないんです。それが違和感としてどうしてもある。

### 〈都市における居住システムの崩壊〉

片山 お二人とも同じような環境に育ちながら、拒絶派とそれを積極的に作っていく派ということになっているわけですね。そのときに、大阪というのは、個と組織、個と社会の間に何か大阪特有のものがあるんですか。

中筋 そんなことはないと思いますよ。これは東京だって似たようなものだと思うけれど、場所にこだわっているというような連中が集まってくると、だいたいある種の暗黙の了解がみんなありますでしょう。だから似たような人でもって何かする。これはある種の「趣味のクラブ」みたいなものですよ。

僕はもう一つだけ原風景があるのは、二年間だけアメリカで生活したことがあるんです。半年ほどニューヨークで働いたことがあり、ピレッジでアパートを借りて、友人と二人で生活していたんだけど、実にスムーズなんです。職場をみつめて、給料を何ドルでということを決めて、新聞で貸アパートをさがして、その大家に会いに行って、家賃を決めて、そうしたら



都住創13号スパイヤー(左)と10号釣鐘町(右)の北面(写真/ナトリ光房)

次の日から一〇年前から生活していたかのように、ちゃんと生活できるわけです。そのシステムに僕は仰天しました。おそるべきシステムである。

逆に、アメリカ人がたまたま東大に来て、卒業して、それと同じことができるかと思ったら、できないと思うんですね。

そのときに僕が生活していたのが、ビレッジで、あれはたぶん一九二〇年代後半の建物だと思いますが、一四〜一五階建てのアパートメントで、それが給料の二割ぐらいで借りられたんですね。五〇〇ドルもらっていて、一〇〇ドルぐらい払っていましたから。ちゃんとメシ食って、文化的な生活をして、お金さえ残る。そのときに、都市のシステムということをすごく衝撃的に感じましたね。

そういうシステムと、もともとの、うちは町工場を裏でやっていて、松山さんとほとんど似たような体験をしているというのが、何か奇妙にラップしているわけです。

松山 ただ、東京の暮らしというのは、関西もそうでしょうけれども、戦前の人たちは、ほとんど土地を持たない、借家なんですよね。そういう持ち家でなかったことの豊かさというのは、あったような気がしますね。それがシステムとしてなっていたのが、中筋さんのをケナすわけじゃないけれども、今は家をもつために、コーポラティブにせざるをえない。それはずいぶん大きな違いのような気がしますね。

中筋 そのとおりです。

松山 戦後の住宅政策は、持ち家政策をずっと進めてきた。そのことの功罪というのはかなりあるような気がしますけどね。

中筋 これはなにも日本だけじゃなくて、またアメリカの話に戻して恐縮なんですけれども、昔の一九一〇年代、二〇年代のアパートなんて、ほとんど賃貸ですよ。それが一九五〇年代あたりに全部コープになっていくんです。コープになっているということは、みんな所有になってしまっている。今、ニューヨークのアパートは、分譲アパートが大半です。だから、これは世界的風潮じゃないかと思えます。

松山 そうですね。ニューヨークなんかでも、向こうがもつと先駆的にコーポラティブにやっているんでしようが、そういう形で、かえって黒人たちが外へ出されたり、逆にあるところに追い込まれて、そこだけがスラム化してしまうという、そういう状況というのはあると思うんですね。

中筋 そうですね。

もう一つ私に関していえば、僕は少し心が痛むところがありまして、五千万円とか一億円のを所有するというのはほとんどない話なわけですよ。町のなかでは、それこそそのときどきの家族の都合でもって、所得に応じてどんどん移っていけばいい。ところが、こんなふうには土地の値上がり——これはダントツの世界一だと思うんだけど、それではたまらんわけですよ。

僕らがこの一三年やってきたことは、二〇〇人の人たちに不動産の財テクをすすめていたわけです(笑)。だいたいがすでに二倍ないし三倍になっている。すさまじい財テクを僕はお世話してきたということにハッと気がついて、愕然としまして、おれはいったい何をやってきたのかな、という気が多少しているんですけど。

松山 ただ、関西の人たちというのは……。

中筋 わりと所有にこだわる。

松山 というか、さつき場所にこだわるということをおっしゃったけれども、そういう長くからの伝統みたいなものがあって、それで街に住む、都市に住むということに対して、何十億、何百億に換えられないだけの価値があることを知っていると思うんですね。

ところが、東京のほうは、あまりに広くなりすぎたせいももちろんあるんですが、そういう価値がむしろ金銭的な価値にしか置き換えられなくなってしまう。たとえば東京で場所にこだわるとすれば、成城学園みたいに、高級住宅地であるとか、そういう名称でいってしまうわけですね。つまり生まれた土地、あるいは記憶、そういうものがずっと積み重なっているようなところで考えないという気がしますね。だから、そこに入ってしまうと、まっ



たく隣り近所の人とはそれこそつき合わないで、住まいと勤めるところ、また飲みに行くところは別というふうに、動いてしまうような気がしますね。

中筋さんのお書きになったもの、あるいはレポートを読むと、コーポラティブで、なかで話し合って皆さんでつくられるのが漫才のようだとか書かれているでしょう。あれはやっぱり東京と本当に違うなと思う。やっぱり東京は落語で、一人で芸をするだけで、ツッコミとボケがないわけですよ。そういうふうにはボケとツッコミで話が進んで、結局それがコーポラティブみたいに大きなのできるんだけれども、東京はやっぱりどこから移入してきた人たちなんです。それで、貧しいときは、隣り近所とかある共有関係があるんだけど、いったん切れてしまうと、もうそこでは離れ離れになってしまう。

片山 わりと抽象的な関係になってしまっうね。

松山 そういう気がすごしますね。

中筋 これは大阪だって実はそうなんです。僕らがやっているのはある種の例外なわけで、変態グループなんです(笑)。しょせん、まともなことをやっているとは思えない。こんなものが一般化するなんていうことは、どうして僕らは思いもしませんし、本当はこういうふうな公けの場に呼んでいただいて、お話させていただくようなことじゃなくて、どこか寄席にでもいって漫才の一種としてやったほうがいいような、ある種、変な動きなわけです。僕はけっして大手を振って、ある種の建築なり、都市の問題について、正攻法でかくあるべきと思ってるわけではありませんが、変な人たちがばかり集まってゴソゴソやっている。だから、そっとしておいてくれというのが、本当の僕らの思いですよ。

松山 僕はああいうものはヘテロなものだと。つまり、都市がいろいろな矛盾を抱えているときに、ああいうふうにはしかできない、全面的に解決できないからこそああいうことが出てきたのであって、やはり奇妙なものだとしかとらえられないわけです。

中筋 当然ですよ。

松山 それを中筋さんが両手をあげて、これはすばらしい、コーポラティブ万歳！といわれたらどうしようかと思っていた(笑)。

片山 話が面白いところについて、僕はどういう役割を果たしているのか分らないんだけど(笑)、中筋さんがコーポラティブの説明のなかで、アイテム・コミュニティということを言っておられますね。社会生活とこれからのあり方に広げて考えていけるように思うのですが。

### 〈これからの地域社会(試型)——アイテム・コミュニティ〉

中筋 松山さんは、僕がコーポラティブ万歳！なんて思っていないということ、ホッとされた様子なんです。もう一つの誤解は、コミュニティという非常にむずかしい得体の知れない言葉があるんですよ。僕らがこういうことをやっているのは、ある種コミュニティをつくっているんだらうというふうに見られる。僕らの世代、あるいは僕らの上の世代にとっては、〃向こう三軒両隣り〃だとか、ある種の監視装置みたいなものとしてのコミュニティだとか、あるいはもう少しベタベタしたものだとか、悪い意味がいっぱいコミュニティという言葉にまわりついている。いやな思い出しかないんですよ、本当は。

僕は、そういうコミュニティというのはなくなった、もう要らないと思うんですよ。今やコミュニティがなくなった、稀薄であるということ言われるんだけれども、これこそが昔の人たちが望んでいたことじゃないか。だから、いまの稀薄なコミュニティこそが強烈なコミュニティであるというふうな、逆説的に僕はこのごろ思うようになってきた。

それじゃ地域にまわりついたコミュニティがなくなって、それがどうなったかといえば、項目ごとの、アイテムごとのコミュニティに分解したのじゃないか。たとえば会社でのつき合い、学校でのつき合い、会社を引けてから麻雀屋に行くときの仲間とか、日曜日にゴルフに行くときの仲間とか、おそらく僕にしても松山さんにしても、一〇や二〇のコミュニティをすぐに羅列することができると思うんです。そういうものがぐっと重なっていった

ようなものが、たぶんそれぞれの人のコミュニティというものじゃないかというふうに思う。

だから、都住創でやろうとしたことは、そのワンアイテムとして、建設と一緒にしましよう。これは重い話だけでも、軽いきましようよ、遊びとしてやりましようよ。ワンアイテムとして一緒に「建設ごっこ」をやればいいじゃないか。それがうまくいけば、いい思いが最後に残って、ある程度同窓会的においさえ残るじゃないかと僕は思っているわけです。むしろ近隣との良好な人間関係——コミュニティと大段にいうと、なんとなく僕は恥ずかしくなってくるわけで、「建設ごっこコミュニティ」ぐらいとしています。直せば、胸を張って言えるかなというような、そんな感じがしています。

片山 コミュニティというのは、暗黙のソフトを共有しているような人たちということだと思っんですが、そういう場合に、アイテム・コミュニティというか、部分ごとにできるコミュニティというのと、中筋さんがやっていらっしゃる住むことに関するコミュニティとは、僕はかなり違う意味があるのじゃないかと思うんですけれども。

中筋 一緒に住んでいるという地縁のコミュニティさえ、ワンアイテムだと僕は思っているわけです。だから、そんなベッタリしたコミュニティではなくて、つき合いたくなくときは扉を閉めておけばいい、つき合いたいときに出てくればいいわけで、強制力のない地縁社会でしょう。それさえも僕はコミュニティのワンアイテムであると。それをとくに重要視しない。会社のつき合いと近所のつき合いとまったく違うものを併置する、というぐらいの感覚でいます。

片山 子どもとか老人は、そういう場の制約からなかなか逃れられないという宿命をもっていますから、そのときのコミュニティというのを考えると、アイテム・コミュニティとしてもあまり受け入れられないんじゃないかなという感じがちょっとあるんですけれども、そのへんはどうですか。

松山 ただ、そういうふうに切り換えるということが重要だというふうにしか、中筋さんも言えないんじゃないかな。やっぱり何千万円、何億に近いお

金を使うということがその一つだなんてことは、言えませんが。言えないというのはあたりまえのことで、サラリーマンはほとんどマイホームのローンで一生を決められるわけでしょう。その会社に従属されてしまうわけだから。

中筋 それを重い重いというと、打ちひしがれるじゃないですか。だから無理して「軽い」といっているわけですよ（笑）。

### 〈未来の居住イメージ——動く生活とスタイルライフ〉

片山 アイテム・コミュニティのお話をヒントにして、未来の、とくに都市の居住イメージというか、そういうあたりの話がないでしょうか。松山さん。松山 中筋さんのアイテム・コミュニティ、それはイメージとして非常によく分るんですよ。未来の居住イメージと言われても、具体的な絵をかけるという気はあまりしない。むしろ、それこそ未来の都市の人たちというのは、僕らよりもっと動くんじゃないか。動いたらいいなと。つまり、その都度その都度、何かの形で触れ合って、そのところでは何かの話し合いがあったりするかもしれないけど、ポツと別のところへ行く。そういう生活を若い人たちはけっこう始めているんじゃないかと思うんですよ。

この前、学会の『建築雑誌』の中で、池澤夏樹という芥川賞をとった作家と話たとき、『スタイルライフ』という本を書いて芥川賞をとった作家、そのなかに出てくる主人公というのは、社会のなかにいるんだけれども、ちょっとはずれている。公金横領かなんかしてちょっとはずれている連中なんですね。だけど池澤君は、実はそれは特殊なこととして書いたつもりはない。いまや会社に勤めていてもフツとはずれながら生活をしている連中というのは、実はものすごく多いのじゃないか。彼は僕と同じ年ですけれども、僕らよりもっと若い世代というのは、会社に忠誠を誓うわけじゃなくて、あるいは何かの組織とか地域とかそういうものにはばられるんじゃないかと、フツと別のところに行ってしまう。そういう生活というのはもう始まっているんじゃないか、という言い方をしたんですが、すごくよく分るんですね。

むしろ僕なんかが望むのは、これから未来イメージといっても、五〇年代、六〇年代には超高層ビルが建って、そのなかにいろいろな人たちが入って、いかにコミュニティであるというような集会施設があったり、公園をつくってみたりした、そういうことじゃなくて、もっとゆるやかなと言うのかな、それこそアイテム・コミュニティというほうが正しいのかもしれないが、その都度動いていくという、そういうふうなものの方が、生活像としては僕はありがたいし、楽だという気がしますね。

### 〈未来の居住に向けて今行なうべきこと〉

**中筋** 未来の話で大上段に言えるような話じゃないと思うんだけど、一九二〇年代というのは第一次大戦が終わったあとで、ヨーロッパがガタガタで、日本とアメリカはとにかく戦後景気でめちゃくちゃ金があった。その時代に、日本のある種の悲劇というのは、ストックになる都市の住宅をつくりそこねたんですよ。

**松山** そうですね。

**中筋** アメリカはそれがつくれたわけです。たとえば、ニューヨークの話だけに限定すれば、マンハッタンの大半のビルが二〇年代と三〇年代です。そこへつけ加えられている五〇年代、六〇年代、最近のものなんて、パーセンテージでいえば、知れていると思います。ほとんどがあの当時に、ヨーロッパで稼いだアブク銭でもってアメリカは都市の基本財産みたいなものをつくった。

そのアブク銭が、アパートメントというもののニーズを生んで、同時にビルディングタイプを發明させて、それがいまだに都市の基本的な資本となっているというのが、アメリカの例です。日本も同じようなアブク銭があった、長屋というビルディングタイプを發明したわけです、大阪で言えば。それを実に数十万戸つくったわけですが、戦争で大半が焼けてしまっ、もういっぺんつくって、またやらないといかん。

一九二〇年代、三〇年代と現在がすごく似ているという状況は、それはも

うみんな感じていると思うんだけど、何が似ているかというと、アブク銭が入っているわけですね。やはり都市のある種の建設とか、新しいビルディングタイプというのは、アブク銭でないとつけれないのではないかと気がする。今、僕たちは都市のストックになるようなものをつくらないといかないのじゃないか。こういう発言をすると役所めいてあまり好きじゃないけれども、一つ大事なことは、欲望に基づいて——バカみたいなことでもかまわないから、市民の欲望に基づいた、新しい日本型の都市住宅のタイプを、僕は發明しないといかんと思うんです。まだ發明してないと思う。今が唯一のチャンスじゃないかというような気がしている。

僕たちのやっている都住創なんていう変態グループも、たくさんの可能性のなかのたった一つを提案しているにすぎないわけで、まだまだいろいろな試みがこれからされないといかんと思うんです。たぶん發明するんじゃないかと思えますよ。ただ、コミュニティなんていう概念はなくなってしまっ、松山さんがおっしゃるように、どんどんな人は動いていくと思います。それも、先ほど言ったみたいに、システムとして、東京から大阪に転勤になっても、福岡に転勤になっても、パツと落ち着いた生活ができるようなシステムとして、都市がこれから發展していかないといかんのではないかと思うんですよ。

**片山** 今日はどうもありがとうございました。

### ミニシンポジウム「住居形式考——近代住宅計画批判」

本誌89年春号の特集記事として、右のテーマでミニシンポジウムを開催いたします。  
**パネラー**・

山本理顕(建築家・山本理顕設計工場主宰) 太田博信(積水ハウス取締役東京設計部長)  
聞き手・服部峯生(千葉大学工学部助教)

日時・二月三日(金)午後一時〜 於(財)住宅総合研究財団会議室

わずかばかりの席がありますので、ご興味をお持ちの方は当財団へお問い合わせ下さい。

☎ 03・4844・5381





ビッグエッグー東京ドームが重なる最近の外観。

# わが住まいし

## 同潤会

### 江戸川ア・ハート

昭和九年のインテリジェントアパートはいかにして生活共同体をつくりあげたか

文と写真

## 橋本文隆

建築家 YAS 都市研究所代表取締役  
早稲田大学講師・東京理科大学講師

挿画／やぶの・けん

都会っ子の私にはどうしてもなじめなかつた新潟での疎開を終え、飯田橋のプラットフォームに降りた時の光景は、いまだに忘れられない。見渡す限りの焼野原、その一隅に、我が江戸川アパートだけが不死鳥の如く、夕陽をあびて輝いているではないか！ その美しくも、りりしい姿に胸がいっぱいとなり、駅から大曲まで全速力で走った。なつかしい中庭、ざらざらとした階段の砂壁、そして子供の手にあまるやたらに重い玄関の引戸、すべてが普通通りであった。ひとつひとつ確かめながら「ああ、これでやっと東京に戻れたのか！」としみじみ思ったものだった。爾来四〇年、その飯田橋には高速道路がのたうつように走り、高層ビルやベンシルビルが林立する典型的な東京の都市景観が出現している。そして一角だけぽつかりと穴があいた、都市のブラックホールのように見える囲い地の中に埋没して、江戸川アパートはひっそりと瀕死の姿をとどめている。ここに生まれ育った一人として、かつては栄光の絶頂にあったこの建物に捧げるオマージュを、記録しておきたい。

### 先端技術で新しい住環境を提案

そもそも「同潤会江戸川アパートメント」とはどういうものであったのか。昭和の初め、関東大震災で壊滅的打撃を受けた帝都の、復興を使命として発足した同潤会は、ほぼその本来の目的を達成し、さらに新たな都市や住宅づくりを目指すこ



11.25'98

ととなった。当時、木造モルタル塗り構造のアパートメントや、電鉄系資本の開発した郊外の新興文化住宅地がほつほつ姿を現わし、新しい住環境や住文化への期待が、高まり始めていた。都市住宅のパイオニアとしての同潤会が、永年にわたつての研究の成果を世に問うたのが、この一九三四年（昭和九年）に完成した江戸川アパートメントであった。その意気たるや、「東洋一」と豪語し、当時の先端技術を積極的に取り入れ、当節風と言う「インテリジェントアパート」であったのだ。地域暖房のはしりともいえる、中央ボイラー室から各戸のラジエーターに蒸気を供給する暖房方式（残念ながら戦時の金物供出の折に、エレベーターなどとともに強制撤去させられて、私はその恩恵にほとんど浴さなかつた）、館内放送もできるように、各戸に装置として設置されていたラジオの共聴システム、交換台を通して外線はもちろん、各部屋どうしの内線電話も可能な電話システム、各戸に取りつけられたダストシュートによる生ゴミ集中処理回収システム等々、現在でもまだ十分に



## 私のすまいるん

咀嚼しきれていない都市住居への積極的な提言がなされていた。

### バラエティに富む住戸プラン

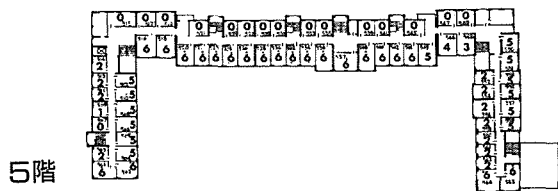
次に、江戸川アパートの計画上の特徴はどうであったか。昔この江戸川アパートのことを多少の揶揄をこめて「井戸川アパート」と呼んだ先達があったが、心地良いヒューマンスケールの中庭を介して、凹型の六階建ての住棟（1号館）と一文字型の四階建ての住棟（2号館）が対面して井の字型に配置されている。1号館の五、六階には通称

单身部屋と呼ばれていた四・五帖一六帖の個室群が並び、他が世帯用の家族部屋という構成である。このアパートの面白いところは、一二八戸の家族用居室に対して、個室群が一一三室もあるということだ。この单身部屋の存在が、このアパートの共同生活のうえで重要な意味を持っているのだが、それは後に述べることとして、まずは家族部屋に注目してみたい。驚くことに一二八戸の住居は、大雑把に数えても二〇種類のタイプに分類される。基本的には和風、純洋風の2種類で、その各々が広さや方位によってきめ細やかにバリエーションがつけられていて、棲む人の生活感覚や懐具合に応じて、自分の好みの住居を選択することが可能であった。このことは建設上の経済性を優先させず、多様な社会階層の人達を集めて、人・生活・環境の三者が一体となった成熟した生活共同体をつくることを主眼とした、賢明な選択

だったといえよう。バラエティに富む住戸プランは、表情豊かな外観を生み出す。最近の同一同型プランの片廊下型マンションとは異なり、ジグソウパズルさながらに大小さまざまな住居、和風洋風スタイルの住居が階段室型の枠組みの中で複雑に入り子になっており、一見してどのように住居が納まっているかを理解することは不可能だ。その複雑さが微妙に凹凸のついた非対称、非連続の個性的なたたずまいになっている。

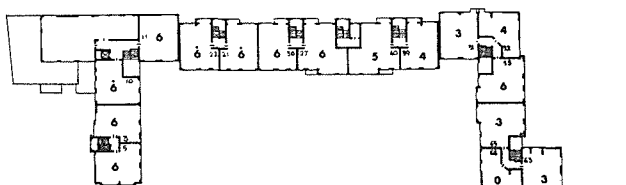
洋風スタイルの住居を除くと、多くの住居は日本の伝統的田の字プランを踏襲している。これは初期の住宅公団の標準プランに引き継がれていくが、結局生活スタイルの変化（和風から洋風へ）↓プライバシーの確立↓nb+DKという公団スタイルの定着、という近代住宅の変換の図式の中で姿を消してしまったが、改めて今思い出してみても、その棲み心地はなかなかなものだった。ひとつの住居の内部は、原則的に三つの和室が襖によって区切られていた。境の襖を全部取っ払ってしまえば究極的にはワンルーム、大袈裟にいえばミースのユニバーサルスペースの住宅版なのである。襖というものは便利なもの、本来の建具としての役割に加えて、固定することで壁に見立て、その前にタンスやベッドや机を置くと、とたんに洋風の生活に様変わり、部屋の模様変えも自由自在、生活パターンに見事に対応できるのである。ある時は茶の間、ある時は客間、夜になれば寝室と、部屋の機能を固定しない和風の暮し方は、食堂に椅子テ

同潤会江戸川アパートメント全体平面図

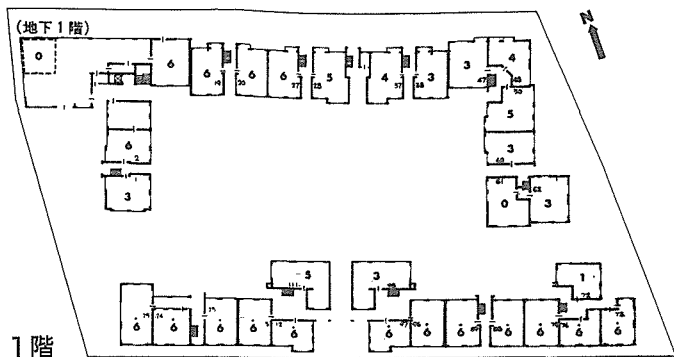


5階

6階も同じように独身部屋が並んでいる。



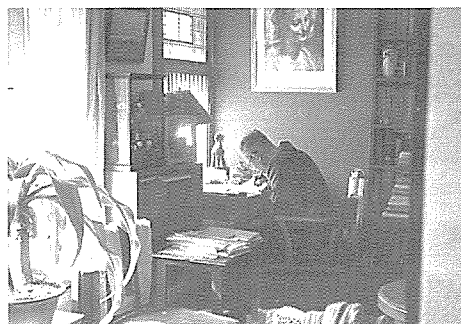
2階



1階



1951年頃の外観(中庭側)。



当時の室内の雰囲気。



中庭で相撲をとる子供たち(1951年頃)。

ブル、居間には応接セットがデンと置かれてニツチもサツチもいかない悲しい住環境にある現代日本では、改めて見直されてもいいのではないかという気がする。

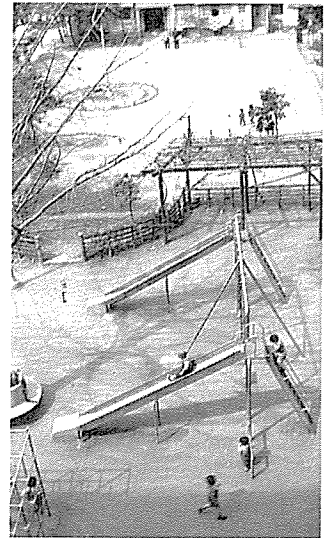
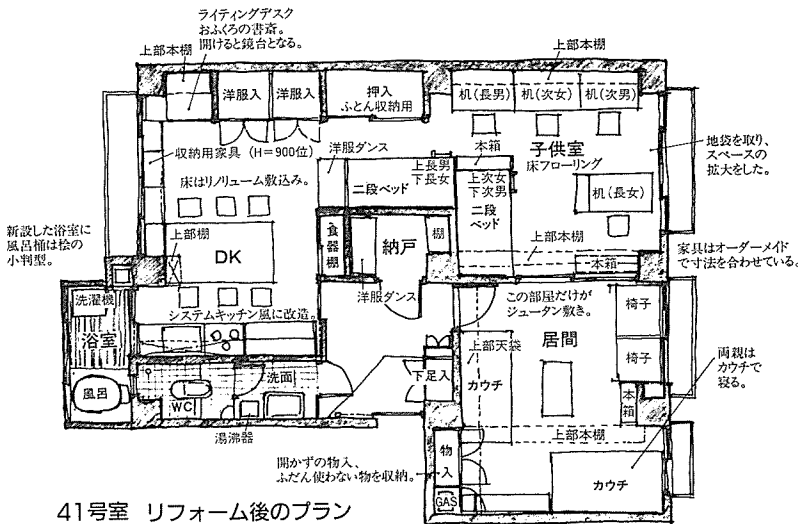
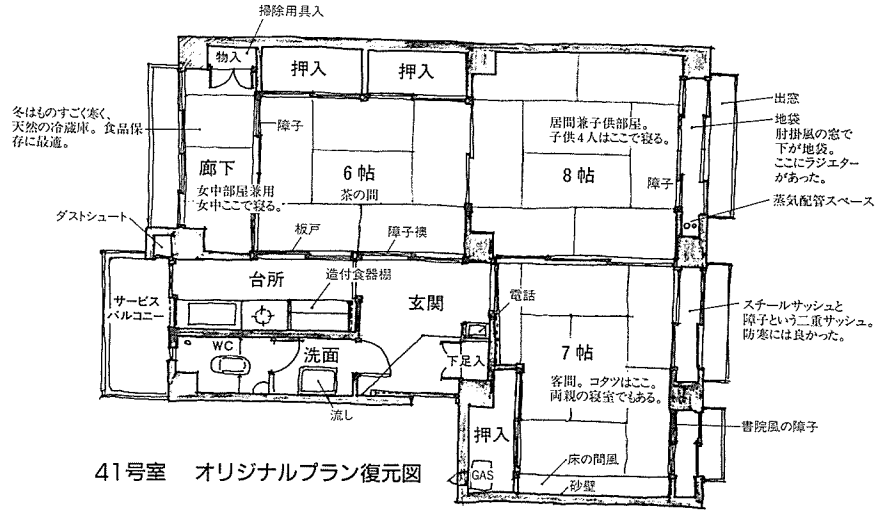
**家電製品の普及がリフォームを促した**

閑話休題。各戸に取りつけられている流しが実によく考えられていた。普段は中間の突起のところに箆ノ子を固定しておき、その上に洗面器を置いて用を済ませるが、箆ノ子を取ると洗濯槽に早変わりという仕掛けであった。たつぷりと広くて大きい。パーティーがあればたちまちビールクーラー、夏ともなれば西瓜を冷やしたり、応用範囲が広がった。赤ん坊の産湯をつかわせるのに格好だと発見したのは誰だったか？ この洗面器での産湯の洗礼を受けた友人は数多い。

戦後も落ちつき始めた頃から、時代は、和風生活からモダンリビングへの憧れの時代に移っていく。座蒲団から椅子へ、卓袱台から食卓へ、蒲団からベッドへと生活用具が序々に変わり始めた。それに急速な家庭電気製品の普及が加わり、それらの日用品を置くスペースの確保に四苦八苦、持ち物が増えるにしたがって、伝統的田の字プランでは処理しきれなくなった。必然的にリフォームの時代に突入した。基本的パターンは畳に代えてジュータン敷込み、ペーパーウォール(襖)を固定間仕切り化、台所の流しとコンロ台の改良といったところだったが、大々的なリフォームを試みる例



建築当時の姿をまだ留めていた1951年頃の外観。



1951年頃の中庭。

もいくつかあった。一番仰天したのが菊竹清訓氏の試みであった。当時もっとも先進的手法としてもてはやされた中央コアシステムを取り入れたのだ！ 中央部にデンと浴室を設けたのである。この設備コアから排水があふれ出て、下階の居住者はこの偉大な実験の思わぬ洗礼を受ける羽目となったのだが……。我家においても、子供達の成長と世の流れにつれて数回のリフォームを行なったが、そのハイライトは、北側のサービスバルコニーに建具を取りつけて室内化し造った、風呂場であった。この手法は多くの住民に支持されて、内風呂志向に拍車がかかった。

**なぜ生活共同体が育かれたのか**

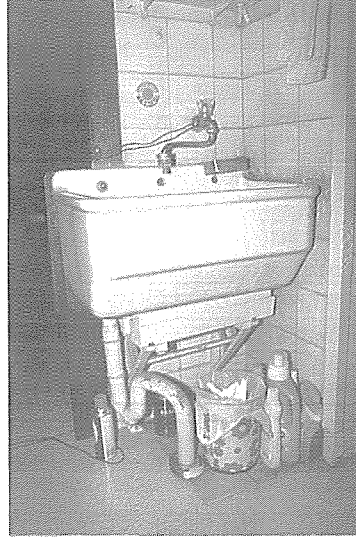
他の同潤会アパートではかならずしもうまく機能していなかったにもかかわらず、なぜ江戸川アパートだけが、生活共同体として理想的な運営がなされてきたのか。この共同体意識をはぐくんできたものには、社会学的な要因と建築的な要因とがあったと私は思うのだ。まず社会学的な側面を考察してみたい。昔から江戸の町は丘陵部に屋敷町一山の手、谷部には庶民の長屋一下町というのが相場だった。今もって分らないのだが、小石川や小日向といった山の手ではなく、なぜ神田川沿いの新小川町という典型的な下町に、この超モダンなアパートをはめ込んだのであろうか。周辺には小さな印刷所を中心とした町工場が、軒を連ねていた。そんな地域の中に、当時、軽く庭付



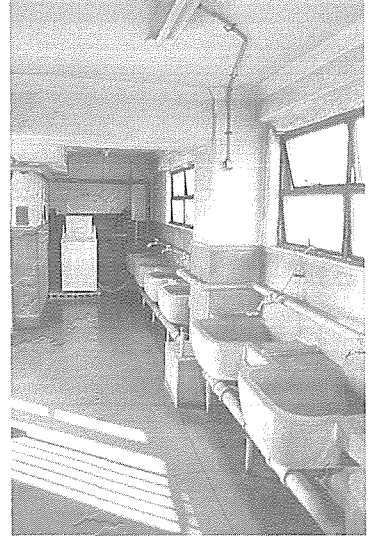
バルコニーを室内化して風呂場が造られた。



建築当時の姿を留めるバルコニー。



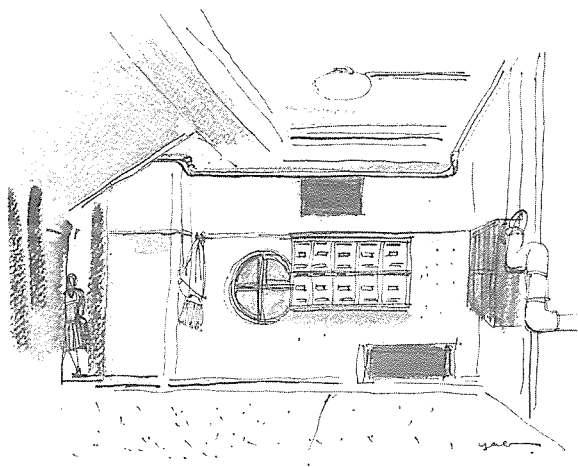
産湯も使える便利な流しが各戸に。



共同の洗濯場。

き戸建て住宅が借りられる家賃を払って、都市インテリゲンチャーが入り込んできたわけで、当然のことに周縁地域からは遊離していた。団地内の子供達は外部の子供を「外ノ子」と呼び、アパートというテリトリーを一步離れば、「外ノ子」が待ち構えていていじめられる。他者からの差別・区別・排撃といったものは、必然的に自衛・団結・協力の感覚を育てる。そこに、日本の伝統的地縁共同社会とは全然異なる生活共同体が発生し育っていったのである。

次に建築的要因について述べてみよう。私はおおよそ二つの要因があったと考えている。そのひとつは五、六階にある個室の存在だ。一二八戸の住居に対して、一三一室が用意されていたということは、理論上、各住戸に対して一個の独身部屋を確保することが可能であることを意味する。スペースの拡張ができないアパート生活の最難点を見事に克服しているではないか。下の階の家族用の部屋で生まれ育ち、やがて少年期・青年期に上階の個室を借り、やがて結婚して所帯を持つと、再び下の階の家族部屋の空家を探して入るといいう平均的な住人のライフサイクルがそれを立証している。ここには、住宅理論では良く口にされるがなかなか実現することが少ない「住み換え理論」が、定着しているのである。だからこのアパートでは五、六階に個室を確保することが一種のステータスシンボル、そして大人の社会への仲間入りを意味していた。それは農漁村の若衆宿のように、

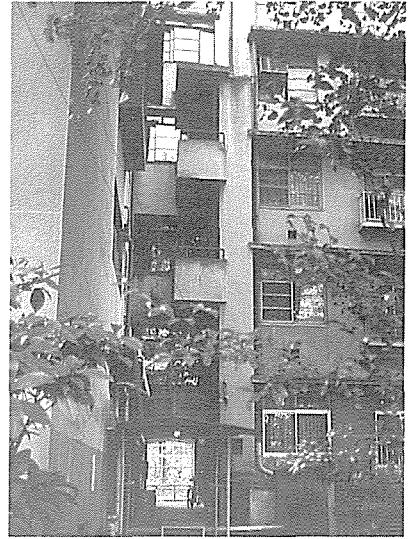


下の両親達の核家族的な生活と不即不離な関係を保ちつつ、同世代の仲間達と新しい共同生活や集団関係を築くことができたのである。薄暗い廊下をはさんで延々とならぶ独身部屋、そこを廊下蔭よろしくあちらこちらの部屋に出没しては麻雀に、議論に、夜を徹して熱中しては、いっぱしの大人になった気分浸ったものだ。そこでは学習も遊びも生活も、集団として約束事に従い、同時に個々の主体性やプライバシーを犯さずに営まれていた。ここでの体験は各自にとって人格形成のうえで重要な部分を占めていると思う。

いまひとつの建築的要因は中庭の存在である。このアパートの各戸へのアクセスは、中庭に面した各階段室からなされる。したがって各階段室が江戸の町屋でいう木戸の役目を果たし、共同生活の一単位は各階段ごとに形成された組で仕切られ



今では高層の建物ですっかり取り囲まれている。



樹木が茂る中庭より見るエントランス。

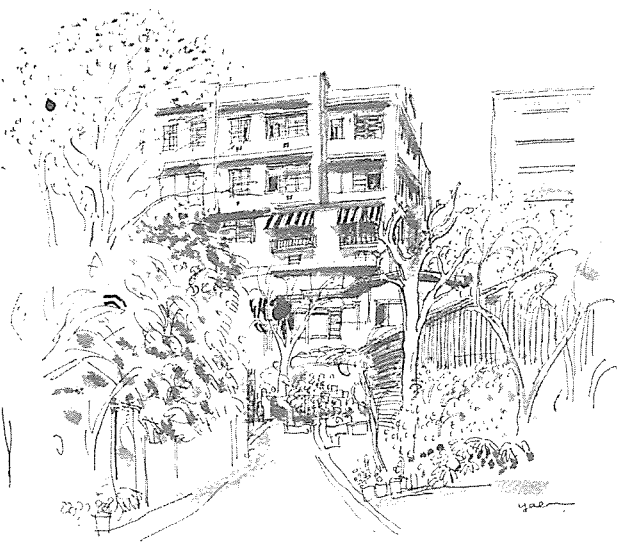
ていた。各戸は原則として中庭に面して主たる部屋があるように計画され、人の出入りや子供達の遊ぶ様子を、居ながらにして見ることが出来る仕組みとなっていた。終戦直後、これといった娯楽がない子供達にとっては、この中庭が絶好の遊び場だった。中央の大きな銀杏の木にはターザンごっここのロープがぶらさがり、周囲をめぐる園路は格好なトラップに見立てられ、土の広場はゴムマリ野球の球場に、円型の砂場は大相撲の土俵にといった具合、それこそ夜が明ける頃から夕方暗くなるまで、子供達の声の中庭じゅう響きわたっていた。時には夜になると中庭の中央に舞台をしつらえて、プロの劇団による野外劇が行なわれ、各家の窓はバルコンとなった。共同生活の装置としての中庭の役割は、住民自体の年令層の高まりとともにその使われ方が変質し、子供の遊び場から鑑賞用の庭園へと姿を変えたが、出勤時や帰宅時に中庭でのちょっとした立ち話しや、買物帰りの主婦達の井戸端会議の場として、今でも生き続けているのだ。更に、紙面が尽きて十分にその効用を論じることができなかったが、共同大浴場の存在や、文化的催しが行なわれた集会室（江戸川アパート用語では社交室という）、男の井戸端会議場の理容室等々の存在も、決して無視できない。

### 再建を阻むもの

さて附帯設備の老朽化、地下水位の低下による不動沈下等々、満身創痍の江戸川アパートはどう

なるのであろうか。ここ二〇年にもわたって延々と再建の話が続いている。土地所有権の問題、権利調整の問題、建設中の移転の問題等々、乗り越えなければならぬ障害が多いことは事実だ。しかし再建を阻んでいるのは、住人達が限りなく江戸川アパートを愛しているからだと思えてならない。このように空間豊かな、そしてちょっぴりお酒落なアパートは、現在のシブリアな経済メカニズムの中からは実現することは極めて難しい。彼等はこの想い出が幾重にも沈澱したりリッチな住環境を、一度手放してしまつたら二度と再び手に入れることができなくなるといふことを、本能的に理解しているのだ。だとすれば、このままそつと死を迎えさせた方が、この建物としては似合っているのかもしれない。

（はしもと・ふみたか／建築家）



# そこまで来た？ 未来住宅

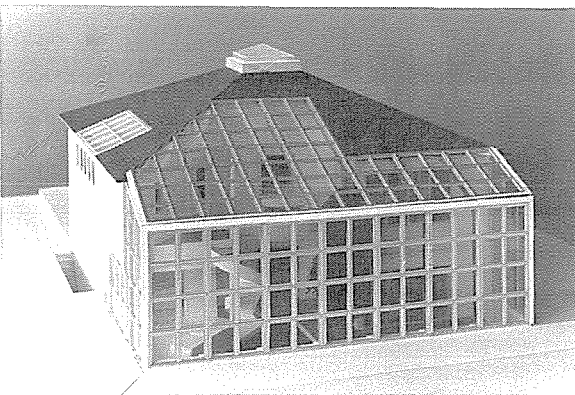
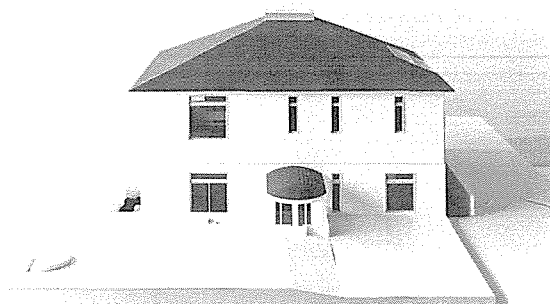
## すまいのテクノロジー

# TRON 電腦住宅

## とは 何か？

### 坂村 健

電腦建築家  
東京大学情報科学科助教授



TRON電腦住宅・パイロットハウスの模型写真。上／北面 下／南面。デザイン／坂村健

一九九〇年代のコンピュータとして開発が進められているTRON。そのシステムを駆使したパイロットハウスが、間もなくベールをぬぐうとしている。高度にコンピュータ化されたこの住宅は、16社が共同して設立した「TRON電腦住宅研究会（代表＝坂村健／東大助教授）」の研究・開発によるもので、次代の生活空間を具体化し、生活必需品から趣味嗜好品にいたるまで、一九九〇年代の生活を体験し、その様式に合った衣食住すべてにわたるシミュレーションを行なおうというプロジェクトである。

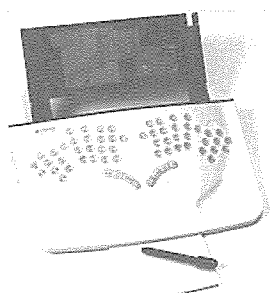
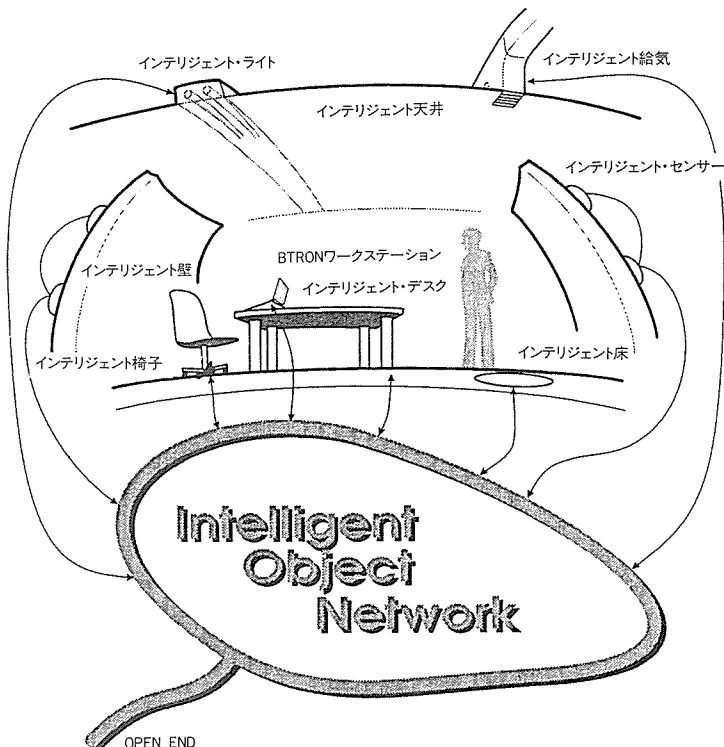
TRONの推進者であり、このパイロットハウスの設計者である坂村健さんに、お話を伺いました。

ディンクス世帯や高齢者世帯の増加により、ホームオートメーションはどんどん進んでいます。家電、情報機器、住宅メーカーなどの動きは活発で、泥棒の侵入やガス漏れ・火災などに対する警報システムや、電話で風呂などを操作するテレコントロールシステムは実用化しています。電気器具の制御のほか、警備システムのデータ、電話、音声、画像、電波など、さまざまな信号を一本の線に乗せて、同時にたくさん端末を接続する統一規格（ホームバス）も決まり、商品化が進められています。

ところで、既に家の中の電気器具には、あらゆるものにマイコンが組み込まれています。TRON電腦住宅は、こうしたコンピュータをネットワークで働かせ、快適な住空間を生み出すというもので、住宅を構成する部品の中にコンピュータとセンサーとアクチュエータを組み込んでいます。その数は、窓だけでも三〇〇あまり、住宅全体で五〇〇個にもほり、それらが互いに情報をやりとりし、全体がシステムとして作動することになります。

たとえば、夜間トイレに起きた時に、まぶしくない明るさでトイレまでの道筋だけ自動的にフットライトが点灯する。あるいは、日照や外気の状態を測定して自動的に植物に水をやる（もちろん植物の種類に応じて最適な量を与える）。あるいは、トイレの中に尿の自動検査機を組み

図-1 インテリジェント・オブジェクトのネットワーク化 (坂村健『電脳社会論』 飛鳥新社1988年刊より)



TRONではキーボードの形も全く異なる。

●TRONとは

一九九〇年代のコンピュータとして開発が進められている、コンピュータ・システム“*The Real-time Operating system Nucleus*”の略称。人間とコンピュータとのつき合い方を基本的に考え直そうという理念で考えられた、コンピュータの設計基準である。メーカーは違っても使い方が同じ、しかも簡単、多国語に対応できるなど、普通の人があらゆる生活の場面で、ごく普通に使うことができるシステム。

国内外の九〇社あまりの企業が参加して、TRON協議会が発足、普及促進を進めている。ワープロ、エアコン、電気釜、AV機器などコンピュータを内蔵する物すべてを、インテリジェント・オブジェクトと呼ぶ。TRONではこれらインテリジェント・オブジェクトが総体的につながり、協調作業ができるようになる。

込んで、異常があればすぐ教えてくれる（これをもっと進めて医者ともコンピュータネットワークで結び、医者からの指示で台所の塩の使用が自動的に制限されるようなことも可能）。もちろん、昼間の太陽熱を蓄えて夜間に使うとか、夏の熱を蓄えて冬の暖房に使うことはもちろんのこと、外気の状態や日照に応じて、家の中にいる人が意識せずに、あたかも家が呼吸するように窓が自動的に開閉して、風を入れるか空調を働かせるかを判断もしてくれます。

コンピュータハウスというと「びっくりハウス」のように勘ちがいをする人がいますが、TRON電脳住宅の基本コンセプトは、自然と人間とコンピュータの融合、理想的な一体化ということで、何でもかんでも自動化、人工環境化してしまうことでは全くありません。一言で言うなら、それぞれの仕事を分担してやってくれるお手伝いさんが何人も家の中にいると思えば良いので、コンピュータ化したからといって特別な家になった訳ではなく、スイッチを切っただけで、まったく普通の家と変わりなく、すべてが手動で異和感なくできます。コンピュータの良いところは、命令しなければ何もやらないところ、つまり自分でやりたいことは自分でやれるということです。

本来、機械音痴の人を救うのがコンピュータですから、人間の生活にプラスにはなっても、



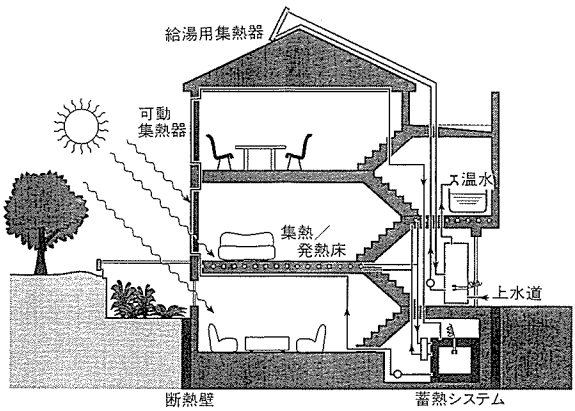


図-2 ソーラーシステム

●トロン電脳住宅・パイロットハウス  
 トータルデザイン及び電脳機能設計/坂村健 パイロットハウス本体の設計・施工/日本ホームズ 設備全般の調整/竹中工務店 情報設備/ヤマハ、日本航空 空調設備/大気社、三菱電機、キッチン設備/東京電力、サンウェブ工業 衛生設備/東陶機器 照明設備/ヤマギワ 自動収納設備/元田電子工業 サッシュガラス、屋根/三協アルミニウム工業、日本板硝子、日新製鋼 植栽管理設備/第一園芸 電脳グッズ/西武百貨店  
 <構造・規模>  
 軸組木造(地階は鉄筋コンクリート造)、地下一階・地上二階建て  
 延床面積/三七二・一九㎡(地階五六・〇六㎡、一階一九五・四三㎡、二階二二二・七〇㎡)  
 <公開予定>  
 一九八九年七月頃に建物完成、引き続き機器・コンピュータプログラムの調整のち、十月頃公開の予定。

建設地  
 東京都港区西麻布三二一九 日本ホームズ「六本木ビレッジ」内

図-3 未来の空調システム

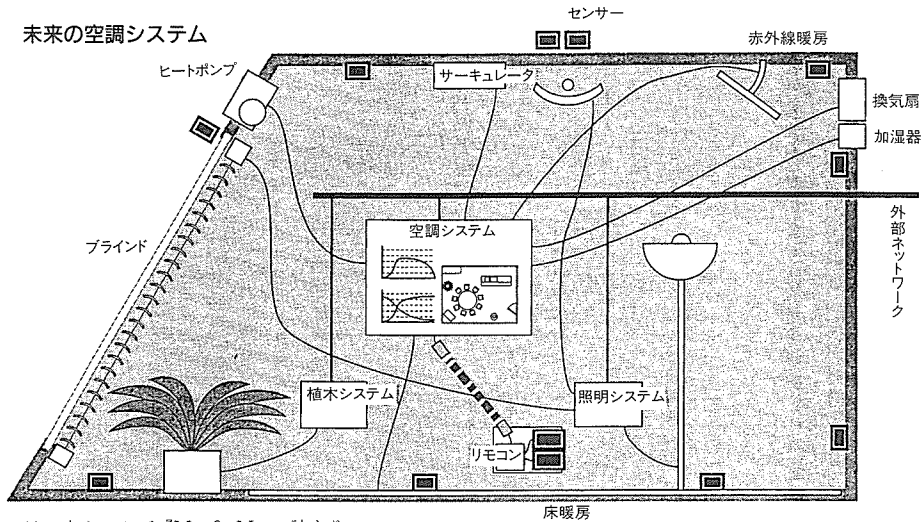


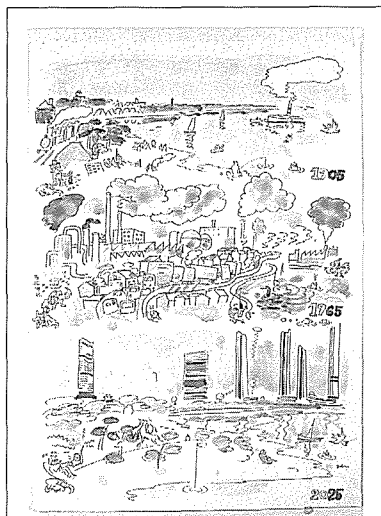
図-2, 3 は日本ホームズ『Mr & Mrs』誌より

マイナスになることは絶対にありません。コンピュータに対してアレルギーを持つ人がいることは確かですが、うまく作られたコンピュータというのは、いかにもコンピュータ然としたものではなく、もっと控え目な存在になります。TRONは、そうした人とコンピュータの付き合い方から考え直したコンピュータなのです。ところで、電脳住宅になると住宅の作り方は従来とは全く違ってきます。従来は空調をどうするかということぐらいで、まず建物が設計されて最後に設備が考えられました。しかし電脳住宅になると、配線だけでも大変な量になる。どういう電脳装置を組み込むのかを最初に決めておかないと、それによって構設計画も違ってきます。また家具もコンピュータ組み込みの電脳グッズになりますから、トータルアーキテクチュアとして考えないといけません。今回のプロジェクトは、現在の科学技術でどこまで可能かを示す実証的なプロジェクトです。最先端の技術を結集したものですから、莫大な費用がかかっています。このプロトタイプを元に、メーカーがどう製品化するかを考えることとなります。そして大量生産によってコストダウンを図り、実用化するの是一九九〇年代の中頃、そしてこれが一般に普及するのはさらに五〜一〇年先になるでしょう。

(さかむら・けん談 文責■編集部)

# 都市住宅の明日を探る

昭和六三年十月二日  
於 建築会館ホール



かつては自然の姿の海岸線が連なり、のどかな自然の恵みを与えてくれた。高度成長期、海岸線はすべて埋め立てられ造られた工場は環境破壊の元凶となった。そして私たちは再び美しい海岸線を取り戻すことができるだろうか。

当財団の創立四〇周年を記念する連続シンポジウム、トータルテーマ「都市のすまい」の第三回。今、都市のくらしに何が起ころうとしているのか、住空間はどう変わるのか。美しい生活環境を取り戻すために、今、何をしなければならぬか。

パネラー 〓

(おじま・としお)

尾島俊夫

早稲田大学理工学部教授  
環境工学

司会 太田利彦 (おおた・としひこ)

清水建設技術研究所長

(たなか・よしすけ)

田中好輔

日本興業銀行産業調査部  
プロジェクト開発室次長

(とくだ・ともかず)

得田与和

日産自動車中央研究所  
車輛研究所長

太田(司会) 都市住宅の未来には、いろいろな観点がございします。前回のシンポジウム「都市化社会のなかの住居」でも、いくつかの視点がございました。特にコミュニティに関する問題も大きく浮かび上がっております。今回はさらに未来の住宅を考えていくうえで、少し異なった視点から考えてみたいと思っております。どういった展開になるか、私自身にも分らないところがございますが、少なくともこのシンポジウムでは、都市住宅の未来の形を即物的に、ただ描き出すことは目的にしておりません。たとえば電化住宅とかインテリジェント・ハウスとかホーム・オートメーションというような、ハイテク技術を駆使したデバイスの塊みたいな住宅をイメージした未来住宅の話ではなく、もっと都市における住宅の本質といったものを、未来の社会生活との関係で捉えて

みたい。果たして今考えているような住宅のトレンドとして未来の住宅があり得るのか、また都市というものの中で果たして住宅というものが存在するかどうかすら問題になります。どちらにしても非常に限られた時間ですから、そのすべてを網羅することは困難だと思いますが、幸いに今日お見えたいただいておりますパネリストからお分りのように、極めて鮮明な視点で新しい都市住宅のあり方を斬ってみたいと思います。建築のほうからアプローチしますと、ある程度私たちが理解し得る範囲の研究方法で終わってしまうのですが、こういった違った分野の方々から、住宅を斬るといった場合にどんな斬り口があるのだろうか、ぜひわれわれとしては勉強のために、皆さんと一緒に考えさせていただきたいと思っております。こうして住宅研究に何らかのインパクトを与えるとい

うことで、都市住宅の明日についてアプローチしていこうということでございます。

まず日本興業銀行の田中先生に日本の経済動向、広い視野で今後の社会構想みたいなものを含めて、住宅のあり方をお話していただくわけですが、先生は国の産業構造審議会委員でもあり、土地問題、土地政策についてのご関心も非常に強く、いままでも、幕張メッセ、タウンセンター、東京臨海のいろいろな新しい開発プロジェクト等に参加され、そのプロモーターとしての役割をなさっている方ですので、われわれとは違った観点で、都市住宅に関するお話が伺えるものと期待しております。

## 豊かさを実感できる住宅・都市をめざして

田中 私どもの銀行はその名のとおり、生業を興す、産業を興すという名前を持っている銀行でございます。そういった立場から、最近の住宅問題を眺めてみたいということで、まず問題提起といった意味を含めて概括的に話をさせていただきますと考えるとおります。

### 〈生活の価値〉

ご承知のように産業至上主義から、だんだん世の中は変わってきております。特に日本の産業が世界的にも非常に強くなったために、日本はあの豊かなアメリカを抜いて世界一の債権国になって、よその国にお金を貸している。そういう意味で「お金持である」と言われているわけです。しかし、一方そこで働いている人たち、それを支えている人たちの生活環境、あるいは財布の中身、中身の使い度という意味で豊かになっているのだろうか、ということでは大変疑問が台頭してきています。もう少し本当の豊かさをどうやって実現していったらいいのだろうかというところに、だんだん強調の仕方が移ってきていることは、世の中の流れとし

て感じておられることだと思えます。

新しい経済計画が経済企画庁を中心にまとめられています、その中でも豊かさをどうやって実現していくのか、ということが大変大きなテーマに取り上げられている。住まいというのは人間の生活の足場ですので、そこをどういった形できちんと持つていければ豊かさが実現されるのか。あるいはその豊かさの中で日本ならではの文化の花というのを、どうやってその中に咲かしていくのか、重要な問題になってきつつあるということでございます。

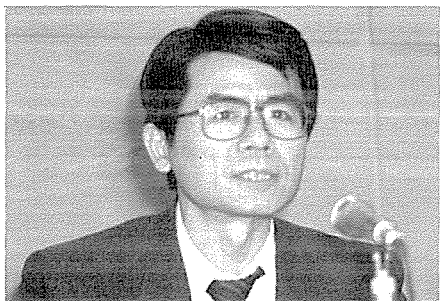
さらに付言しますと、ヨーロッパでもアメリカでも日本でも、まさに今、その課題を抱えているわけですが、お金持になったというだけでは世界の尊敬を受けられない。それを栄光につなげるには、やはり立派なものを豊かさの中で実現していかなければならないということかと思えます。

### 〈土地問題〉

住まいの次の視点は、土地問題とどうしても切り離せない。この高くなってしまった地価を、どうブレイクスルーしていくのか。工学的見地から高度化を図るとか、あるいはどうやって地下を活用していくか、といった問題のほかに、経済的、制度的に、そういうものを実現していくポイントがいくつかございます。

### 〈現実的妥協〉

二一世紀以降、夢のようなお話をすれば、いろいろな面白いことが考えられるのですが、そこまで階段を付けて一步一步進めていかなないと、現実の解決は難しい。最近起こっているいろいろな社会変化、ライフ・スタイルの変化、あるいは職場・企業への帰属関係、家族との関係、生活の楽しみ方といったものの変化を将来に延ばしていく場合、やはりマイホームという庭付きの一戸建ての家を持つことが、非常に難しいということが、だんだん生活



田中好輔先生

スタイルの中にもはっきり影を落とすつつあります。それを避ける形で新しい文化、新しいアーバン・スタイルを作り出すという傾向も強まっているわけで、それをむしろポジティブに捉えて現実的な妥協をはかる視点で、お話ししたらと思っております。

限られた収入の中から、住居のコストを払っていくことを考えた場合、いまの地価の高さ、あるいはマンションでも一戸建てでもそれを賄っていくのは大変難しい時代になりました。したがって、借りて住むということとをこれからの大きな流れにしなければ、なかなか現実的な妥協は難しいだろうと思います。

次に《論点整理》に従って簡単にお話をまとめてみたいと思います。

#### 〈都市住宅と土地問題〉

第一番目の「都市住宅と土地問題」。この土地問題は、現在、新行革審が答申を出し閣議決定という形で国土庁がそれを受けて、新しい土地基本法を作ろうということと動いております。土地を使っていく、あるいは土地の取引きをする場合の五つの基本理念が骨子になっております。

第一は、公共の福祉を最優先させるという理念、二番目は、土地を遊ばせておくことは悪いことであり、土地の所有者には利用責任が伴う。三番目は、それを計画的に利用、供給していくのということ。四番目辺りが難しくなってくる議論の一つですが、開発利益の還元について前向きに考えようということ。道路、地下鉄ができ、あるいはJRの新線が走ったという場合、そこに出てくる開発利益を、単純に土地の値段だけに帰属させて所有主が儲かるということだけではまずいだろう。できるだけ一般的に税金という形ではなく、特定した形で還元させるといふようなことを考えていったらどうだろうということ。五番目は、受益に対応する形での公平な負担という形を、理念として打ち立てよう。

こういう五つぐらいの考え方によって、土地問題を解決の方向に持っていこうとしているわけです。

戦後の農地改革以来、土地の所有権が分散化されてしまったとか、日本の近代的な土地所有権が、言論的に絶対的な権利という形を強めすぎてきた法制度上の問題があり、その対極にあるのが借地借家法で、これは居住者あるいは賃借人の立場を尊重しすぎている。その狭間に現実があるというように、法制度的にも揺れ動いている状況がございます。

こういった構造が、土地問題を解決しにくくしていると思いますので、何十年かかかって、新しい土地の所有権に、だんだん衣替えしていくのだと思います。基本法の中にも含まれる個別の法律がだんだんモデル・チェンジし、一つの解決の方向に向かうものとは思いますがかなり長い時間がかかる。一方そういう制度、枠組みの中で、土地利用のミスマッチということが現実に進んでいることも見逃せない事実です。

「東京臨海副都心計画」というのは、東京都が東京港の沖のほうに埋め立てた港湾に使う埠頭のために造った用地ですが、輸送革命という形でコンテナ化がどんどん進み、埠頭の機能がだんだん要らなくなってきた。あるいはエネルギー供給の基地として東京ガス、東京電力用地が技術革新の中で、だんだん必要がなくなってきた。また、京浜臨海部に立地していた重厚長大型の産業が、だんだんそんな所にある必要がなくなってきた。

しかし、一方住宅は絶対値としては足りているとしても、レベルの高い、通勤に便利な住宅は、非常に足りない。そういったミスマッチを何とかミートさせるということをお願い切つてやる、現実的な解決もやっつけていかないと、問題ばかりが拡大していくということになります。



## 〈都市生活の多面化〉

二番目に、ネオ・アーバンライフ・スタイルというのは私の命名ですが、外食産業が発展してきたとか、今ホテル・ブームで、都市の中にいろいろなタイプのホテルが出てきて、生活のパターンがだいぶ変わってきました。家庭の中で処理する物事がだいぶ外部化され、あるいは専門的なものに任せるといふ状況が、どんどん進んでおります。例えばコイン・ランドリーなどもほんの一例です。

住まいというのは一つの足場ですが、全部その中に抱え込む必要がない場所になってきつつあるのではないか。一戸建ての住宅を持つことが難しいことによる生活の知恵がそういうところに結実している部分もあるわけですが、こういったものをもう少しポジティブに見ていったらどうだろうかということでございます。

## 〈賃貸住宅の可能性〉

土地利用のミスマッチでちょっと触れた点ですが、土地を持っている企業にはレジャーランドとかショッピングセンターなどを一部やりながら、もう少し安定収益の上がるものをやろうという、土地の供給サイドの論理がございます。これを売ってしまうわけにはいかない企業側の論理がありますので、土地を買うという形でそこを住宅地に使うわけにはいかないわけです。

次に「雇用者側の論理」という観点から見ますと、優秀な技術者とか、優秀な人たちをリクルートしていくという場合、社宅として何かいい所に、レベルの高いものを持たなければいけないということが、これから企業に迫られてくる現実ではないかと考えているわけです。

「住まい手側の論理」は、社宅でも、賃貸住宅でもインフレヘッジがどうやってできるのかということ。賃貸住宅居住者の不安は、家賃がどんどん地価の上昇に合わせて上がっていくよう

な所では困る。二番目は、それと裏腹の関係で、自分の将来の財産を何かの形でヘッジしたい。金融資産だと金利は付くし利回りは出るのですが、インフレには弱いわけです。したがって、土地とか不動産にある程度リンクしたような資産を持つことはできないだろうか。単純に一戸建ての住宅を持つ、あるいはマンションを買うということではなく、そういうものにリンクしたような資産を持つような方法は何か考えられないだろうか。そうすれば賃貸住宅に住むという上の問題は確実に補足できるのではないかと考えられるわけです。

## 〈都市住宅の明日のために〉

いづれにしても、賃料インフレを回避するためにも、これは大きな産業、大きな企業が賃貸住宅に出てもらうということではないかと思えます。やはり社会性のある企業がそういうものをやるということがこの問題の解決策になり得るのではないかと考えられるわけです。

たとえば不動産投資信託みたいなもので運用するということ、将来真面目に検討される課題になるだろうということです。

不動産投資信託というのは、不動産あるいは不動産に対する貸付けに資金を運用するための投資信託でございます。日本ではまだありませんが、アメリカでは大変活発に不動産の開発に使われている手法でございます。こういったものがサラリーマンが何らかの形で財産形成をヘッジする、インフレをヘッジする手段として登場してくる可能性はあるのではないかと。こういったことが準備されれば、賃貸住宅への道は大きく開けてくるだろうと思えます。

そして、出来上った賃貸住宅が、非常にライフ・スタイルにマッチしたチャージングな住宅であるということが、最後の決め手になると思えます。



得田与和先生

## 自動車と住居の対比の中で未来を考える

太田 次に得田先生にお話を伺います。先生は、日産自動車中央研究所車両研究所長でいらっしゃいますが、メカニカル・エンジンニアとして優秀であるばかりではなく、文化的な視点でいろいろな物事を考えている方です。自動車を通して住宅をどのように考えたらいいか。逆に言いますと、住宅を通して自動車をどう考えるかを、今お考えになつていらっしゃるのです。

得田 今、ご紹介いただきましたように、私は野次馬根性で、いろいろなことに関心を持つております。NHKで「岐路に立つ現代建築」という一〇回シリーズがありました。非常に共感、示唆を受けまして、それ以来自動車と住宅とのかわり、共通性というところに注目しようという主張をいたしておるわけです。したがって、私が今から話すことは、ほとんどの点で私が「車」と申していることを「住宅」と置き換えて聞かれても、通じるのではないかとということで、これが私の結論でございます。

「ヒューマンウェアとしてのいえとくるま」

人間が生きるための三大条件は、言うまでもなく衣食住です。私どもはマイカー元年の昭和四一年ごろから、都市に限りませんが、人間については、動き、交通、交わりといったことを基本条件に加えずにはいけない。共感を得られるかどうかはわかりませんが、われわれの業界では、勝手に「四大条件」と言っております。衣食住はだんだん廃っていくような感じがいたします。未来に生きるもの、ダイナミズムを保障するのは、交通、交わり、運動でございますので、それを忘れてはならないということでございます。

住宅は、人間の発祥以来の歴史がありますが、車、現在皆様方にご利用いただいておりますもののルーツは、たかだか一〇〇年

でございます。ベンツという有名な会社があり、カール・ベンツ、ゴットリン・ダイムラーという二人の人が、一〇〇年前にガソリン・エンジンを初めて動かしたというのが、その発祥でございます。当時車が生まれたのは何のためであったかと申しますと、非常に重たいものを運ぶとか、自分が労力を経ずして移りたい、といった即物的な要求でしたので、そういった運搬手段、移動手段、単なるツールであったわけです。

ところが、発明されて一〇年も経たない今から八〇数年前に、パリ・ポルドー、パリ・ルーアンといった、パリを起点にしたカー・レースが盛んに開かれております。それに火が付いたごとく、各国でいろいろなレースが開かれております。車を運転すること、車を使うことが目的という具合に、変貌しつつ行くわけでございます。これが図1の(b)で、車の効用というか、車の用いられ方の発展形態です。「車は手段である」「いや、車は私は単に手段ではない。車を運転することが楽しい」、この二つの潮流はとうとうほとんど一〇〇年の歴史を貫いてきております。

ところが、最近特にポスト・モダニズムではありませんが、まさしく一〇年ぐらい前からでしょうか、車が非常に楽しいという見方とはまたちがった動きが、出てまいりました。二年ぐらい前に日産自動車でビーワンという車を出しました。ところが、ビーワンは一万台しか作らないと発表をしたものですから、注文が殺到して、発売当初に二・五倍とか、地域によっては何十倍ということになりました。走る目的としても、ちょっといままでの概念では考えられず、ネクタイ・ハンカチ論も出てきました。やはり人間は生きたための装飾というか、潤い、憩いといったものを求めているということで、自己表現手段、自己主張のツールといったような、三つ目の使われ方、効用が生まれてきているということです。

ということ、この辺は私が車と言ったのを住宅と置き換えられても通るのではないかというのが私の推測です。恐らく住宅は最初は雨露を凌ぐためのシェルターであったものでありましょう。それが昨今では、少しずつ変貌しているのではないかと思います。下図は、車に対する研究のアプローチをモデル化したもので、私が、私どもは最近、人間の研究を進めなければいけないということで、三角形の隅に目的、手段、媒体を置き、その途中に従来のディスプレイと言いますか、科学技術の分野をおいておられます。ところが、少なくとも一九九〇年代、あるいは二一世紀には、生理学、経済学、文化人類学といった新しいジャンルのディスプレイを加えていかなければ、お客さんの満足が得られないのではないかと、何かということを感じております。

車を捉えている視点はそういうことでございますので、皆様のご参考になればと思います、紹介させていただきます。

自動車産業は建設とほぼ似たような規模の産業かと思っております。そういったことで私どもの自動車工業界の中でも、建築との対比がいろいろ行なわれております。これは樋口謙治さんという方のつくられた対比を、独断と偏見で私が理解しやすくまとめたもの(表-1)でございます。左の住宅のタイプと、ステレオタイプながらかなり対比されるわけです。ですから、都市住宅には、いくつかの機能があるとすれば、こういった何台かの車との対比、融合といったことで考えてよろしいのではないかと、思うわけです。

ハードウェアとしての「えとくるま」  
ハードウェアですが、住宅は単なる雨露を凌ぐものの具にあらずと、皆様がお考えのように、私ども車屋は、「車は単なる二点間の移動の具にあらず」と考えております。ゆとり、ときめき、誇りといったような人間の欲望段階のコンプレックス、あるいは進化、変化に対応してハードウェアは、あくまでも脇役として流

通させなければいけないと考えている。実は自動車屋は、今はときめきの時代だと思っているわけですし、排気公害とか、安全とか、エネルギー危機とかを克服して、今は喜び、ルネッサンス、わくわくしている時代であるということで、高機能化ということでは、ツインカム・ターボ・チャージャー、4WSの4ABSなどとか、何だか分からない機能性のある技術が、最近どんどん出てきております。

その次には、おそらくゆとりということに進んでいくのではないかと思います。アメニティ・アーバン・ライフではありませんが、私どもはゆとりが次に来るキーワードだと思っております。これも異論があるかもしれませんが、自動化とか電子化といった下で支える技術屋とすれば、こういった技術を用意しておかなければいけないということです。恐らく二一世紀辺りは、誇りといえますか、現に兆候はすでに見えています。スタイリングといったようなことでイージー・オーダーあるいはフルオーダー・モードが、皆さんと共通の話題になろうかと思っております。自動車メー

図-1 車に対する人びとの意識の変化

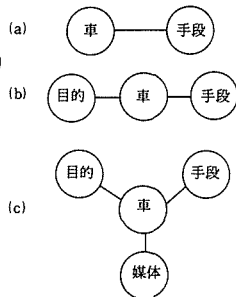


図-2 現代的くるま観

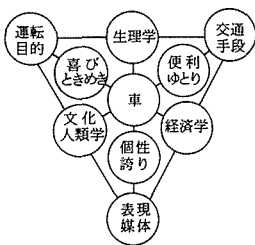


表-1 建築と自動車のスタイルの類似性

住 宅	自 動 車
邸 宅	プレステイジ・セダン
個人住宅	ファミリー・カー
アパ ー ト	ワンボックス・コーチ
寄 舎	マイクロ・バス
数 寄 屋	ツーボックス・スポーツ
別 荘	ツーボックス・セダン、スペシャリティ・カー
ホ テ ル	ワゴン
兼用住宅	ピック・アップ、バン
注文住宅	カスタム・カー

表-2 自動車技術の将来動向

ゆとり	—— 自動化	—— 電子化
ときめき	—— 高機能化	—— 新機能
ほこり	—— スタイリング	—— オーダーメイド (コンピュータ化)

カー等は、それなりに今苦勞しています。

最後に、自動車も土地問題とかなり関わっており、これも東京周辺ですが、皆さんは日ごろ交通渋滞にはお悩みのことと思います。これまた自動車の不思議な点で、離れているから、そこに空間があるから、自動車が發明されたわけですので、今やその空間があるのかないのか、その空間のために苦しんでいるという奇妙な、興味ある現象にぶつかっているわけです。家と道を是非考えていただきたい。そうしない限り、二一世紀の間から喜ばれることは得られないのではないかと、というのが私の考えです。

## 今こそ生活環境整備の時

太田 次に尾島先生にお話を伺います。尾島先生はもともと熱を中心にした環境工学の専門家です。最近はそれだけではなくて、未来の住宅、ウォーターフロントあるいは地下開発といった多方面で、建築ならびに都市に関わるご提案をなさっていらっしやいます。

### 〈未来に残る住宅とは〉

尾島 私の専門は環境工学で、風、太陽、水、緑などをふんだんに家の中に取り入れる。なおかつ足りないものは給排水とか電気とか機械的な仕掛けを使って、それを補うということを専門として、研究しているわけです。その研究が極めて忙しい、どうしてこんなに忙しいのかというと、住宅の革命に次ぐ革命が、台所でも、お風呂場でも、リビングでも、寝室でも起こっているからではないかと思えます。

こういうすさまじい変化の中にも拘わらず、ほとんどの人が、今の自分の家に対しては満足してなくて、雨露を凌ぐ一時の住まいぐらいにしか感じておられない。一九世紀の家には少なくとも二一―二三世紀に残っていきそうな家があるわけです。

ところが戦後の日本の家は、調べてみましても、木造は二〇年でほとんどが建て替えておりますし、鉄筋コンクリートでも三〇年でほとんどは建て替える。本当に一〇〇年使おうと思っている方はいないのではないかと。そういう意味でも明日の住宅などというのとは分らないというのが実情です。

なぜ、こう分らなくしているのかといいますと、首都圏の基盤そのものが揺れ動いている。と同時に、社会そのものが変動し続けていることです。二〇世紀は機械とか車の時代だったかもしれないが、住宅にとつては、本当に真つ暗な時代ではなかったか。こんな状態になったのは、日本の建築が悪いのではなくて、日本の社会が足元から動いていることに原因があると考えたほうがいいのではないかと思っております。

### 〈生活様式の確立〉

そういう意味では生活様式の確立、あるいは社会の流れがもう少しちゃんと明確になれば、われわれ専門家としての設計と条件が明確になるならば、その中で本当に馴染みある、あるいは要求性能に合致できるような家が造れるのではないかと。二一世紀においては恐らく確立されるであろう、その世界に対して、今は模索し、それを探求するときではないかと思っております。技術の発展の過程の中で本格的な技術が生活様式の中に取り入れられて、本格的な土地の基本法が整備され、公と私の権利問題に関しても明確に線引きがされるならば、それに基づいた安定した家が造られるだろうと思えます。

先ほど田中さんは、基本法なり産業構造転換に基づく社会制度が確立するには長い時間がかかるとおっしゃったのですが、われわれとしては待てないぐらいに早く設計と条件を整理できないかと思っております。ウォーターフロントの開放にしても、都心部の空間の開放にしても、土地は無いわけではなくて十分ある、それがき



ちんと使えるようになるためには既得権者との時間的な馴染み、バランスが必要なのだということで、一気呵成に与条件整理、あるいは社会基盤整備ができないということがありますが、少なくとも今土地問題も先が見えてきた、技術の在り方に關しても、ようやくコンピューター、情報ネットワークも、技術的な究極の姿が見えてきたのではないかと。

それと同時に、もう一度改めて、風土・風水・水や緑がいかに私たちの生活に必要なのかも分ってきた。社会資本としての、あるいは、歴史的な環境としてのかつての民家なり建築なり歴史的な文化遺産の必要性も見えてきた。

自然資本と社会資本を取り入れた形での建築、都市の在り方、そういう意味で、私は二〇世紀の車社会に対して、二一世紀は本格的な住宅を確立する時代だと考えております。

かつて工業コンビナートと巨大なベッドタウンが二輪車になつて、わが国の経済を復興させてきました。飯場小屋のようなすみかと生産拠点、そして戦災復興のさなかの中で、二〇世紀後半が明け暮れていったのです。

### 〈マルチハビテーション社会〉

しかし今、日本人が関わりを持つ第一次、第二次産業の場は、国内だけでなく世界に拡散しつつあります。たとえばアフリカの漁場、あるいはカリフォルニアの農業、東南アジアや中国、オーストラリアの工業とかというように、第一次産業が日本に存在するのではなく、世界に分かれていき、そして第二次産業の工場も動いていく。

そうなる、日本の土地が多くは第三次産業の生産と消費を同時に扱いながら、世界中の一次産業、二次産業を操る生産と消費の場としての都市となり、かつての都人に、日本の多くの人びとがなつてくる。第二次産業、企業城下町時代というのは、今世紀

中に終止符を打った形で、二一世紀においては第三次産業の情報管理都市、あるいは国際都市という形を恐らくもつてくるだろう。それは江戸時代三百年間に、二百数十藩の参勤交代の場としての都市形態を、江戸が作り上げたと同じように、今度は世界中の二千万人の人びとの国際的な拠点、集まりの場のひとつとして、二四時間都市、国際的首都機能としての東京の位置づけがなされてくる。

生産と消費が一つの場であるというのが一次産業としますと、二次産業というのは、巨大な工業コンビナートとベッドタウンの間を往復するという二拠点居住社会なのです。ところが、三次産業、四次産業社会に入りますと、私たちは世界に生産の場を持っている、そして東京はその管理センターなのです。ところが、世界は二四時間動いていて、日本の夜はアメリカのお昼です。家へ帰っても私たちは世界の情報をキャッチしながらコントロールしなければいけない。生活の場を海外にも持ち、首都圏にも持ち、憩いの場としてのファミリー・ハウスを持ち、別荘を持つという多拠点居住社会になるだろう。いわゆるマルチハビテーション社会にならないければ、逆に二一世紀の居住環境を保てないという社会になるだろうと思います。

こうした世界の大きな流れの、東京がたまたま最初の洗礼を受けているわけで、今、東京が受けている今世紀の高波はいずれ、二一世紀初頭には日本の各地を、そういった世界に開かれた情報都市、国際都市に変えていくだろうと思います。このための住居の在り方、そしてマルチハビテーションを視野に入れた形で、技術力なり、自然の恩恵なり、日本の風土なりにマッチした居住環境が作られていくだろうと思います。そうした必然性が恐らく明日の住宅を決めていくものである。今起こりつつある東京の混乱のひとつは、明らかに都心三区のゴースト化です。

都心住居というのはなくなり、都心の土地、建物を持っている



尾島俊夫先生

のはすべて法人である。選挙される代議士もいなくなってくる。こんな状態でですから、都心の居住環境に対して整備しようとする本当の声が無くなってしまうことによって、都心の中空、ゴースト化が起こってくる。それが徐々に広がっていつている。

さらに下町においては、産業追いつきの結果、下請工場の職場は次々奪われていつています。これは、いわゆる下町のコミュニティ、あるいは、東京の抱えているインキュベーターといわれる大切な職人社会が消えつつあるということで、これは大変大きな問題であるわけです。

さらに、山の手を見ますと、木賃アパートが二五〇万戸密集している。ここにさらに木造三階建てを許可し、十分な安全な広場無きままに、利便性とか民の今の今を凌ぐための居住空間を増やしている。一、〇〇〇万人以上が危険地帯に住んでいる状態です。さらに郊外に行くと、やっと土地が持てるかもしれないが、通勤に一時間も二時間もかかるのです。若い人が国際化社会の中で働けと言われたときに、一日三、四時間しか寝ないで通勤している。こういう悲惨な状態でこれからの日本を支えていけるだろうか。

今こそ国家が、かつての第二次産業を育成したのと同じように、居住環境維持のために抜本的な施策をとったときに、では私たち建築の技術者が、それにどう応えられるのかということに対して、あるべき形を作り上げる時ではないかと思っっているわけです。

## 未来をどう描くか？

田中 たしかに尾島先生がおっしゃるとおり、工学的にも問題が何であるかが非常によく見えてきた。また社会がどちらの方向に向かつて今動いているのかも見えてきた。ただ住宅、町、都市は、歴史的な所産であり、非常に大きなストックを形成していますから、これを一回転、つまり耐用年数を例えば四〇年とすれば一回

転させるには四〇年間かかるということで、社会の制度、法律の考え方が変わってゆくステップというのはどうしても時間がかかるものなのです。

法律も同じように基本法みたいなものが出てきても、国土利用計画法とか、建築基準法とか、いろいろな個別の法律をそういう方向に軌道修正していくのも、いつも追いつきになりませんので、何かモデル的なもので、ブレイクスルーしていくやり方が、私はあってもいいだろうと思っております。

尾島先生のお話にもありましたように、臨海部のかつての工場地帯の在り方と、新しい工学的に可能になっている技術を集積した住まい方をドッキングさせていくというモデルを、解決の一つのスタイルとしてチャレンジする。現実的にものを考えると、そういうステップがどうしても必要になって、土地問題をそのプロジェクトの中で、どういう形で妥協を図っていくか、賃貸住宅により、しかも将来のインフレに対しても何らかの手が打てるようなものを考えることが、経済的にみて重要なポイントになってくるだろうという気がいたしております。

得田 二人の先生のお話を伺っていて、かなりフラストレーションが溜っておられるのかなという感じがちよつとします。もう少し楽しくやるべきではないか。もう土地問題は置いておいてというぐらいに考えて、明日を語ってもいいのではないか。恐らくここに住宅産業のメーカーの方がおられれば、あまり大所高所論は関係ないとお感じになっておられると思います。

そこでハートの言えば、差別化、個性化であります。自動車もそのとおりで、新素材産業等がありますし、エレクトロニクスの活用は非常に目覚ましいものがあります。住宅産業でも恐らくそうなり得るわけでして、人びとの求めるところ、世の中の進むところ、恐らく差別化、個別化であろうと思えます。

科学技術庁の未来予測でも、ユニット・モジュール化とか、いろいろな空間や環境を自由に変えられる、制御できるもの、設備、カーテンウォール、パネル等に代わる全く新しい部材の実用化といったような項目は、比較的早い時期に実現するだろう、という回答になっております。この辺の技術予測は、自動車でもそうですが、予測よりも早く実現いたします。

ということでメーカーの方がいらっしゃるならば、土地問題、都市問題は偉い先生方に任せておいて、住宅のハードをインディビジュアルな面で革新を起こして楽しくやつたらいいのではないかと。その可能性は大いにあるし、ひよつとすると前倒しで実現するかもしれない。

非常に乱暴な私見を述べれば、土地問題はコンピュータ・アンド・コミュニケーションで、かなり二二世紀は変革が起きるのではないかと思っております。

尾島 今、田中さんがおっしゃった、資産はストックでということ、得田さんが生活は楽しく、フローでという感じは、わが建築界もそれはすべて内包したいという前提の下で、スライドを見ていただきます。

(スライド映写——下段参照)

江戸時代の東京には三〇〇万人住んでいましたが、今は関東首都圏、一〇〇km圏にわたってスプロールしてそこに三〇〇〇万人の人が住んでいます。都市環境にはヒート・アイランドという都市気候の状況が起こっていて、郊外の汚い煙を全部、都心の居住域に運び込んでくるという状態になっています。都心から緑や水が減ってくることで、都市全体の居住環境を悪化させているということ、今まで工場が連なっていたウォーターフロントの

ほうが、今やはるかに居住環境がいい。

今後、第三次産業の社会になると、工場が移転したあと、そこは交換の場、コミュニティの空間になり、東京湾岸の風景は変わってくる。緑を取り戻したクラスターが広がってゆき、ひとつひとつに居住環境を取り戻そうという動きを、大きな面で考えていこうとしているわけです。

と同時に、内陸部に関しても、郊外には完全な緑を復活させる、そして都心については国際都市の首都としてふさわしい、都心の住まい方という提案があってもよいのではなからうか。

この三〇年間に土地価格は三〇〇倍から四〇〇倍になっていきます。しかし建設費は三〇倍、人件費は二五倍、鉄・ガラス・コンクリートなどは二倍にしかならない。三〇年前に平家建ての家だったら、今は一〇〇階建てを建ててもよいはずだ、という発想が生まれます。相対的な価格に応じた生活の様式というのは作れるのではないでしょうか。

今、都心の高さ三三m以下にはほとんど人は住んでいません。三三mのところを居住生活レベル、地表生活環境面と考えて、その上に第一種住専レベルの住空間を作ることとは不可能ではない。今ある道路をストリートキャニオン、溪谷があると考えていけば、太陽も風も緑もいっぱいある生活環境を作れるのではないかと。

また、環六、環八間の木賃住居密集地も、容積率二〇〇%、建ぺい率六〇%では、風も通らず、地表面の裸地に陽も当たらない。地表面を開放して風の道をつくり、 commonspace なりコミュニティリテイ空間を作ってゆく。そうしたことが可能なように基準法の規制を変えていかなければ、環境は絶望的になってきます。社会資本ストックを今こそということですが、石油備蓄をやったわけですから、今度は都市の中の建物の中で資源備蓄をする。鉄の大きな柱とか大理石の大きなものとか、今のうちに資材を建



高層と低層の共存で、都心部の空洞化を防ぎ、コミュニティの維持を。



ヒート・アイランド現象により汚れた空気が都心へ運び込まれる。

物の中にストックしていくことを考えたい。建築資材は何千年もつわけですから、これは今の時期とても大事なことです。逆に、環八の外は全くエコロジカルに開放してしまう。社会資本を整備しない、道路も造らない、電気もガスも無しとなれば、否応なくエコロジカルなシステムで郊外型の住宅ができていかざるを得ない。

日本列島三七万km<sup>2</sup>、一億二千万人で割ると一人あたり三〇〇〇㎡くらいの割り当てがあり、そういう意味では、日本人は誰でもがエコロジカルな別荘を持ち、誰もが都心居住できるだけの容量を日本が持っているということです。

私たちの住居は二〇世紀というたった一〇〇年間で激変してきました。これから土地基本法も確立するでしょうが、社会制度も生活様式も、二〇年、三〇年の間にまた激変するでしょう。しかし二一世紀はかなり安定した基盤が生まれるのかなと思っております、その生活様式を明確にしたうえで、建築様式を模索するときだと思っております。

## 地価問題と高層住宅

太田 どうもありがとうございます。尾島先生のお話は、土地の高度利用のような話にもなりかねないのですが、最終的には土地問題はぜひぶんだきな問題としてあります。もう一つ、われわれが考えなければいけない問題は、都市住宅の生活、ライフスタイルで、こういうものをどのように考えるかということも大きなポイントです。この両面から皆さんと一緒に議論したいと思えます。

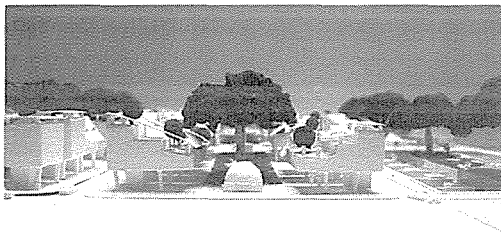
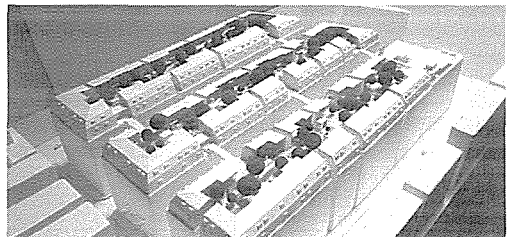
さていまままでお話を伺っております、住宅とか住居というものが文化形成の一つの基になるというところでは共通しております。生産あるいは産業だけでなく、人間の誇りある生活を支える

文化を形成する基となるものであるはずだ、だからこそ未来の住宅をどのように捉えたらいいだろうか、という問題になってくるのだと思います。

しかしどうい生活をもつて誇り得る生活、ゆとりある生活とするのか、あるいは豊かな生活と考えるのかという辺りについて、もう少し詳しくお話いただけると有難いと思います。これから住宅というものを考える際に、本当に、今までの延長として住宅があるのか、今までの生活の延長として、家庭生活、住宅における生活があり得るのかという辺り、生活構造の仕組み、形態をもう少し議論していただきますと、また別な観点があるかもしれません。

住宅というものも、住むという機能が、今考えているような機能と変わってくるかもしれないということを含めて、果たして、住宅の機能が都市の中に生存し得るのかどうか、果たして都市の中で、今までと同じように、住宅という概念の中で捉えられる器に住むのかどうか、ということもあると思います。いろいろな形で都市の在り方、生活の在り方との関わりで変わってくるだろうと思います。

大河原(東京理科大学) 日本のいろいろな都市計画、法規は、一般的には「こうしてはいけない」と書いてあり、「こうしなければならぬ」とはどこにも書いてない。それが欧州へ行きますと、地区計画と言いますが、「こうしなければならぬ」ということになっている。東京を一例に挙げますと、「ここはこういう形にする」ということを公聴会も開き、東京全体の構想をまず練るべきだと思えます。例えば、山手線の内側では、五階建て以下の建物を造ってはいけない、六階建て以上しなければいけない。それを造れない人に対しては、公共団体がその上の空中権を借りるなり買うなりして、そこに住宅を造る。それから少し離れて、今



右／都心部の高さ三二mの上に住空間を生み出す。左／低層密集地では、地表レベルを開放して風の道をつくる。

問題になっているような低層住宅地の地価の値上がりについては、そこは低層住宅で抑えてしまうわけです。仮に一戸建て住宅なら、そう土地の値上がりは考えられないと思います。

もう一つは、北欧等では、現在高層住宅は非常に嫌われています。高層住宅にはなかなか人が入らなくて、四階建てとか五階建てが満員になっているという状況です。それからパリ郊外のデフアンスでも高層住宅をやめて四、五階建ての住宅を造っているわけです。それなのに、市郊外へ行って高層住宅を造れというのは、少し時代とそぐわないのではないかと。町の真ん中は結構です。これらの点についてお聞きしたいと思います。

田中 私も都市づくり、あるいは都市計画という領域については、それほど詳しくありませんが、銀行あるいは財界的な見方から少しお話をさせていただければと思います。

もう少しメリハリを持った形でやるのが土地政策にも必要だ、というご意見だとすれば賛成でございます。

日本はこれからも所得を上げていかなければいけないので、国際競争力も保ちながら、サービス産業とかソフト化に対応していかなければならない。それだけの経済力を安定的に伸ばしていかねばならないと思います。これ以外は駄目という強権的な規制は、理論的には土地の値段の抑制あるいは下落ということに、十分力を発揮し得ると思いますが、その際、建築活動とか開発が、かなり水をかけられてしまう可能性を含んでいるのではないかと、という点が心配です。したがって、土地神話のベースを崩すためには、どういう形でインパクトを与えるか、それは非常に規制を強めて、需要そのものを冷やしてしまうという行き方と、もう一つは、供給を思い切って増やせるような対策をとってしまおう。供給がドツと出た場合には、土地は値下がりのインパクトを受けることになる

ということかと思えます。

そういう意味で、まず供給を増やすという形でインパクトを与える。それによって土地神話を少し不安定なものにする。土地神話は本当に真理ではなくて、もしかしたら間違いかも知れない、という不安感を持ったリスキーなものにすることが必要なのではないかと考えているわけです。都市空間の高度利用あるいは土地の利用のミスマッチ、工業用地、埠頭用地、こういった所の都市空間への投入、あるいはそこへの住宅の付置を、かなりボリュームとして大々的に確保していくことが、土地問題に一つの大きな現実的なインパクトを与え得る方法ではないかと、私の立場では考えております。

太田 今の問題を含めまして、先ほどのもう一つのご質問、高層住宅に住むことについてどういうふうにか考えるか。それについて尾島先生にコメントをいただきたいと思えます。

尾島 東京・荒川区の区民の集まりで、恐る恐る「下町マンハッタン」という絵を描きまして、模型を作って出したところ、賛同の雰囲気を得たのです。イギリスやフランスでは、超高層住宅に対するある種の拒絶反応が起こっています。そういう意味では超高層住宅に住まわせる必然性、あるいはこれからすべてを超高層住宅に追い込むのだという、そういうアプローチの仕方をすれば大変間違っていると私は思うのです。

しかしたとえば下町の低層のコミュニティが失われようとするときの空中権みたいなものを、工場空き地とかに持って行って、そこに高層の住宅を造るということで、共存を図れないだろうか。今放っておくと、すべての下町の人たちが追い出されていくというような状況下にあるので、大河原先生がおっしゃったように、立体的な用途地域の厳密な規制という意味で、商業と何となく住宅というのではなくて、明らかにそこに住んでいる人たちのため





の住宅を何パーセントその地域で造るとか、そういう意味での立体的な用途規制で用途の種類に関する厳密な状態規定、また、マンションを造っていないながらオフィスが変わっていつてしまうような設計基準ではなくて、厳密な意味での使われ方のほうから用途を規制しながら、しかも立体的にそれをその都市にふさわしい形で住まわせていく。超高層住宅も、混乱期にやってみるのはいいのではないか、という意味で提案しているわけです。

## 生活様式はどう変わるか

土谷(清水建設) 生活の中身ということが先ほど出しましたが、住宅様式というよりも、生活の在り方で決まってくる部分があると思います。客間が消えるというお話がありました、それはおそらく子供の個室は作り、客間は作らないということで、子供を接客待より大切にするという価値観の現われかと思えます。また、夕食の時間は何に合わせるか。テレビの時間なのか、夜のお祈りなのか、それとも子供の塾の時間なのか。そういう意味で生活の様式、生活の在り方というのは、住宅と関わってくる。特に東京圏の多くの方がたの生活のベースは何だというふうにご認識なのでしょう。またそれは将来どうなっていくのか、見通しをお伺いしたいと思います。

得田 自動車というのは、一人一人の個性化、差別化が最後のよりのところでございます。自動車についても都市で規制されるべきだ、という論がございますが、自動車こそ最後の砦と言ってしまうと悲愴感がございますが、個人に対する生活様式ではないかと密かに考えています。規制は最小であるべき、計画的なものも最小であるのが望ましいのではないか、というふうに思っております。

ご質問にも非常に無責任な答になってしましますが、将来はど

うなっていくかということに対しては、われわれがプランニングすべきではないと思います。

人間性というのは変化であり、一本調子ではない。私は螺旋論というのを言っているのですが、ある意味ではゆらぎです。繰り返して繰り返し各様式は変わっていくのではない。技術の高度化、進歩は、ある意味ではリニアな一本筋なものです。人びとの意識については、螺旋的に行きつ戻りつ変化しつつ変わっていくのではないかと考えております。

田中 多分、高度成長期、所得も上がる、忙しくもなるという競争社会の構造が、これから大きく変わるとも言われていますが、あまり大きくは変わらないだろうと、私は思っています。アメリカのように消費が先行して生産力が遅れてくる、というような構造にだんだんと陥ってくることは、われわれとしてもあまり考えたくない、ビジネスの世界は非常に苛烈な競争の世界ですので、ゲーム的に、勝った負けたの喜びの中で、やはりそこで傷ついたり、これからもいろいろ悲喜こもごもある世界であろうと思えます。

かたや夫婦とか家族とかというものが、ますます大事になってくる。これは同時並行的に進む現象で、世代間とか、いろいろな価値意識をお持ちになられている方がたの階層がありますから、その中で両サイドの綱の引き合いという形で、世の中は構成されていると思えます。そういう意味で、今までどおりではなくて、家族夫婦、あるいは家庭という所に重みを置く考え方が、少し比率として上がってくるのかな、という感じ。いろいろな世代、いろいろな考え方の人がいる。その人たちの選択にいろいろな住まいの選択の幅が広がって、それに応えられる、というような住まいをどれだけ用意していけるのか、供給できるのかということではないかと思えます。

自動車の車種は非常にバラエティが増えてきて、多品種少量生

産がまた再び復権してきている時代でございます。住宅も大量にどんと造って、それを同じ様式で商品化して売るといふ形ではなくて、いろいろなニーズに対応できるような選択の幅を広げたフレキシブルな住宅、その選択の幅を広げていくことが住まいの豊かさなのではないか、というふうに私は考えているわけです。

尾島 得田さんの世界はいい世界だなという感じがまずいたします。本当に二〇世紀は車の世界だなと。田中さんも、「多様な選択」と言われていますが、現実には選択なんかは無いと思います。首都圏の生活の中で、学生にしてもサラリーマンにしても、選択なんてほとんど無いのです。

今、自由な様式の多様な選択ができるかというところ、社会的な基盤が今の段階では無いのではないかと。したがって、住宅基本法なり、土地基本法なり、都市の生活基本法といったものを、一回かちっと作ってもらわなければいけない。しかしそういうことを前提としても、第三次産業社会はマルチハビテーションの世界だと思っております。

参勤交代の江戸時代には、侍階級は東京に上屋敷、下屋敷、地方にまた自分のプライベートルームな領地の中の住居を持っていた。そういう上層市民として江戸時代の生活様式があったと思うのです。いま主権在民の中で、最も大事な生活の基盤としての住居に関しては、もつと貧欲に要求していいのではないかと。そういう意味では土地、金融、車に駆かれた社会が終わるよう、あえて挑戦しているわけですが、生活様式に関しても、建築界のほうでちゃんとした提案を、今の体験の中から出したほうがいいのではないかと、という感じがいたしております。

## 高齢化社会における住居・車像

高橋(日赤武蔵野女子短大) 今現在でも、六〇歳以上の老人を含ま

む世帯の一、三〇〇万のうち、三分の一以上が単身世帯と夫婦のみ世帯でどんどん増えています。高層住宅の話が出ましたが、私の八六歳の姑は、九階でさえ窓の外の景色を見れば目が回るといい、住めなかった。結局は窓から庭が見えるマンションの一階を探して、錯覚によって彼女は落ち着いたのでございます。ぜひ尾島先生に、高齢化社会における都市住宅の明日を探っていただきたい。田中先生には、これからは持ち家ではなくて、賃貸化していくといわれましたが、企業ベースも成り立ち、国の福祉としても成り立つケア付き住宅、シェルタード・ハウジングというイギリスのような住宅を、どういうふうに組み込んでいただけるかをお聞きしたい。

また、車が個室、生活の場として、子供とのプライバシーを守って話し合う場として役立つか。私もいろいろ経験を持っております。そういうことから、得田先生のワゴンと住宅との対応というのは、大変に興味深いことでございます。

お年寄りが自立が不可能になった時に子供の近くに来れるための住宅化した自動車、というものが考えられないだろうか。お聞きしたいと思えます。

尾島 今のお話は全く同感でして、馴染みのない空間にいきなり住めば、当然拒絶反応を起こすわけです。たとえば「六〇歳過ぎたら新しい家は建ててはいけません。すぐ死んでしまふよ」という話があります。住宅の中で老後の安定したものを求めて、いきなり田舎から出て来て東京に住むことでさえ、大都市恐怖症があり、それがまた超高層に住むというのは自殺行為だという気がします。いきなり超高層に、特に弱者を住まわせるという形でのアプローチであってはならないということが、倫理綱領としてもまず必要だと思います。

まず高齢化社会における都市の住まい方の中で、むしろ私は、



尾島俊夫先生

今、年をとつたら近郊外の老人ホームに入るよりは、逆にネイティブランドのほうに戻れるような居住環境を作り続ける。地方と都心との、あるいは別荘地との使い分けに対する存在の仕方があっていいのではないか。年をとつたら子供に戻るのと同じように、かつての場所に回帰して行くぐらいいのゆとりある場の確保というのは、ぜひ欲しいというふうに思っております。それは必然的にマルチハビテーションにならざるを得ない。何か所か拠点を維持し続けなければいけないのではないか、という意味なわけです。

田中 尾島先生がおっしゃったように、弱い方がたに対してどういう配慮をしていくかは、本当にこれから真剣に考えていかなければいけない話です。東京の中だけでその問題を片付けるといふのは非常に難しい。たとえば交通手段が非常に発達し、飛行機の運賃も国際的な運賃水準に対応して、安くなっていくことも期待できるといふ中で、例えば、九州にライフ・ケア付きの老人を受け入れる住宅というものをある程度まとめて造り、箱根と同じような時間距離でおじいちゃん、おばあちゃんと会えるというようなことは、これから進められていくのだらうと思えます。そういうプランは今いくつかあり、地方にシルバー・マンションとかライフ・ケア付きのマンションを造ろうという動きがありますが、これを民間でやるとどうしても高くなってしまふので、社会的には公的なものがかかり強く絡んでいかないと難しいのかなと考えております。

太田 各パネリストのお考えは、基本的には市場原理に基づく自由経済の中の話なのですが、やはりどうしても公の問題というのは計画経済的な観点がなければいけない、というふうな感じも少しづつ話としては見えてきております。それがないと、大きな政策的な問題は成り立たないのかもしれない。気持の上では、各々の個性とか、各々の人間性を尊重するという立場でお話なさつ

ているように思います。

得田 日本におけるマイカー伸長は、ある意味では住宅政策とのカウンター・カルチャーであったのではないかと思えます。昭和三〇年、四〇年代に爆発的に増えたのは、マイホームを持ってないからマイカーでも持とうかというのが、大きな隠れもない理由でありますし、私も個人的には、「マイカーは夫婦ゲンカをする格好の場である」というふうに書いたこともあり、マイカーは個人の自由をあまねく保障するものであると思っております。

高齢化社会の到来については私どももいたく認識しており、車の技術の対応についても、追突防止装置にしろ、自動ブレーキング装置にしろ、研究をいたしております。高齢の方になればなるほど、自分の足で駆けずり回るわけにはいきませんので、モビリティが必要でございます。そのいちばん近いところにいるのが自動車だとうぬぼれております。

高齢化社会も、個別論で論議しないと、ハードウェアの対応もできない。すなわち寝たきり老人と少し機能障害のある人とは対応が違うわけで、そういった人びとのすべてに自動車会社に対応をしているかとなると、今は、そうはいつておりません。ドア・トゥー・ドアの機能がいちばん近い圏にある車メーカーとして準備をそれなりにしておりますが、コマージュル的にはすぐ明日に出せるかというところと出せないわけでございます。ただ、今後は私どもも企業の責任を自覚しております。

「住宅化した自動車の可能性はあるか」。かつて上田篤先生が「坪車」というのを提唱されております。私どもは自動車は動くことのできる家だと、広義には解釈しております。「現在のワゴン、セダンと、現在あるいは将来の住宅とのインターフェイスがうまくいくように考えているか」と言われれば、まだそこまでは考えていませんが、現状の自動車でも動く住居の要素は多々持ってい



得田与和先生



田中好輔先生

ると思っっています。

## 拠点としての住居・家族のゆくえ

藤井(清水建設) 家族が都市に定住するために住宅が必要である、という前提の上で進んでいると思うのです。ところが家族のそれぞれ一人ずつは、それぞれの生活を持っていますし、その生活は家族だけではなくて、それ以外の場にどんどん動いていると思います。そういった中で、マルチハビテーションとか、ネットワーク居住とか言われているのですが、そうすると家族はかなりばらばらになってくると思います。

一方、人間にとっては拠点が必要である、と言われているのですが、将来の住宅が本当に人間にとっての拠点になり得るのか。その拠点にはどういう人が住むのか。拠点間の移動というものはどういうものになるのか、お伺いします。

清水(住総研) アメリカでは、工場にモービル・ホームで来た工員がそのまま駐車場に居ついてしまっって住宅化してしまっている、というような問題があるそうですが、日本では法規でできなかったキャンピング・カーおよびモービル・ホームについて、得田先生のご意見をお聞かせください。

尾島 国際化が進むほど、あるいは私たちの生活が変化に富むほど拠点が必要だということで、特に安定した社会で二一世紀以後の世界を考えると、子供の時代、青年期の職場中心の住居の時代、老後問題、墓の問題というのは、私たちの非常に大きなテーマになる。あるいは女性が結婚をして姓が変わるのも拠点を失っていくこと。何回も離婚をすると何回も変わる。ますます自分のより所が無くなる。羽ばたけば羽ばたくほど、自分たちのあるいは自分のルーツをきちんとしておかないと、自分の位置付けがわからなくなる社会に行くだろう。それはおそらく背番号、いろいろな

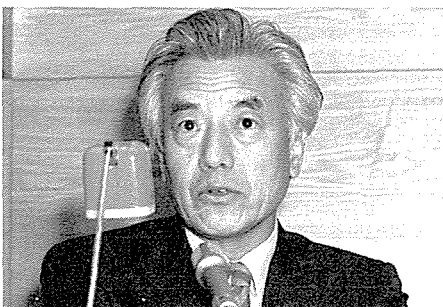
情報的に操る国の管理体制ができると同時に、自分自身の心のより所、家族のより所、あるいはルーツをきちんとすることがますます大事になるだろう。それがまたアイデンティティをきちんとすることであり、これからの歴史的な基盤の下に自分たちの将来を雄飛していく拠点としても、大事なわけです。住居なり、居住環境、拠点、本籍、戸籍ということに関しても、多様な文化の基盤の中でもう一回建築界としても、そういった言葉の整理をしなければいけない時期にきているのかというふうに、いまのご質問を聞きながらも考えておりました。

得田 「拠点として住宅とは何か」というお話ですが、三〇年、四〇年後には自動操縦車というのが一つの究極車と考えております。そういう意味で比較的遠い将来の拠点はばらばらになる。本当の拠点としてのマイ・ホームは無くなるのではないかと。

近将来は何かとなると、大方の方が言っておられるように、比較的二極化的にならざるを得ないのではないかと。プレイとワークを重視すべきである、という意見も大いに賛成でございます。ワークはともかくプレイをちよつと広義に解しまして、家族との団欒とか、祖先とのつながりというものを含めるわけでございます。ワークとプレイは、特に東京近辺のような大都市では、分離せざるを得ないのではないかと思っております。

二番目のモービル・ハウス、キャンピング・カーについては、日本ではインフラが整備されていないこともありまして、また土地問題に引っかかりまして、インフラを整備する余裕はなかなか到来しないということで、ほとんどその研究はあまりなされておりません。

しかし欧米の動向、最近のレジヤ振興法等々というのがありますから、そういうインフラが整備されれば、「住宅は動くことができる」というのが謳い文句で



司会の太田利彦氏

ありますから、ワークする所と遊ぶ所、あるいは遊ぶ所の多極化という、人間の本性の選択の可能性を広めていく上では、非常に大きなマーケットになると思っています。今世紀はどうかとなるかと、ちょっと難しいのではないかと。

田中 世代間の移り変わりというようなことを考えると、ここで革命的に二一世紀に向けて家族、家庭というものが大きく変わるということは多分ない。徐々に新しい考え方を取る人が増えてくる、という形で変わってくるかと考えてよろしいのではないかと。

重心は徐々にしか動いていかないのだ、という考え方を私はとりたと思います。そういう意味で、家族というのは家が必要なのだろうと思います。家の在り方は、そこで家族がべたべたすることではなくて、ウィークエンドとか夜の時間にみんなが顔を合わせる場所、ある時間帯、普通のウィーク・デーも個々ばらばらに、自由気ままに動いている。ある時間またみんなが顔を合わせる、という場になっていくのだろうというふうに思います。

太田 どうもありがとうございます。お聞きになってお分りのように、コンセンサスが得られるような結論はなかなか得難いと思います。都市機能と住宅というものに対する考え方について、ある程度の提案があり、その結び合わせの中で、都市住宅の明日をいろいろと探ってみたいと思っていたのですが、なかなか都市機能を十分に定義するまでには至らないと思います。将来はいろいろ多様な生活様式というものがどうしてもあり得る。それに対して、様々な形で対応できるようなものが望ましい形でありそうだが、そのためには、いちばん大きく問題になっております土地の高度利用と、多様なライフ・スタイルとをどういうふうに変えていくか、という基盤を整備していくことがまず最初に必要であらう、ということがコンセンサスとしてはあったと思います。極めてはつきりとした形で将来の都市の住宅、あるいは都市の居住の

在り方を明示されたわけですが、これも一つの考え方であらうと思いますし、そうなるためには、生活に対する考え方、意識改革というふうなものも必要になってくるでしょうし、今まで蓄えられたストックをどういうふうに変えていくか、というあたりにも様々なフリクションがありそうだとお聞きしました。

こういつた中で、何がインセンティブになって、将来どういう方向に移っていくかというのは、今日の討論ではなかなか掴み難かったと思いますが、大きくは豊かな文化形成ということで、日本の社会が、これから都市を中心にして新しい住宅を模索していかざるを得ないだろう、その時に考えなければいけない様な問題は問題提起があったというふうに考えます。われわれとしましては今後もこういう提案を、土地に対する高度な利用に対する政策的技術的な問題の対応、ライフ・スタイルというものをどういうふうに捉えていくかということに対して、研究的には今後いろいろとアプローチしていかなければならないだろうと思っています。

\*

大坪(財団専務理事) 今年は今財団ができて四〇年目にあたり、これを記念しての第一回のシンポジウムを五月に「江戸東京四〇〇年」というテーマでやりました。江戸時代にはこの巨大都市を造ろうとする文化があり、知恵があった。それが明治以降なくなってしまうのではないかと。第二回シンポジウムの「都市化社会の中の住居」では、コミュニティ論で示される現代都市生活の新しい悩みの話が、中心となりました。そして明日の都市を作るための知恵はどうしたらいいのか、というようにどこに話が戻ってまいりました。これまでの提言をヒントとされましての皆様方の明日の住まいづくり、都市づくりのために、私どもも微力ですがお手伝いをしていきたいと存じておりますので、よろしくご理解のほどをお願い申し上げます、閉会の挨拶とさせていただきます。



〈論文〉

# 椅子坐式生活様式の導入過程に関する一考察 「あめりか屋」の住宅作品を通して

内田 青蔵

\* 誌面の都合により、注1、36と図版の一部を割愛させていただきました。この論文の全文は『研究年報』15号(一九八九年四月刊)に掲載いたします。

## ①はじめに

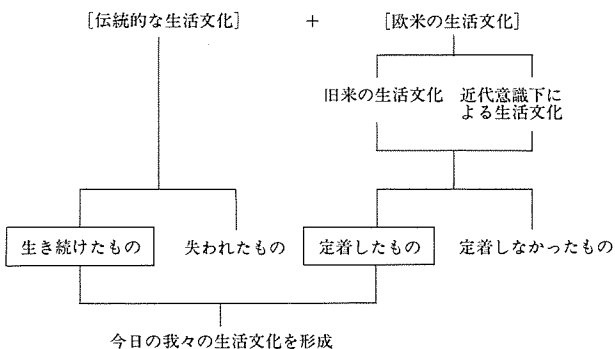
筆者に与えられた当初のテーマは「近代化の中で定着した外来の生活様式と定着しなかった生活様式」というものであった。このテーマに関する問題についてはより具体的に平井聖博士が『すまいるん』一九八八年夏号の中で「近代化の果てに」と題し展開されている。それによるとこのテーマの起りは、わが国のいわゆる明治以降の住文化の変革は、「近代化のあらわれ」と一口に言われる」が、実はそう単純な過程ではなく、「本当の近代化の道程を見極めるには」それまで続いていた「伝統的な生活文化」をどう保ち、新たな「欧米の生活文化」をどう取り入れてきたか、という根本的な問題を明らかにすべきであるという問題意識から

のものであった(図-1)<sup>注1)</sup>。筆者は日本近代の住宅史に興味を持ち、当時の住宅の「近代化」に関する研究を続けているが、いままで研究対象として注目してきた「あめりか屋」の作品を対象を絞って、「欧米の生活様式」である椅子坐式生活様式が導入されていく過程をみることで、与えられたテーマに部分的ではあるが答えてみたい。

ここで扱う「あめりか屋」は、明治四二年に東京市芝区琴平町一等地に開設されたわが国初期の住宅専門の設計・施工会社であり、その活動は昭和一八年まで確認される。そのため、「あめりか屋」の手になる住宅は明治末期から戦前までのわが国の住宅の変遷過程を連続的に見て行く際の好個な実例と考えられるのである。またさらに、後述するように「あめりか屋」は、

図-1 「近代化の果てに」による

《日本の明治以降の生活文化》



開設当時は住宅の設計・施工ではなくアメリカから輸入した「組立住宅」を販売していたことから明らかに、アメリカ住宅を直接導入することにより日本への普及を目指していたのであった。筆者は、この「組立住宅」の販売から設計・施工事業へと移行して行く中で創り続けられていた「あめりか屋」の住宅の軌跡を「西洋館の和風化」であつたと考えている。すなわち、これは一つの仮説にすぎないが、従来の住宅史では明治以降から今日の住宅までの変化について、在来の伝統的住宅を中心に据えて、それが欧米の影響により次第に変化してきた……その変化を「近代化」、「西洋化」と一般に称している……というプロセスで語られてきたが、わが国に導入された西洋館に伝統的な生活様式や住居形式を取り込むとする意図……「西洋館の和風化」……により新しい住宅形式が形成されたというもう一つの「近代化」のプロセスがあつたと考えているのである。このような立場を前提に、とりあえず「あめりか屋」の紹介から始めたい。

## ②「あめりか屋」について

### (1) 創立までの経緯

「あめりか屋」の設立者は橋口信助である。橋口は明治三年に宮崎県の現日南市に生まれ、明治一八年から同一九年の一時期東京商業学校（現一橋大学）に席を置くが、再び宮崎に戻り木材業や石炭業に従事した。しかしながら、事業の失敗により再び上京して横浜の英語学校に入学し、卒業前のおよそ明治三四年頃アメリカに渡った。渡米後、橋口はワシントン州の北米の中心都市シアトルに居を構え、当初はアメリカ人の家

庭で下男として働いたり、あるいはシアトルの地場産業である製材所などで働いていたようである。その後、橋口は在米の日本人を対象とした中古服の商売を思いつき、シアトル市内に「橋口商店」を構えるまでとなる。一方、中古服店の利益をもとに、橋口は新しい事業としてシアトルの地場産業である米松伐採業に着手することになる。橋口は、まずオレゴン州のコロンビア河の周辺の広大な米松林を買い求め、さらにその伐採労働者を得るため移民会社の設立を企てたという。

しかし、この新しい事業を開始した明治四〇年当時は折り悪く、アメリカでは日本人労働者の排斥運動が展開されており、とりわけシアトルでは製材所労働者に対する排斥が行なわれていた。このため、明治四一年二月に、日米間で日本側が自主的に移民を制限するという日米紳士協約が締結することになり、この影響から橋口の新しい事業は頓挫してしまうのである。

これにより橋口は、日本人排斥運動の展開される中でアメリカに留まり事業を興すことの困難さを知り、日本にもどつて新しい事業を興すことを決心することになる。その新しい事業がシアトルなどで普及していた組立住宅の販売であつたのである。ちなみに組立住宅の通信販売を行なっていた大手会社シアーズ・ローバック社は明治四一年（一九〇八）に初めて通信販売用カタログを発行し、本格的に住宅販売事業に乗り出している。当時、アメリカではこのような軽便な一戸建て組立住宅が一般住宅用として普及していたようである。

ところで、橋口が「組立住宅」の販売を日本で行なおうと考えた背景は、単にアメリカで流行しつつあつたからということだけではない。それはむしろ日本の若い頃の経験によるものが大きかつたようで、橋口

は畳に座るといふ伝統的生活様式を会得するために幼年期に受けた躰に對し極めて批判的であつた。このころ、畳に座るといふ伝統的生活様式を止め、椅子坐式の生活様式による住宅を普及させようとした要因の一つであつたようである。

なお、組立住宅の販売を計画した橋口は、帰国前に直ちにシアトルのビジネス・カレッジに入学し建築を学んだという。

さて、橋口は、組立住宅の部材とともに、洋館用の建材として扉・外壁材のシングル・長押挽下見板などを購入して明治四二年二月帰国し、同一一月一日東京市芝区琴平町に「あめりか屋」を開設している。その「あめりか屋」の事業内容は、橋口が賛助員であつた建築学会の会員名簿によれば、明治四三年から大正元年までは「洋館造作用木材輸入販売業」、それ以降は「建築設計家具裝飾請負」とあり、大正期に入ると洋館用の木材販売から家具をも含む住宅建築の設計・請負へと大きく変化していったのであつた。

### (2) 創立者橋口信助の理想的住宅像

#### A 椅子坐式生活様式の擁護論

橋口の組立住宅の導入を企てた動機の一つとして、畳に座るといふことへの嫌悪感が働いていたことは既に触れたが、ここでは「あめりか屋」の作品に触れる前にもう少し詳細に橋口の抱いていた理想的な住宅像について見て行く。

管見によれば帰国二年後の明治四四年八月に初めて橋口は雑誌に記事を寄せている。少し長い橋口の基本的立場が表されているため引用したい。

今日の如く住宅は日本風で、勤め先の官庁会社等は西洋風でありますと、入つては和服の日本風をなし出で

ては洋服の西洋風をなすといふ工合に、和洋両様の衣服を要する訳で、実に不便極まる次第で御座います。殊に婦人の服装改良は久しい間の宿題でありまして、一般にその必要を認めらるるに拘らず、日本風の住宅に住んで居ては、到底これが改良は期せられませんが、

此点から見ても、家屋の構造を改むるといふことは、今日の急務でありませう。且つ西洋館を日本家に比較すれば、第一掃除の回数も省け、召使の人数も減りま

すし、用心もまた堅固で、一家打掃うて外出するとしても、別に兩戸を繰るでもなく、入口の扉に一つ錠をおろして置けば、心置きなく出らるるといふのであり

まして、その便否は逆も比較にならない位で御座います。<sup>す洋刊。</sup>

橋口は、当時の生活状況について、住宅は伝統的生活を保つ一方、官庁などの社会生活は欧米的な生活が一般化しつつある状況を指摘し、衣服に例えて和服と洋服という和洋両様の衣服を必要とせざるを得ないため「不便」であると述べている。これは主に大正期に展開する生活改善運動を推進させる根拠としてしばしば見られるいわゆる「二重生活」批判である。<sup>洋刊。</sup>この和洋両様を要する煩雑さを解消するには和洋のいずれかに整えてしまえば良いことになり、橋口は住宅も欧

米的生活を行なえる場に整えることを主張していた。その理由は、まとめると①経済的(召使の人数が減る)②保安的(用心が堅固)③能率的(掃除の回数省ける・外出時に兩戸を閉めなくともよい)、という三

点から西洋館のほうが優れているからというものであった。また、翌年の同四五年九月には橋口による家具に関する記事が見られる。<sup>洋刊。</sup>そこでの論旨は、実際に西洋館を建てようとした時、人びとは①畳が無く椅子だけの生活でくつろぐことができるのか、②家具費が高い

のではないか、という二つの不安を抱くとし、それら

の不安に対する反論を述べている。すなわち、①に対しては家庭内の団らん用に事務椅子などを用いるなどの西洋住宅に関する知識の無さによる設備の不完全に原因があるとし、②に対しては想像するほど多額ではないとし具体例を示している。このように、橋口の主張はあくまでも在来住宅と西洋館を比較すれば経済性・能率性・保安全性から西洋館の方が優れているという認識に基づいていることが判る。そしてまた、その西洋館の中で生活は当然ながら椅子坐式生活を前提にしていることは明らかである。

ところで、橋口は大正期になると住宅改良運動の代表的担い手であった「住宅改良会」を組織している。この組織は佐野利器、武田五一などの当時の著名な建築家や、「動作経済」という考え方をもとに住宅改良の必要性を主張していた三角錫子という家事労働の研究家の協力の下に設立されている。<sup>洋刊。</sup>住宅の啓蒙活動の場としての機関誌『住宅』は大正五年八月から発行され、橋口は会主として大正五年八月から死亡する直前の昭和二年九月号までは毎月記事を寄せている。ちなみに、その総数は一二四編で、その内容は住宅改良に関するものが一二四編中七〇編を占め、そのうち住宅改良の具体的要点として生活様式を床坐式から椅子坐式に改めることを主張しているものが四〇編と最も多い。<sup>洋刊。</sup>このように、橋口は住宅改良のあり方として起居様式を、伝統的床坐式から欧米の椅子坐式へと改めることを特に重視していたのであった。具体的に

見て行くと、大正五年九・一〇月号「新旧住宅の長短」では、詳細に椅子坐式の擁護論を展開している。すなわち、衣服と住宅の関係から、和洋両様の衣服を必要とする二重生活の不経済性を挙げ、住宅を椅子式にすることに

により衣服の洋服化が導かれることを述べてい

る。また、衛生と住宅の関係から、畳は「膝を曲げて坐するといふ害ばかりでなく、恐るべき伝染病の媒介物」であるとして批判し、さらに、動作と住宅の関係から、従来の立つ・座る・しゃがむという起居形式を緩慢・不活発と批判し、椅子坐式のそれを敏捷・活発と評価している。このように、橋口は椅子坐式生活様式の良さを主に①経済性、②衛生上、③健康上、④能率性、という観点から主張しているのであった。

また、同年一二月号では生活改善と住宅改良の関係について述べている。

生活を改善しなければ住宅の改良は行はれないと云ふが……住宅は生活を盛る器である。器の如何によつて生活が如何様にも変化し得られるのである。従つて吾々は、先づ自己の生活を改善せんとならば其の器たる住宅を改良しなければならぬ……二重生活の不合理を自覚して、今後の生活はどうしても腰掛式でなければならぬ。<sup>洋刊。</sup>

ここでは、橋口は生活改善の実行においては第一に住宅の改良が優先し、その結果おのずから生活の改善が促されるとし、そのためには住宅を椅子坐式生活様式に改めるべきであると主張していることが判る。このことは、橋口が起居様式を改めることを住宅の改良の方法として最も重要視していたことを示すものであり、かつ、橋口の理想的住宅像が、単にモノとしての西洋館ではなく、椅子坐式生活様式のための西洋館であったことを示すものであったと考えられる。

B いわゆる「和洋折衷住宅」について  
次に、椅子坐式に関連する主張として、当時普及しつつあった部分的に椅子坐式である住宅(本稿では「和洋折衷住宅」と称することにする)に対する橋口の評価について見て行く。大正五年六月号の『婦人之友』

では「この頃の住宅及び今後の住宅」と題し、

男子の服装が洋服となったため、今日では次第に実用的となり、便利上西洋間が要求されるようになって居ります。……………

日本家屋の一部に西洋間を取り、日本風と西洋風と双方用ふるのは、家具方端が二重になつて、甚だ贅沢でもありますし、到底今日の儘で済む訳のものではありませんが、畳の上に育つた習慣上、及び祖先以来養はれて来た趣味の上から、急に改造することも出来ません。今日の所は恰もその過渡の時代で、当分はその不便と不利益を忍ばなければなりません。

と述べている。ここでは二重生活のため不便・不経済としつつも習慣上・趣味上から当分の間は「過渡期」の生活として仕方がないとしている。このような認識は大正九年でも見られる。

私の理想は全然洋式に則れ……予は理想論から一步を譲つて實際論を主張すべく、即ち現代の社会制度・社会組織と思想問題とを考察して、一時の間に合わせてはあり、对症的論策で根本的のものではないが和洋折衷式を是認せざるを得ない注脚。

ここにおいても橋口は、理想は完全な椅子坐式住宅であるものの、現実的見地から、理想像実現までの過渡期の産物として「和洋折衷住宅」を認めざるを得ないと考えていたことが判る。

一方、大正一一年一月号「桜ヶ丘住宅博覧会を観て」では、「和洋折衷住宅」に対する評価が否定的なものに変化している。これは橋口が社長を努めていた「あめりか屋」が博覧会に出品した作品に対して述べたものであるが、

依頼者の要求を充すため……所謂二重生活の欲求を充たしたものであつたが、それは決して自分達の主義ではなく、商売擁護のためにしたもの……この畳と腰掛

と二様のものが一戸の中に混設されているといふ事は、何かにつて非常に不便と不経済

とし、二重生活について従来同様に不便・不経済で、あくまでも商売擁護の産物であつて理想的なものではないと主張していることが窺われる。この記事は、東京で開催された東京平和記念博覧会の時の文化村と大阪で開催された住宅改造博覧会の印象記として記されたもので、出品作品について「殆ど総てが和洋折衷」と述べている。このため、「和洋折衷住宅」に対する否定的評価を述べた理由は、推測の域を出ないが、理想的な住宅の实物展示を目指して開かれた博覧会にも拘らず、展示された住宅の大半が「過渡期」の産物ばかりで、橋口が理想と考えていた完全な椅子坐式生活様式の住宅がほとんど見られないことから、「和洋折衷住宅」は不完全なものであることを再認識させようとしたためと考えられる。この「和洋折衷住宅」に対する否定的な評価は大正一四年一月号「住宅改良会由来記」でもみられ、床坐式と椅子坐式の混合は「改善にあらざりて却つて改悪」とまで述べている。

このように、橋口は理想とする椅子坐式住宅の普及の過程として「和洋折衷住宅」の存在を認めつつも、大正一一年以降では否定的な見解に変化している。この理由は、「和洋折衷住宅」が普及しあたかも理想的住宅と考えられる傾向が見られはじめたからであつたと推察される。すなわち、一部に椅子坐式が採用された住宅から、次の段階である完全な椅子坐式住宅への進展を一刻も早く促すためであつたと考えられるのであり、それゆえ、橋口は完全な椅子坐式住宅を理想としていたと解されるのである。

以上、「あめりか屋」並びに設立者橋口信助について述べてきた。橋口は経済性・衛生上・健康上・能率

性という観点から、理想とする住宅はあくまでも完全な椅子坐式の住宅と考えていた。そしてまた、この起居様式を変えることで、全ての生活様式の変化が促されると考えていたのであつた。このような住宅観のもとに橋口は「あめりか屋」の事業を開始していたのである。しかし、現実の住宅建設においては後述するよう完全な椅子坐式ではなく床坐式の導入……「和風化」……が要求されることになる。そのため、次に、「あめりか屋」が現実のなかで実践してきたプロセスを具体的な住宅を扱いながら見てみたい。

### ③「あめりか屋」の作品からみた〈椅子坐式生活様式〉の導入過程

#### (1) 開設当時の住宅

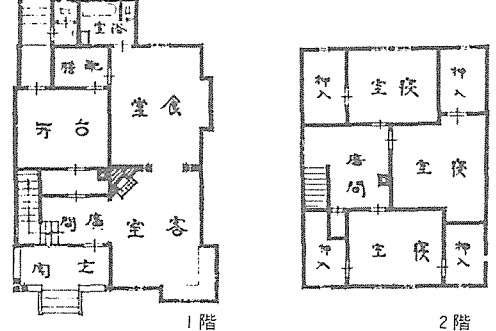
##### A 「組立住宅」について

橋口が持ち帰つて建てた最初の住宅と考えられるものの一つが、明治四三年一二月号の『建築雑誌』(No. 888)に「純米国式木造住宅建築東京に建築せらる」として紹介されている。これによると、この建物は外人向けの貸家として建てられたもので、「木材の大きさは総三寸角二ツ割及背六寸巾一寸五分の松材板割、四分区の他何物をも使用せざりし」とあることから、アメリカで開発された枠組み壁工法による住宅と考えられる。また、屋根は切妻を交差させたスレート葺き、外壁は一階部分がイギリス下見板一部シングル板張り仕上げ、二階部分が漆喰粗面仕上げであり、階高により仕様が異なつた建物である(写真一)。また、平面を見に行くと、一階は基本的には矩形を四分割したもので、吹き放しのポーチから直接階段のあるホールがあり、客間・食堂と続いている。この客間には出窓と暖炉が

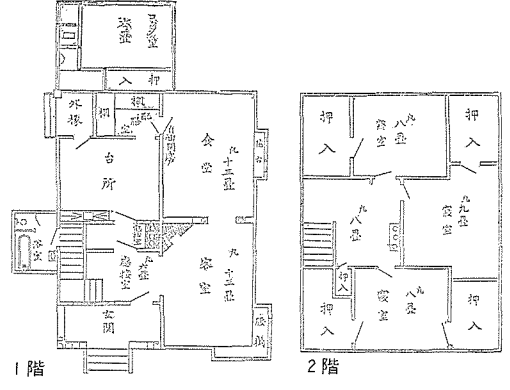


写真一 藤倉五一所有外人向け貸家1号館

図一 藤倉五一所有外人向け貸家1号館



図一 日本向きに改良された「組立住宅」



あり食堂と連続している。また、ホールの後方に位置する台所には配膳室が付いている。二階は三室の独立した寝室がある。このように、この住宅は一階に公的部分、二階に私的部分が明快に分けて配置されている椅子坐式生活様式によるものである。ただ、一般的にはアメリカ住宅においては寝室のある二階に便所と浴室が設けられるが、この住宅では一階の食堂に隣接してある(図一②)注。これらの建物がどのような名称で呼ばれていたかは判らないが、「あめりか屋」に残されている史料には「パンガロー」様式の「アメリカノ出来合ノ家」・「建売ノストックハウス」そして「組立ノ家」などと記されている注。このため、構造形式からみても当時アメリカで売られていた「組立住宅」(以下本稿ではこう称する)であったことは明らかと考えられる注。



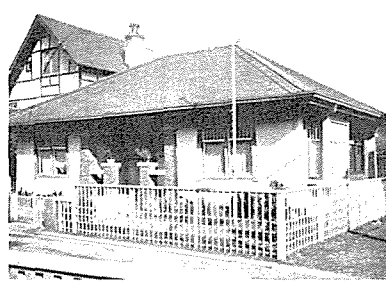
写真一② 藤倉五一所有外人向け貸家2号館



写真一③ 同3号館



写真一④ 同4号館



写真一⑤ 同5号館

の外人向け貸家は、住人が外人であったため輸入されたそのまま建設されたようである。一方、日本人向けとして建設された住宅は「多少日本向きに改良を加へて」建てられている(図一③)注。具体的には①コック室(女中室)の付加、②浴室・便所の移動、③寝室

への畳の導入、である。このうち、③については日本人の生活には多少畳敷のところが必要で「寝床の都合のためには寧ろ畳にした方が便利」とし、かつベッドがいらないから其分安くなるとその理由を述べている。また、平面図を手掛かりとして見ていくと、これらの寝室はそれぞれ独立し、建具も内開きの扉が使用されていることなどから、本来の洋室に単に床の仕上げ材として畳を敷いただけのものであったと考えられる。一方、①・②の理由については橋口は本文中に記していない。しかし、これと同じ建物で外人向け貸家として建てられた住宅の平面図(図一②)を見ると、コック室は無くその位置に浴室と便所がある注。このため浴室と便所は位置を移動していることが判る。おそらく、コック室(女中室)は当時の中流住宅には欠かせないものであったから、新たに付加したものと考えられるし、また、浴室と便所の位置については、二階の寝室から遠すぎて不便なため階段の近くに移動したものと考えられる。

このように、橋口が持ち帰った「組立住宅」は、日



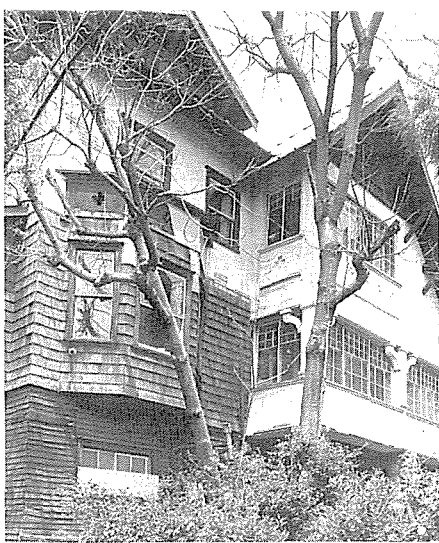
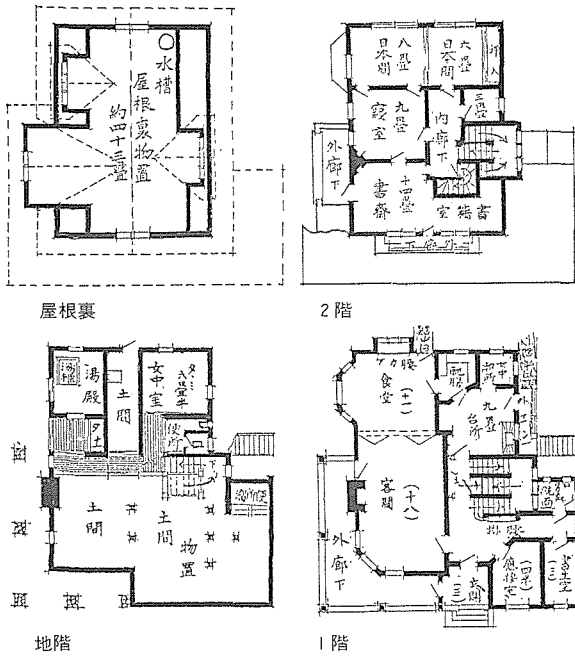


写真16 最初期の注文住宅 旧望月邸外観

図-4 最初期の注文住宅——旧望月邸



本人の住まいとして建てられた際に部分的に「和風化」されていた。特に起居様式においては、「食堂」「客室」という家族の公的部分は椅子坐式がそのまま採用されているが、「寝室」という私的部分には床坐式が導入されている。ただ、この「寝室」は床坐式の場合は単に畳だけが導入されただけで、部屋の独立性を保つという平面構成は変化していなかったようである。

B 最初期の注文住宅とその起居様式

「あめりか屋」では「組立住宅」の販売以外に注文住宅の設計・施工も行なっている。この注文住宅の最初の例が明治四四年一月号の『婦人之友』で紹介されている<sup>注10</sup>。この建物は木造地下一階地上二階屋根裏付の大きな住宅で、明治期の邸宅建築の定石通り日本館を併設していた<sup>注11</sup>。様式はクイーン・アン・リバイバルで、地階は長押挽下見板、1階の出窓部分はシ

ングル、2階はスタッコそして屋根裏の妻部分は再びシングルが用いられ、各層により外壁の仕上げが異なっているのは「組立住宅」と共通している(写真16)。起居様式から見ていくと、基本的には椅子坐式生活様式の住宅であるが、畳敷の部屋として「日本間」及び「女中室」が見られる(図-4)<sup>注12</sup>。この「日本間」については橋口は「事実上客間に応用せられ、六畳と八畳は畳を敷いて、成るべく日本風に造つておきました」と記しており、客間として用意されたものと考えられる。椅子式の「客間」もあるが、おそらく余裕から「日本風」の客間を設けたのであろう。中廊下型住宅様式において椅子坐式が接客部分としてのみ取り入れられているのに対し、この住宅では床坐式が同じく接客部分としてのみ取り入れられている点は注目される。また、この「日本間」は「成るべく日本風」としたとあ

るように、窓形式は上げ下げ窓で位置も他の椅子坐式の部屋と変わらず高い、など本格的なものとはいえないものの、襖で仕切られた続き間で、壁は部屋の四隅の柱が外に見えることにより一見真壁風、のように伝統的形式に近いものへと手が加えられている。このようにこの「日本間」は先の「組立住宅」の「寝室」の場合より「日本風」であったのである。しかしながら、その造り方はあくまでも「組立住宅」と同様に西洋館に手を加えての「和風化」であったと考えることができよう。なお、「女中室」を畳敷とするのは当時一般的であったようで、家族の生活部分が全て椅子坐式であるいわゆる本格的西洋館であっても「女中室」などの使用人の生活部分は伝統的な床坐式であり、「あめりか屋」の作品においても「女中室」が椅子坐式であるものは極めて少なく、大正一年の東京平和記念博覧会の文化村の出品作に初めて確認されるにすぎない<sup>注13</sup>。

ところで、さきの「組立住宅」も同様であるがこの住宅の場合も「玄関」という名称は平面図の中に確認されるが、その記されている場合は共に屋根はあるものの閉ざされた場ではなく、いわゆる玄関ポーチ部分である。このため、土間を室内側に持つ伝統的玄関と比べると靴を履いたり脱いだりするための場とはいえず、下足のまま家の中に入れるかのように設計されている。しかし、当初から畳敷の部屋があり、橋口も一階ホールについて「接待室には、靴を履いたり又は立話してお客様を掛けさせるため、階子の手摺を利用して腰掛を取付けました」と述べていることから、ホールで靴を脱いだり履いたりしたものと考えられる。このことから、伝統的な玄関は設けられてはいなかったものの下足を行なうという生活様式は踏襲されていたと考えられる。

表一 『住宅』掲載の「あめりか屋」の作品数と椅子坐式の定着率

項目	棟		食事の場		団らん		夫婦就寝		子供就寝		応接室		客間		
	数	床	椅子	床	椅子	床	椅子	床	椅子	床	椅子	有	無	有	無
大正5年	3	0	1	2	1	0	2	2	2	1	3	0	0	0	3
6年	7	2	3	3	1	3	2	3	1	7	0	4	3		
7年	5	1	1	2	1	0	2	0	1	5	0	3	2		
8年	5	1	4	1	0	2	3	0	1	5	0	3	2		
9年	7	5	2	5	0	2	3	3	2	4	3	5	2		
10年	5	1	2	1	2	2	2	1	1	4	1	2	3		
11年	15	1	11	2	9	4	10	2	8	9	6	2	13		
12年	7	1	5	2	4	3	3	2	3	3	4	2	5		
13年	20	8	11	5	10	5	11	7	11	13	7	7	13		
14年	13	1	10	2	9	2	6	2	4	5	8	4	9		
15年	6	2	3	2	2	0	4	1	0	4	2	3	3		
昭和2年	6	2	3	2	1	1	3	2	3	4	2	3	3		
3年	8	5	5	2	4	2	2	4	3	4	4	3	5		
4年	9	5	4	1	3	4	1	3	2	5	4	6	3		
5年	11	3	4	5	2	2	3	2	3	8	3	6	5		
6年	14	3	9	10	3	1	5	3	5	4	10	8	6		
7年	20	9	9	12	4	4	6	5	11	16	4	14	6		
8年	23	11	9	11	7	1	3	3	9	12	11	11	12		
9年	22	10	7	9	9	5	6	5	8	13	9	17	5		
10年	16	7	7	9	6	4	3	5	7	8	8	11	5		
11年	26	14	10	15	5	4	4	3	10	24	2	19	7		
12年	24	7	11	10	10	2	12	5	9	15	9	12	12		
13年	13	6	5	5	3	1	4	1	4	7	6	6	7		
14年	11	7	3	6	2	1	1	2	2	8	3	10	1		
15年	11	7	2	7	1	0	1	5	1	8	3	9	2		
16年	9	5	2	5	1	1	2	1	2	6	3	2	7		
17年	9	2	0	1	0	0	0	0	1	2	3	1	4		
18年	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1		
小計	322	126	143	137	100	56	104	72	113	206	116	173	149		
椅子坐式の定着率		44%		31%		32%		35%		64%		54%			

(なお、( )内の数字は、起居様式の折衷されているものを示している。)

(2) 「あめりか屋」による独立専用住宅の起居様式について

A 家族生活部分に見る椅子坐式の普及について

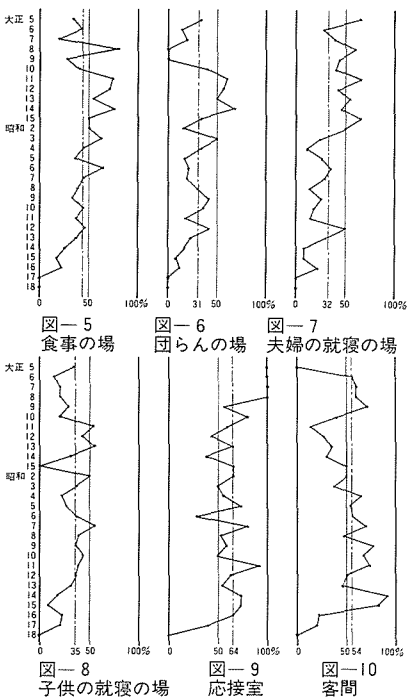
『住宅』に掲載されている「あめりか屋」の設計・

施工の住宅を対象に、各住宅を構成している部屋を単位として食事の場・団らんの場・就寝の場の起居様式を見て行くことにより、家族生活への椅子坐式生活様式の浸透性を見てみたい。大正五年から昭和一八年までに『住宅』に掲載された独立住宅で今回分析対象としたものは三三二棟であり、各年次毎の棟数を示したのが表一である。起居様式を判断するにあたり、ここでは床の仕様に注目し、畳の部屋は床坐式の起居様式として計画されたもの、板敷などの畳敷以外のものは椅子坐式として計画されたものと判断した。また、分析の対象とした部屋は平面図に記入されている名称をもとに、食事の場として「茶の間」・「食堂」と記された部屋を、以下同様にして団らんの場として「居間」、就寝の場として「寝室」・「夫婦寝室」・「子供室」をそれぞれ対応させている。また、接客の場については

椅子坐式の場と床坐式の場の両方を備えている例が多いため、椅子坐式の「応接間」を備えているかどうか、同様に床坐式の「客間(座敷)」を備えているかどうかを見ていく。

さて、このようにして各年度毎の住宅における各々の部屋の椅子坐式と床坐式の状況を示したのが先の表一である。やや乱暴な見方であるが、椅子坐式の棟数と各年度の住宅総数とを比較することによって椅子坐式の定着率を見ることにする。さて、食事の場・団らんの場・就寝の場における椅子坐式の定着率をグラフ化したのが図一5・6・7である。また、接客の場については椅子坐式の「応接室」・床坐式の「客間(座敷)」が設けられている割合をグラフ化したのが図一9・10である。これによると、食事の場における椅子坐式の平均定着率は四四%と過半数に近い値を示している。特に大正一一年から昭和三年にかけては五〇%を越えており注目される。一方、団らんの場の平均定着率は三三%と他と比べ最も低い。通時的に見ていくと、大正一一年から同一四年にかけては五〇%を

図5~10 椅子坐式の定着率



越えているものの、それ以降定着率は減少している。夫婦の就寝の場の平均定着率も団らんの場同様に三三%と低く、昭和二年を境としてそれまでが五〇%前後の定着率を示していたのに対し二〇%前後へと低下している。また、子供の就寝の場についても、平均定着率は三五%で夫婦の就寝の場の場合とほぼ同様の割合を示している。ただ、通時的に見ていくと夫婦の就寝の場の場合が昭和初期に急激に定着率が低下するのに対し、子供の就寝の場は昭和二二年まで四〇%前後の高い定着率を見ることができ、この点は注目すべき傾向といえよう。また、接客の場については、「応接室」の平均定着率は六四%と高い。通時的に見てみると大正九年以降徐々に定着率が低下し大正一二年には五〇%を切っている。その後の昭和七年以降再び定着率は高くなり、昭和一四・一五年には九〇%を越えている。また、「客間」の平均定着率は五四%で、大正九年以降定着率が低下し同一一年には一三%まで下がるが再び持ち直し昭和三年以降は六〇%前後の値となっている。椅子坐式と床坐式という異なった起居様式にも拘

図-11 藤倉五一郎——大正5年8月号

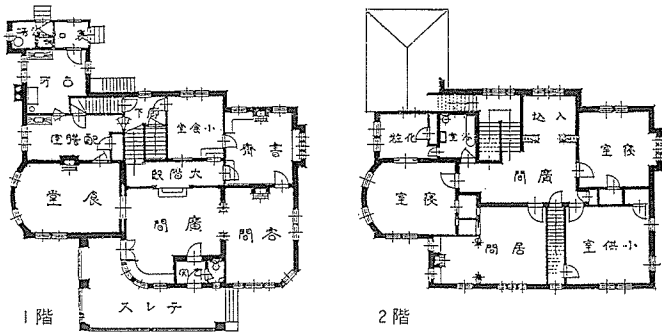


図-12 徳川誠郎——大正11年7月号

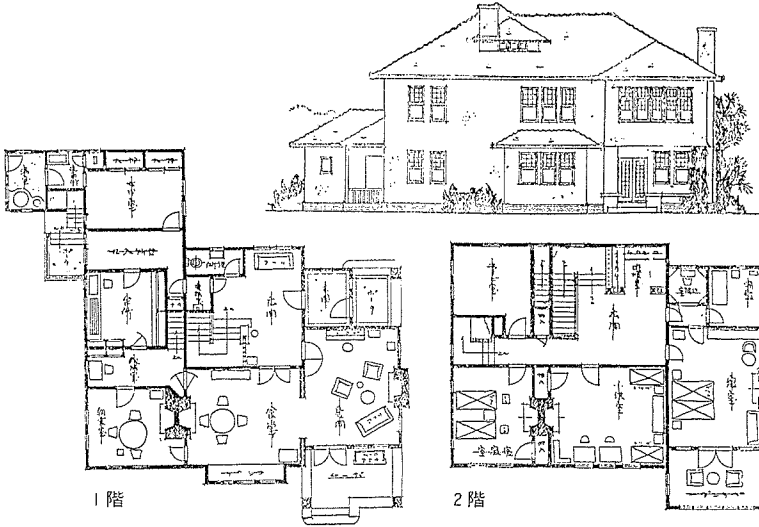
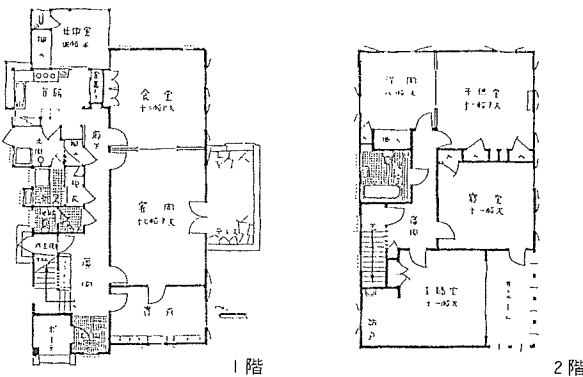


図-13 町田邸——昭和12年2月号



らず定着率の動きは良く似ており注目したい。すなわち、共に大正九年以降定着率が低下しているのは、当時住宅改良運動の中で強く主張されていた接客本位から家族本位へというスローガンの影響を受けて、接客の場である「応接室」や「客間」を設けることが疑問視されていたことによる反映と考えられるのである。そしてまた、この時期に食事の場・団らんの間・子供の就寝の場という家族の生活の場においてとりわけ椅子坐式の定着率が高いのも、そのスローガンの何らかの影響を受けてのこととも考えられよう。

とここで、「和風化」という見方をすると、最も「和風化」されたのが椅子坐式の定着率の低い団らんの場であり、夫婦の就寝の場となる。このことは団らんの場や夫婦の就寝の場が最も伝統の影響を強く受けて、変化し難い場であったことを意味すると考えられる。ちなみに、このように「和風化」の度合が各部屋の機能により異なる背景を、昭和十二年四月号の『住宅』誌上で行なわれた「坐式と椅子坐式生活について」という座談会における意見の中からみてみると、子供の場については「身体が発育から当然椅子式にすべき」とか「次の時代の人達の為には、勿論椅子式にすべき」という意見がみられ、将来性や身体への影響から椅子坐式を積極的に取り入れようとしていることが判る。また、食事の場については床坐式を主張する意見もある

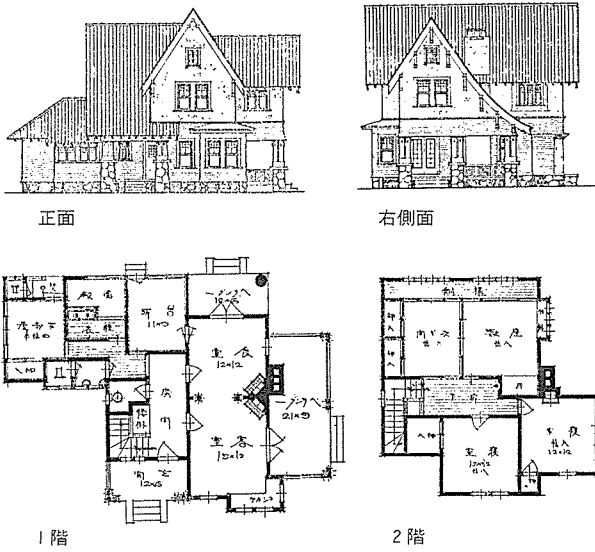
るが、「食事は毎日のことで一つの仕事のような気がするので早く片付けたいので腰掛けをした方がいい」というように、家事を担当する主婦の立場から働く場として機能的な椅子坐式の方が良いとする意見が述べられている。これに対し、就寝の場については「寝室のベッドは夏は暑くてやりきれません」とか「ベッドは二つも並べると場所もとるし、ベッドの下は掃除もしにくい、それに万年床みたいになっていやです」というように、具体的な経験からベッドを用いる就寝形式に反対する意見が述べられている。また、団らんの場については具体的ではないが「裏廻りの方は畳の方がいい」というように明快な理由は述べられていないものの床坐式を主張していることが窺える。

なお、従来の研究によれば戦前期の起居様式については、応接の場と子供の場だけが椅子坐式化したといわれている注<sup>1)</sup>。ちなみに、「あめりか屋」の作品では子供の就寝の場以上に食事の場の方が椅子坐式の定着率が高い。このため、食事の場における椅子坐式の定着率の高さは、「あめりか屋」の住宅の一つの特徴と言えるかもしれない。

B 室名(機能)から見た  
〈和風化〉のパターンについて

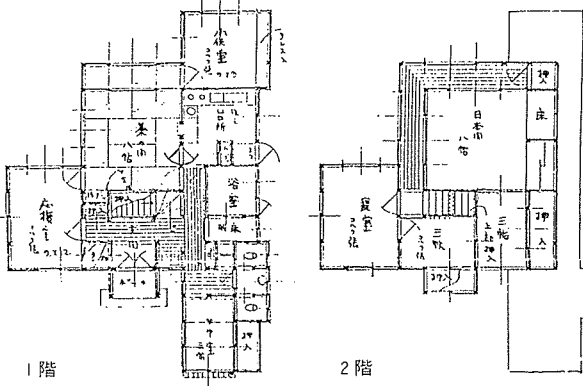
「あめりか屋」の作品は、前述したように、当初から

図-14 某邸——大正5年12月号



橋口が理想と考えていた完全な椅子坐式による住宅だけを建設できた訳ではなく、大半の場合には伝統的起居様式である床坐式を導入……(和風化)……せざるを得なかったのである。具体的に住宅を見てみると、大正五年から昭和一八年までの「住宅」に掲載された住宅の中には、完全な椅子坐式による住宅も見られるがその棟数は少ない。この点は先の伝統的な床坐式の「客間」が設けられている割合が五四% (図-10)と過半数を越えていることから十分窺われるであろう。さて、完全な椅子坐式の住宅の例として、『住宅』の創刊号に紹介されている藤倉邸(図-11)、大正一一年七月号の徳川邸(図-12)などがあるが、昭和期に入ると昭和一二年二月号の町田邸(図-13)など極めて少ない。藤倉邸は地下付き二階建て住宅で、一階に公的部分、二階に私的部分が配され、また、二階の浴室には

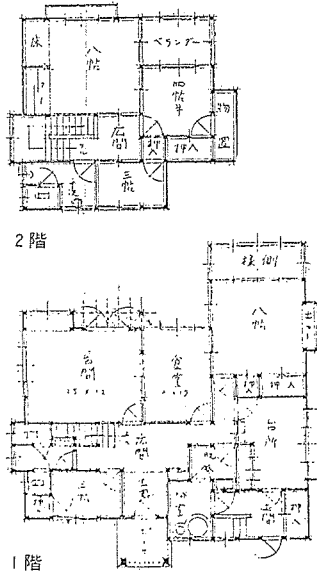
図-15 岩下邸——大正13年8月号



浴槽と共に洋便器もあるなど典型的アメリカ住宅といえよう。なお、徳川邸・町田邸については一階に公的部分・二階に私的部分という平面構成とともに椅子坐式が採用されているものの、使用人の場である女中室は床坐式となっている。厳密な言い方をすれば、家族の場以外の使用人の場には「和風化」という現象が見られるとも言えよう。

ところで、ここで取り挙げた三例の住宅の施主のうち、藤倉と徳川はともにアメリカへ遊学の経験がある。そのような海外での生活経験などがなければ、現実的に考えてみてもそれまでの伝統的床坐式生活に慣れ親しんできた人びとにとって完全な椅子坐式による住宅は住みきれなかったと考えられる。このため、家族の生活の場だけでも椅子坐式として計画されたものは少なく、大半の住宅はいろいろな部屋に床坐式が導入

図-16 高橋邸——大正14年7月号



されたのである。この床坐式の導入の基本的なパターンは住宅のゾーニング的視点から大まかに述べると

- ①接客部として導入
- ②家族の生活部のうち公的部分に導入
- ③家族の生活部のうち私的部分に導入

という三つがあり、他はこの三つのパターンの組合せとして捉えられると考える。例えば、①の典型例として大正五年一二月号の某邸(図-14)がある。これは椅子坐式の住宅の二階に床坐式の「座敷・次の間」を導入したものと考えられる。②の例としては大正一三年八月号の岩下邸(図-15)がある。これは、二階に実質的には客間と考えられる「日本間」があるため②の典型例というより①と②の組合せの例といった方がよいが、食事の場として床坐式の「茶の間」が採用されているのに対し、「日本間」を除く他の部屋は全てコルク敷であるため椅子坐式の部屋と考えることができる。また、③の典型例としては大正一四年七月号の高橋邸(図-16)がある。これは「居間」と「食堂」が椅子坐式である。他は室名が無いものの全て畳式であるため床坐式と考えられる。このため、主に就寝という家族の私生活の場は床坐式と見ることができるのである。

このように、「あめりか屋」の住宅は椅子坐式と床坐式の混合したいわゆる「和洋折衷住宅」だったのである。それらは、起居様式から見ると①・②・③の基本パターンを基にして造られたと考えられるが、①・②・③という基本パターンだけによる住宅というよりも、①と②の組合せや①と③の組合せというように、いろいろな組合せによるものがはるかに多く建設されていた。

### (3) 起居様式と意匠との関係について

これまで床坐式の場合として畳敷の部屋について機能との関係から見てきたが、実際に西洋館に導入される際には、その部屋をどのような意匠にするかは重要な問題であったと考えられる。それは単に床坐式の部屋ばかりではなく椅子坐式の部屋の意匠にも関連するものであった。このため次に「あめりか屋」の住宅の畳敷の導入の過程を意匠との関係から見て行くことにする。既に紹介したように「あめりか屋」店主橋口は、完全な椅子坐式の住宅を理想としていたため、西洋館への畳の導入は住宅改良の必要性を説くに当たっても二重生活を助長することを意味し、意に添うものではなかった。しかし、住宅の設計・施工という事業の繁栄の為に、施主の意向を充分受け入れなければならなかったようである。そのような状況の中で、橋口は床坐式の場合として畳の導入を行なうという妥協をしつつも、あくまでも理想は完全な椅子坐式の住宅であると言うことを表現している住宅形式を考案することになる。すなわち、大正七年に橋口は自ら考案した和洋折衷による住宅形式について述べている。少し長いが引用する。

過渡期に於ける住宅建築の一様式として、当分和洋折

衷に依るの外ないと思ふのであるが、此の和洋折衷に就いては自分の経営する「あめりか屋」に於て可成り長い間研究もし実地にも応用して来て、非常に好結果を得ている方法があるのである。

それは、家屋の保存上から云つて西洋館の方が日本家屋よりも遙かに持久力に富んでいる事は勿論であるから、外部は全然西洋式に則り、内部の各室は其の使用上の目的に応じて或は西洋室とし或は日本室とする。そして其の日本室も、予め窓の高さや、障子襖の内法の方法などに西洋室に準じて設計し何時でも畳さへ上げれば西洋室に使用することが出来るやうにするのである。かうして置けば……ほんの小部分の設備だけで立派に全屋を西洋館として使用する事が出来、非常に便利である。自分はこの方法を「あめりか屋」に於て既に百

余も実現して居る<sup>注9)</sup>。

その方法とは、外部は「西洋式」で、内部は部屋を單位として必要に応じて「西洋室」と「日本室」のいずれかとするというものである。そして、特に注目したのは「日本室」の扱いである。すなわち「日本室」の窓の高さや障子などの建具の寸法は予め「西洋室」と同じくしておくことにより、後の「西洋室」への改造をより簡単にできるようにしておくというものである。これは明治期に提案された単に玄關脇に西洋室を付加させた住宅などとは明らかに異なり、純西洋館をベースとしその良さを生かそうとする意図をもつて和洋の折衷を試みたものといえるのである。このことから既に紹介した「組立住宅」や初期の注文住宅はまさにこの方法を確立する前段階のものといえよう。さて、この方法により造られた住宅は、外観も純西洋館とちがわず、かつ、床坐式の部屋が不要になった場合には簡単な改造により内部も純西洋館へと変貌できるという可能性を秘めていたのであった。先の〈図1

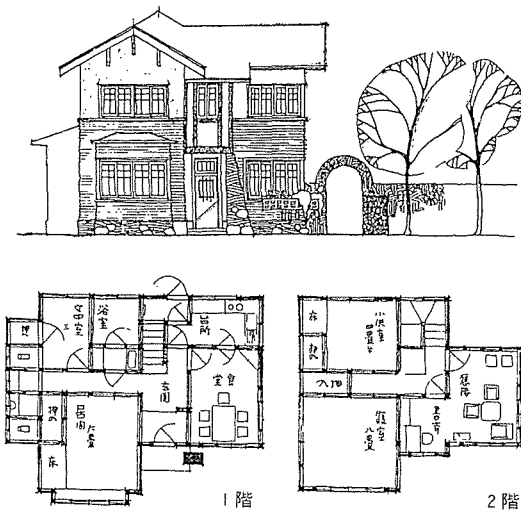
14〉をもとに具体的に見てみる。この住宅は一階には椅子坐式の「食堂」と「客間」があり、ともに暖炉が設けられ、壁は大壁、窓形式は上げ下げ窓である。二階は二つの「寢室」と「座敷・次の間」があり、「寢室」は互いに独立し、やはり椅子坐式で壁は大壁、窓形式は上げ下げ窓であり本格的な「西洋室」といえるよう。一方、「座敷・次の間」には床の間が付き、縁側もある。建具は引き違いでおそらく障子と考えられる。また、壁は日本の伝統的な柱の見える真壁である。しかしながら、「座敷」には開き窓の出窓が付き、また、「縁側」は床までのはき出し窓ではなく開き窓が用いられている。このように、この「座敷・次の間」は間切りの建具や壁は伝統的なものであるにもかかわらず、窓のように外観に表れる部分については純西洋館に準じていることが判る。

さて、以上のことを起居様式と意匠の関係として捉えると、床坐式の場合として取り入れられた「座敷・次の間」は、単に畳を導入しただけではなく、その意匠は、いわゆる伝統的和室と比べると一部に開き窓が設けられていたことから判るように完全なものではなかったものの、壁も真壁とするなど意匠面においても伝統的意匠を積極的に導入していることが判る。そして、椅子坐式の部屋も本格的な「西洋室」であることから、椅子坐式の部屋と大壁意匠、床坐式の部屋と真壁意匠というように起居形式と基本的な意匠とがそれぞれその組型である西洋館と在来の和風住宅に対応するものであったのである。

一方、大正一一年になると「あめりか屋」では、新たな和洋折衷による住宅形式を考案している。この住宅形式は当時「あめりか屋式住宅」とも称されたもので、その特徴は住宅内部の壁が全て真壁であり、窓も



図一17 「あめりか屋式住宅」の例



引き違い窓でできていることである(図一17)。これは、先の和洋折衷の方法と比べると、伝統的工法や経済性を重視したものであった。すなわち、起居様式と建物の構造とは本来無関係であるとして、椅子坐式を普及させるには安価な椅子坐式の住宅を提供すべきであり、そのためには外壁は防犯性や耐火性などから優れている大壁を用い、他は安価な伝統工法である真壁にすべきという考えから考案されたものだったのである。さて、この住宅形式の特徴を起居様式と意匠の關係から見ていくと、椅子坐式の部屋は真壁で窓も引き違い窓となつていることから、壁と窓の形式から見る限り本格的な「西洋室」とはいえず、むしろ床坐式の部屋の意匠をそのまま椅子坐式の部屋に取り入れたもの……「真壁造りの洋室」と呼ぶ……といえよう。そしてこのことは、先の住宅で見られた椅子坐式の部屋と大壁意匠、床坐式の部屋と真壁意匠という、それぞれの対応關係がくずれた住宅形式であつたといふことができるのである。

表一2 「和風住宅」と「洋風住宅」について

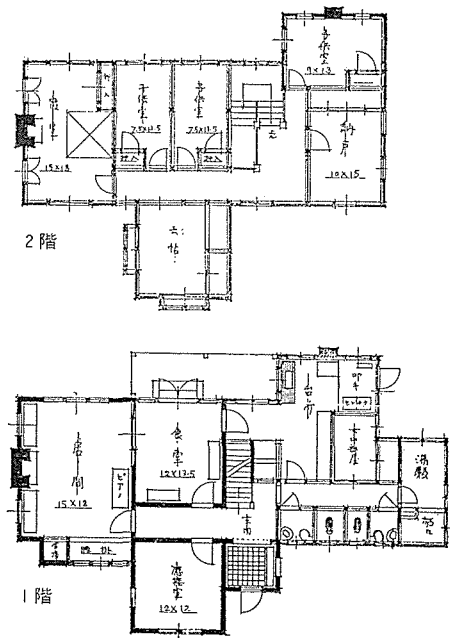
項目	「和風住宅」	「洋風住宅」
生活様式	坐式生活	腰掛式生活
壁	真壁	大壁
屋根	緩勾配瓦葺 (草葺は瓦葺より急勾配)	急勾配多種 (鉄筋混泥土造の場合 は水平に近い緩勾配)
床	畳敷	板張
天井	棹縁天井	漆喰天井・平板張天井
庇	有	無
窓	引違い窓	上げ下げ窓・開き窓

(藤井厚二「日本の住宅」より)

ところで、当時の人びとの伝統的住宅と西洋館に対する認識を藤井厚二の『日本の住宅』から見てみると「表一2」のようになる。これによると「和風住宅」は坐式生活で壁は真壁、窓形式は引き違い窓と、また、「洋風住宅」は腰掛け式生活で壁は大壁、窓形式は上げ下げ窓・開き窓と理解されてきたことが判る。「和風住宅」は伝統的住宅、「洋風住宅」は西洋館にそれぞれ対応すると考えられるため、一般には椅子坐式と大壁意匠、床坐式と真壁意匠は一对として対応するものと理解されていたといえよう。このことから、「あめりか屋式住宅」が如何に当時の認識と異なつたものであつたかを窺うことができる。

さて、この「あめりか屋式住宅」は、実用的ということでも一時期ではやされることになる。しかし、その後の「あめりか屋」の住宅を見ていくと、この「あめりか屋式住宅」は昭和期にはいと徐々に少なくなる。それに対し、起居様式と意匠が対応するもの、つまり、椅子坐式の部屋は大壁意匠、床坐式の部屋は真壁意匠としてあくまでも部屋を単位として造られたものは依然と多数建設され続けられたのであつた。

図一18 石川邸——大正11年7月号



なお、この「真壁造の洋室」は全て真壁の住宅以外にも採用されることになる。このような例の最初のもので「住宅」大正十一年七月号に紹介された石川邸がある(図一18)。すなわち、椅子坐式の部屋に注目すると、一階の「食堂」「居間」「応接室」は大壁意匠で窓形式も上げ下げ窓であるのに対し、二階の「寝室」「子供室」は真壁意匠で引き違い窓(一室は真壁意匠で上げ下げ窓)である。これは同じ椅子坐式の部屋でも接客の場や家族の公的場と寝室のような個室では意匠の扱いが異なっていることを示すものであり、部屋の機能に応じて意匠を使い分けていたことが判る。このような意匠を使い分けている住宅を見ていくと、特に、応接室だけが真壁意匠で上げ下げ窓や暖炉が設けられるという例が多い。そして、この意匠の使い分けは畳敷の部屋でも見られ、真壁意匠ながらも客間だけに床の間や縁側が設けられる例が多い。この現象は接客の場を最も重視しようとする意識の端的な表れであつたと考えられる。

以上、極めて大まかではあるが、起居様式と意匠の關係を見ると、西洋館への畳敷の導入においては単に

畳を取り入れるのではなく意匠も伝統的なものを取り入れようとしていたと考えられる。一方、より一般への椅子坐式の普及を目指す中で経済性を考慮して考案された「真壁造りの洋室」は、あまり受け入れられなかったようである。このことは、あくまでも椅子坐式は大壁意匠（「洋室」）、床坐式は真壁意匠（「和室」という伝統的な起居様式と意匠の対応関係を守りつつ住宅が建てられていたことを示すものと考えられる。

#### ④結びにかえて……「あめりか屋」の住宅にみる椅子坐式生活様式の導入の特徴について

繰り返して述べてきたように西洋館の（和風化）の動きとして「あめりか屋」の住宅の動向を見てきた。この「あめりか屋」による西洋館の導入（直写）は、当初、伝統的生活と欧米的生活が混在することによる煩わしさ・不経済性などを解消することを目的に実践されたが、その後の展開は、とりもなおさず伝統的な生活と欧米からの生活を、どの様に取捨選択し一体化するかという和洋折衷化の動きを意味していたのである。そしてそのような中で、「あめりか屋」が最終的に造り上げた住宅は、「洋風」の外観の中に椅子坐式の部屋は大壁意匠、床坐式の部屋は真壁意匠というように、意匠も含めた部屋を単位とした「洋室」と「和室」を混在させたものであった。この、部屋を単位として起居様式が考えられていたことは、「あめりか屋」の住宅で一室の中に椅子坐式と床坐式の両方が並存するという部屋が殆どみられないことから窺うことができる<sup>注30</sup>。このように、「あめりか屋」の住宅を見る限り、生活様式の導入は、単に起居様式だけが導入されたのではなく、意匠や生活といういわゆる（文化）をも含めたものとして取り入れられようとしていたように推察できる。

また、具体的に「洋室」として取り入れられていた割合が高いのは部屋の機能から見ると「応接室」であり、家族の生活の場としては順に食事の場・子供の就寝の場・夫婦の就寝の場・団らん<sup>注31</sup>の場であった。このことは、外来の生活様式の導入時においては各部屋毎にその機能に応じていろいろな理由から取捨選択がなされていたことを示すものと考えられる。例えば、「応接室」は家族の日常生活の場ではないことや、従来の接客を重視するという伝統的な生活観の中で椅子坐式の場合が重宝がられたため椅子坐式化がスムーズに行なわれたのであろうし、食事の場は働く場である台所の立ち働化と共に機能的な場と考えられていたことにより、他の家族の生活の場と比べ椅子坐式の導入がスムーズに行なわれたのかも知れない。一方、団らんの場は逆に機能的ではなくとも良いと考えられていたのかも知れない。

ところで、このようないわゆる「和洋折衷住宅」が建設されていたことになるが、その中で必然的に行なわれるいわゆる「二重生活」に対する認識を見てみると、大正末から昭和初期にかけてそれまでの否定的見解に対して肯定的な見解も見ることができると、その代表的見解を紹介すると、武田五一は昭和六年にこう述べている。

坐式と椅子坐式はたしかに生活様式の二重様式ではあるが、之が我国民の優れた所であるとも云へば云へなくもない。生活を豊かにするには二重でも三重でも生活するがよい。文化の進んだ国民ほど其生活に種々な様式を取り入れて、其生活様式のニユアンスの中に浸つて楽しんで居るものである<sup>注32</sup>。

また、同様に畳敷の生活に対しても肯定的な見解を述べるものが増えている<sup>注33</sup>。このことから、大正末頃

からは、将来の生活像として椅子坐式と床坐式の生活が混在する二重生活をむしろ当り前とする傾向が強かったとも考えられる。

以上、最初に述べたように本稿は「定着した外来生活様式と定着しなかった生活様式」というテーマに関連する問題として、起居様式に焦点を絞って扱ったものであった。なお、「あめりか屋」の最初の住宅を見ても、この起居様式以外の他の外来生活様式も見られる。すなわち、起居様式と関連するものを見ても、内側に土間のない単なる出入口、腰掛け式の便器や西洋バス、など多岐に及ぶ。詳細な分析を要するが、近年一般家庭に普及している腰掛け式便器は、戦前期は殆ど確認できない。西洋バスも同様に戦前期は確認できない。一方、土間のない出入口は大正初期には伝統的な土間付きの玄関へと変化していることが確認できる。この浴室・便所等は設備の近代化の動きと併せて改めて考察されるべき問題と考える。また、「あめりか屋」の住宅では部屋を単位として起居様式を捉えていたため起居様式そのものの折衷化は殆ど見られなかったが、例えば、便所の形式は今日の腰掛け式が普及する以前に大・小両用便器というものがあつた。また、かつて掘炬燵というものもよく見かけた。これらはともに外来生活様式と在来の生活様式の折衷化により考案されたとも考えられる。このような生活様式の折衷化の問題も外来の生活文化、伝統的な生活文化の継承の問題として明らかにして行かねばならないであろう。ただ、この折衷化の問題は、どちらかといえば（西洋館の和風化）というよりは、床坐式による伝統的住宅を基にした改良の中で生み出された傾向にあつたと考えている。

（うちだ・せいぞう／東京工業大学工学部附属工業高校教諭）

# 研究助成15年

(財)住宅総合研究財団 海野 勉 (研究事業担当専務理事)

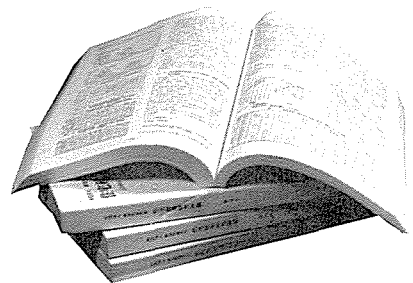
一九八八年という年は、なかなか忙しい年であった。財団の創立四〇周年記念の行事も、一月の法人名称変更(新住宅普及会↓住宅総合研究財団)を以て完了し、また委託助成を中心とした研究事業も、開始以来、ちょうど一五年を迎えたことになる。この時にあたり、研究助成一五年の歩みを振り返って見たい。

## 財団設立から研究事業の開始まで

今を去る四〇年前、故・清水康雄(当時清水建設社長)が、私財の一部を投じてこの財団を設立したときの事業目的は以下のように謳われている。

「本財団法人は住宅建設ノ総合的研究及其成果ノ実践ニ依リ、窮迫セル現下ノ住宅問題ノ解決ニ資スルヲ以テ目的トス」

敗戦の打撃から立ち直りを目指す建設人としての社会的責任感と、父・清水釘吉から受け継いだ研究指向の肌合いが、行間ににじみ出たものであった。しかし打ち続くインフレの波、多くの財団が休眠、そして消滅を余儀なくされたこの時期にあつて、本格的な研究事業の開始まで、財政基盤の整備等更に二〇年余の歳月を要した。こ



の間一九六六年九月、創設者の逝去にともない、二代理事長に就任した吉川清一(清水建設社長)は、一九七二年財団内に住宅建築研究所を設置し、本格的な研究事業を開始した。思えば既に故人となった創設者の二〇数年振りの夢の実現でもあった。

一九七二年、初代研究所長に就任した橋本文夫は、さっそく東京大学に、当時既に住宅研究の第一人者であった鈴木成文助教授(当時)を訪ね、研究事業運営の全面的指導を御依頼した。この出会いが、今日までの財団の研究事業の基礎を確立させたことから考えても、ながく銘記さるべきものとなったわけである。これにより、研究委託及び研究助成を主軸とする事業の方針が決定され、更にその運営の細部にわたって諮問・審議のための「研究運営委員会」が設置され、以下の諸先生の御尽力をいただくことになった。(敬称略)

委員長 鈴木成文(東大)  
委員 青木志郎(東工大)

内田祥哉(東大)

前田尚美(東洋大)

太田利彦(清水建設技術研究所)

(註) その後委員には巽和夫(京大)一九七七、更に一九八六年に退任された青木志郎(日大)のあとをうけて、平井聖(東工大)、尾島俊雄(早大)の諸氏が新任され今日に至っている。

当時の記録によれば、一九七三年には二月から一月まで五回の委員会が開かれ、研究所設立の趣旨から、運営方針、運営方法、研究課題、予算(配分を含む)、期間、発表方法まで、熱心な討議が行なわれた。財団側としては、この委員会の周到、緻密な審議をとおして、高い研究内容の将来への展開について、満腔の信頼と期待の度を高め、初年度の研究委託と助成は順調なスタートを切ることとなった。委員会で提議された課題と研究者のリストから一〇件の課題が選定された。この委員会推薦という形の選考方法がその後数年つづくことになる。

初年度の委託及び助成研究の主旨は、次頁の分類に従って列記すれば、(敬称略)

- 2 | 鈴木成文、2 | 石井昭、2 | 青木志郎+谷口汎邦
  - 3 | 青木正夫、3 | 荒木平一郎、4 | 巽和夫、5 | 田辺健夫、6 | 大河原春雄、8 | 内田祥哉、10 | 勝田高司の
- 一〇名の方々であった。

次ページに、86年研究までの一覧表を示す。

研究所発足の時に、研究運営委員会で定義された、「住宅計画分野を中心に、外からの恩恵をうけにくい地味な、純粹の住居研究に光をあてたい」という方針から見れば、初年度の課題の配分は、満足のできるものであったといえよう。

## 研究の動向

この表に見られるように毎年の研究課題はだいたい同様の配分をもつて経移しているが、内容については、そ

各年次の分野別件数 (●印は海外に関する研究を示す)

研究年次	1. 農漁山村の住居・集落	2. 都市の住居・住居集合	3. 高齢者・身障者住居	4. 住宅問題	5. 住宅の維持管理	6. 住宅地開発・住環境整備	7. 住教育	8. 構法計画・住宅生産	9. 人間工学	10. 環境工学	合計
1973研究		3	2	1	1	1		1		1	10
74 "	1	4	1	1				1	2	1	11
75 "	2	2	1	● 4		2			1	2	14
76 "	1	3	1	1	1	1		● 3		2	13
77 "	3	5		2	1	1		● 2			14
78 "	1	● 8		2			1	1		1	14
79 "	● 3	● 6		2		1	1	2		2	17
1980 "	● 3	6		1	1	3		● 2	1	1	18
81 "	● 1	5	2	● 2	4	1		● ● 3	1		19
82 "	● 4	3	1	● 1	1	● ● 4		● 3	1		18
83 "	3	9	● 1	1		● ● 3		4			21
84 "	● ● 5	4	3	● 5		● 1		3		2	23
85 "	● ● ● 5	● ● 8	2	● 5		● 2		2			24
86研究	● 3	● ● 9	0	1	1	● 3	0	4	1	3	25
合計	35	75	14	29	10	23	2	31	7	15	241

の時点における社会情勢や、学界の傾向等により変動があった。

分類2に属する研究は都市の住居の歴史、住様式・住宅計画、住環境・住居集合等多くの研究課題を含んでいて、自然件数も他を圧している。特に件数の増加した78年研究の主査は(敬称略)都市住宅の歴史二件(稲垣、青柳)、住様式・住宅計画五件(石原、扇田、巽、住田、多胡)、住環境二件(湯川、高橋)の計九件であった。また、86年研究では、都市住宅の歴史三件(前野、青木、小木)、住様式・住宅計画三件(佐々木、竹下、河辺)、住環境・住居集合三件(本間、北浦、上野)の計九件であった。

高齢者・身障者住居では、84年度に至り三件(若野、林、片岡)となり、85年度には二件(吉野、林)となった。高齢者の問題は、初年度の73年の頃より重要項目とされていたが、申請が少なく、また、研究成果が期待できないものもあり、77年より四年間採択されていない。

住宅問題・住宅需給では、85年度五件(巽、広原、住田、三宅、本田)、86年度五件(川上(秀光)、川上(光彦)、広原、住田、本田)と増加している。社会的要請の影響もあつたと思われる。

構法計画・住宅生産では、80年頃までは主として、プレハブ化工法に関わる研究、木造在来工法に関する研究、またヨーロッパ先進国との比較研究等があった。80年頃からは木造在来工法の見直し(内田)、東南アジアの伝統的構法(布野)、また、81年からヨーロッパ木造工法比較(太田(邦夫)二回目)等があった。なお、将来に向けての開発的研究(内田、深尾、藤沢)等も進められている。

海外研究は75年頃から年に一件くらい割で、ヨーロッパの国と我が国との比較を主とした研究があった。80年頃より中国及び東南アジアに関する研究が出て来る。82

年には、ヨーロッパ及び東南アジア、中国等五件を数え、その後は更に台湾、韓国等多彩な海外調査研究及び比較研究が行なわれた。85年研究では日本と外国の比較を扱ったもの三件、英国一件、中国に関するもの三件、計七件を数えた。87年度の当財団のシンポジウムでは、今なぜ、海外住居研究か?をテーマに取り上げ、海外での調査研究、及び共同研究にはさまざまな難しい問題のあることが話し合われた。

一九八〇年夏の委員会、前々から話題となっていた事業拡張の具体案が委員長発議で審議され、テーマを決めてお願いする委託論文と、蓄積された助成研究成果の発表を兼ねたシンポジウムの開催、研究評価の公表等が決定し、81年より実施された。この成果についてはまた別項に譲ることにする。

助成研究の公募へ

一九八五年に至り、故・野口、故・橋本両専務は病のため退任され、大坪昭が専務理事に就任した。色々と新規の企画が進められた。研究助成については、完全な公募の形を採り、学会誌等に公表した。

「将来の住居・住生活を展望しうる文化性・社会性に富んだ研究を中心に、更に広く建築学内外の領域分野にわたり、住生活の向上に貢献しうる研究で、学術性、実践性、社会的先見性に富んだ課題を公募することになった。一九八六年には申請数も五六件(約四〇%増)となり、研究運営委員会も選考に苦勞することになった。研究課題にもまた研究者資格にも、制限は付けていない。どうか多くの方々が申請をお出し下さるよう、お待ちする次第である。(うんの・つとむ)



# 中国の住居が箱なら、 朱 曉雲

## 日本の住居は傘……中国から見た日本の住まい

日本の住居と中国の住居の大きな相異の一つは、空間の囲み方である。中国は大陸の風土と多民族性の影響で、自衛のための石の文化が発達してきて、『壁』に対する執着心が非常に強い。したがって中国全体の防衛を目的とする万里の長城が築かれ、都市を城壁で防備し、住居の周囲にも壁を巡らす。このような壁にしっかりと囲まれた空間があれば、安心して住めないという感覚が、中国の建築を特徴づけている。

一方、日本の伝統的住居を見ると、室内と室外の間にはほとんどただ一枚の障子があるのみである。外部の光は障子の薄い白紙を透かして室内に柔かい陰を映している。また障子は取りはずすことができるので、必要に応じて、室内・室外を一体化させることも可能である。こうして、日本の住居は外部の自然に対する親和性が極めて高く、一日の変化を楽しめる空間となっている。

また、室内においては、間仕切りが全て可動式のふすまや障子で、固定した個室がほとんどない。つまり、日本の伝統的住居には壁らしい壁が存在せず、中国の住居を『箱』に例えるならば、日本の住居は『傘』のように思われる。中国人の私は、はじめでこのような空間に生活するようになった時、なんとなく落ち着かなかった。

また日本の住居と中国の住居を比べると、空間の質を示す手法の違いもかなり見られ

る。中国の場合は、空間の用途に従って、柱、梁、屋根の形式や組み方といったような構造形式が根本から違う。その上に材質、建具の装飾、色彩なども異なる。ところが日本の住居は、プラン上で各空間を明確に分けずに、同一な屋根の下におき、畳という床材や建具などの形式もほぼ決まっておき、さらに色彩もほとんど使われていないので、空間性質の表現言語は中国ほど多様ではない。それゆえに、日本では空間の相異が、主に構造材と仕上げ材の材質や手作業の精度によって表わされる。このようなことから、日本の住居はきめ細かい表情を持つことにより、日本独特の繊細な美しさが引き立てられている。私は長く日本に生活している過程で、この鋭い日本的感性を少しずつ理解できるようになり、これは日本の民族性を持っている一つのすばらしい個性であると思うようになった。

もうひとつ、日本と中国のインテリア感覚のことであるが、中国人は古くから彩色を好み、家具や用器などに限らず、柱、梁、門、窓にもよく塗色する。また家具は、シンプルでデザインよりも、模様が描かれたり、刻まれたりしたものが好きである。一方、日本の住居では、まず素材のままの木造構築と、床材としての青畳が空間の基本色調を成している。そして、座敷の生活様式から、中国的な家具はほとんど使われて

いない。それゆえに、日本のインテリアは家具よりも、造り付けの床の間や違い棚に強調され、さらに空間をへだてる屏風やついたても重要な要素として扱われている。このように、両国のインテリア感覚を言葉で表現すれば、中国が『濃』、日本が『淡』ということになる。現代の日本の家は、かなり西洋化してきているが、家具において素材そのものを大切にしている感覚が継承されている点を見ると、日本の伝統が根強く反映され、民族の個性が守られていることが理解される。今後、こうした傾向がどのように変化していくか、国際化する環境の中で注目される。

(しゅ・ぎょううん  
東京芸術大学建築科大学院茂木研究室)

\* ご投稿をお待ちしております。  
「住」に関する提案から日頃お感じになっておられることまで、研究者・実務者から市民の皆さま方の忌憚のないご投稿をお待ちしております(採用文については薄謝進呈)。  
原稿用紙(四〇〇字詰)三枚程度。原稿には住所、氏名、年齢、職業を御記入下さい。なお、内容を傷つけない範囲で一部手直しさせていただきます場合もありますので、ご諒承下さい。  
(宛て先)  
〒156 東京都世田谷区船橋4丁目29-18  
財団法人住宅総合研究財団  
すまいるん編集部「ひろば」係

すまいるん 春号 予告  
四月一日発行

### 特集「近代住居批判」

#### 住居形式考——近代住宅計画批判

〈対談〉  
聞き手・服部岑生  
山本理顕(山本理顕設計工場)  
太田博信(積水ハウス取締役東京設計部長)

〈焦点〉  
住空間の表現(仮題) 広部達也

〈私のすまいるん〉  
住まいの履歴 マルク・ブルディエ

〈すまいるんのテクノロジー〉  
床の感触 小野英哲

〈風紋〉  
世界の風土とすまいるん 藤井明

〈図書室だより〉  
植松貞夫

89 シンポジウム《住文化にみる近代化の足跡》  
〈向けて——論文〉  
現代日本住居の姿容の住文化的考察  
——第二次大戦以降の住様式について  
鈴木成文



# 「すまいろん」年間予約購読のお願い

「住」に関する研究成果の公開普及を中心に、研究者、実務者またひろく市民の皆さまの意見交流の場として、昨年までお届けしてまいりました財団会報「研究所だより」を「すまいろん」と改称、内容一新、充実をはかり、季刊とすることといたしました。

つきましては、より多くの方々にお読みいただけるよう、実費の一部を年間購読料として、ご負担をお願いすることとなりました。財団の意とするとお汲み取りのうえ、格別のご協力を切にお願い申し上げます。

●年間予約購読・ご自宅郵送制です(店頭販売は左記以外においては行なっておりません)

●建築会館資料頒布所 港区芝5-26-20  
電話(03) 456-2051  
●南洋堂書店 千代田区神田神保町1-21  
電話(03) 291-1338

●年間購読料(64年度春・夏・秋・冬号)  
2,000円(送料共)

●グループ予約の場合は次のとおり割引料金をいたします。

3人以上 一人当り1,800円(送料共)
6人以上 " 1,600円(送料共)
20人以上 " 1,400円(送料共)

●購読申込み方法  
購読申込み方法は次の何れかによってお願いいたします。

- (1) 同封の「すまいろん」購読申込書(振替用紙)を利用する。
- (2) 氏名、年令、住所、Tel、勤務(所属)先名、所在地を明記して郵便切手(小額切手で御願います)、又は現金同封の上申し込む。(領収は本誌発送を以てかえさせていただきますので別に領収書が必要な場合は注記して下さい)
- (3) グループ予約が必要な場合は人数、及び一括送り先を明記して下さい。

●3月31日までに89年度購読予約をされた方に限り、88年度冬号を無料配布いたします。

## 財団名称変更のお知らせ

本財団は昭和六三年秋に創立四〇周年を迎えました。これを期に、法人名を時代に即応し、公益事業内容を端的に表現したものとするため、左記のとおり改称いたしました。

今後は更に、研究助成、住宅建築シンポジウムをはじめ事業の充実に、また本誌の内容充実に努める所存ですので、倍旧のご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

旧法人名 財団法人新住宅普及会  
新法人名 財団法人住宅総合研究財団 (略称 住総研)

## 編集後記

最近おもしろい体験をした。  
港区の景観研究会に前後して、山形県金山町へ行った。当町で毎年実施している住宅コンクール審査のためである。例年になく早い雪の中、林寛治氏(建築家)や地元審査員たちと、金山大工が建てた住宅を十軒見て歩いた。驚いたことに対象家屋の坪数が八〇〇百坪もありながら、そこに住む家族が僅かに二人の場合が多く、昔ながらの広い座敷と二階の立派な子供室に生活の気配が感じられなかった。片や港区では

定住人口の減少を喰い止めるため、業務と居住の両立や接点を見出すことに必死になっている。新幹線のお蔭で離れた二地点を同時に見られるようになったが、都心にも地方にも住む人がいない状況に出会うという、皮肉な巡り合わせになってしまった。  
今回の中筋・松山両氏の対談の中で、廃墟についての話があった。松山氏によれば「廃墟の美しさはある時代に対する非時代性にある。今は廃墟が見えない時代」ということであった。それはその通りだが、仮に今の時代が廃墟になって、未来から振り返ったらどう見えるのか。今回の特集は、

今から未来を考えようとしたけれども、同時に進行しつつある人のいない都市や地方を、果たして未来の考古学者は正確に類推できるのだろうか。かなり非常識な頭脳を駆使しないと、説明できないだろう。未来のすまいについて夢を語れば済んだ時代もあったが、今や非常識なことを常識の範囲に戻すことが、残された道のように感じる。けれどもその責務は重い、重い重いという、打ちひしがられるじやないですが、だから軽くいきましょう!!と中筋氏流にやるのが、やはり一番良さそうである。

季刊「すまいろん」89年冬号  
一九八九年二月一日発行  
頒価 500円

発行 財団法人 住宅総合研究財団  
発行人 大坪 昭  
〒156 東京都世田谷区船橋4丁目29-8  
電話(03) 484-5381

編集委員 服部岩生(委員長)・片山和俊・松村秀一・小林秀樹・立松久昌

(財)新住宅普及会は昭和二三年、故・清水康雄氏(当時清水建設社長)が、私財の一部を基金として設立された公益法人です。住居に関わる研究助成を事業の中心とし、また、図書室、セミナー室等を公開し、研究普及活動を行なっております。この「すまいろん」のほか、「住宅建築研究報告」(年一回)、「研究報告書」(随時)を刊行しております。



発行 | 財団法人

住宅総合研究財団

〒156

東京都世田谷区船橋4丁目29-8

電話(03)484-5381

制作 | 建築思潮研究所

印刷・製本 | 凸版印刷株式会社

頒価 500円